

市内遺跡発掘調査報告書

宥勝寺裏埴輪窯跡・宥勝寺北裏

本庄新都心主地区画整理事業に伴う遺跡範囲確認調査報告書

2003

本庄市教育委員会

市内遺跡発掘調査報告書

宥勝寺裏埴輪窯跡・宥勝寺北裏

本庄新都心土地区画整理事業に伴う遺跡範囲確認調査報告書

2003

本庄市教育委員会

序

本庄市は、かつて中山道の中心的な宿場町として大きく繁栄したことはつとに知られているところですが、その歴史はきわめて古く、埋蔵文化財も本庄台地を中心に旧石器時代から中世まで時代の幅は広く、また非常に濃密な分布を見せています。とくに、本書に報告する「宥勝寺裏埴輪窯」が操業した古墳時代は、市内各所で灌漑を伴う水田開発が施工され、それとともに新たな集落が次々と造られた発展の時代であり、まさに現在の本庄市の基盤が形成された時代といえるでしょう。

そして、今また本庄市では新幹線新駅の建設が進み、やがて本庄新都心土地区画整理事業、早稲田大学リサーチパーク事業が着手され、この21世紀の初頭に新たな発展の時代を迎えようとしています。ただ、そのいっぽうにおいて、こうした大規模な開発が、埋蔵文化財に及ぼす影響についても配慮していかねばなりません。本庄市教育委員会ではこのことに鑑み、本庄新都心土地区画整理事業に先行し、域内に所在する遺跡の範囲確認調査に努めてまいりました。ここに報告する「宥勝寺裏埴輪窯・宥勝寺北裏遺跡」の範囲確認調査もそうした事業の一環です。

調査では、ほぼ完全に復原された甍形埴輪をはじめ多くの埴輪が検出されました。また、埴輪製作工房の可能性が考えられる遺構も発見され、宥勝寺裏埴輪窯が材料・燃料の採取から造形、焼成までの工程を一貫して行う埴輪製造工場であった可能性を推測させます。さらに、ここで生産された埴輪は、広く児玉郡内の古墳に供給されたと考えられ、古墳時代の流通のあり様を解明するうえでも貴重な資料であるといえます。

今後は、本書が学術研究をはじめ、さまざまな教育活動、生涯学習の場に広く活用されるとともに、将来の埋蔵文化財保護に資することを希望する次第です。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導、ご教示を賜った多くの皆様方、直接調査の労に当たられた関係各位に心よりの御礼を申し上げます。

平成15年3月

本庄市教育委員会
教育長 福島 巖

例 言

1. 本書は埼玉県本庄市大字北畑字前山2,124番地の1他に所在する有勝寺裏埴輪窯跡ならびに有勝寺北裏遺跡の範囲確認調査報告書で、有勝寺裏埴輪窯跡の埴輪窯及びその周辺に存在する関連施設についての報告を主たる目的としている。
2. 調査は、本庄市新都心地区区画整理事業計画にともない、事前に遺跡の範囲を確認することを目的として、本庄市教育委員会が実施したものである。
3. 調査は有勝寺裏埴輪窯跡ならびに有勝寺北裏遺跡の12,140㎡を対象として実施した。
4. 有勝寺裏埴輪窯跡ならびに有勝寺北裏遺跡の調査順次は、早稲田大学有勝寺北裏遺跡調査会が1978年に実施した調査をⅠ次調査とし、本庄市教育委員会が実施し、本書に報告する2次にわたる調査をⅡ・Ⅲ次調査とした。
5. 調査期間は以下のとおりである。

Ⅱ次調査 自 平成13年9月6日 至 平成13年10月25日

Ⅲ次調査 自 平成14年5月2日 至 平成14年5月25日

6. 調査担当者は以下のとおりである。

Ⅱ次調査 本庄市教育委員会社会教育課 太田博之、同 松本 完

Ⅲ次調査 本庄市教育委員会社会教育課 太田博之、同 松本 完、同 町田奈緒子

7. 範囲確認調査に関係する基準点測量は柳昭和に委託した。
8. 整理調査は平成14年2月4日から平成15年1月31日の期間で実施した。
9. 整理調査、調査記録・出土遺物の整理、図版の作製は太田、松本、町田が担当した。
10. 本書に掲載した遺物写真の撮影は町田が担当した。
11. 本書の執筆はⅠ～Ⅳ、Ⅵ-1・2の遺物に関する箇所、Ⅵ-4-(1)、Ⅷを太田が、Ⅴ、Ⅵ-1・2の遺構に関する箇所、Ⅵ-3・4-(2)を松本が担当した。

なお、埴輪胎土の自然科学分析については、筑波大学大学院松本建速氏にお世話になり、あわせて玉稿を賜った。(Ⅶ章 有勝寺裏埴輪窯跡出土埴輪の成分分析)

12. 本書の編集は太田が担当した。
13. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関係する資料は本庄市教育委員会において保管している。
14. 基本層序に関しては、埼玉県立本庄高等学校教諭中村正芳先生にご来跡いただき、丘陵部ローム層の層序、火山灰などについて種々ご教示を賜った。
15. 発掘調査から整理、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重な御助言、御指導、御協力を賜った。ご芳名を記し感謝申し上げます。(順不同・敬称略)

秋元 陽光 足立 佳代 新井 端 荒川 正夫 稲村 繁 犬木 努 入澤 雪絵 内山 敏行
江原 昌俊 大熊 季広 大谷 徹 賀来 孝代 加藤 一郎 加部 二生 金子 彰男 車崎 正彦
小池 晋禄 恋河 内昭彦 小林 修 昆 彭生 坂本 和俊 佐々木 幹雄 塩野 博 島田 孝雄
志村 哲 杉山 晋作 鈴木 徳雄 外尾 常人 田村 誠 知久 裕昭 徳山 寿樹 鳥羽 政之
長井 正欣 長瀧 歳康 中里 正憲 日高 慎 松澤 浩一 丸山 修 矢内 勲 山崎 武

16. 宍勝寺裏壇輪窓跡・宍勝寺北裏遺跡の第Ⅱ・Ⅲ次調査、整理調査及び報告書刊行にかかる本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

・平成13年度 宍勝寺裏壇輪窓跡・宍勝寺北裏遺跡第Ⅱ次調査

教 育 長 福 島 巖

〈本庄市教育委員会事務局〉

事 務 局 長 倉 林 進

社会教育課長 田中靖夫

同課長補佐 福島保雄

文化財保護係

係 長 増田一裕

主 査 我妻浩子

主 任 太田博之

臨時職員 松本 完

調査担当者

文化財保護係

主 任 太田博之

臨時職員 松本 完

・平成14年度 宍勝寺裏壇輪窓跡・宍勝寺北裏遺跡第Ⅲ次調査、整理調査及び報告書刊行

教 育 長 福 島 巖

〈本庄市教育委員会事務局〉

事 務 局 長 掛 妻 龍 一

社会教育課長 田中靖夫

同課長補佐 福島保雄

文化財保護係

係 長 増田一裕

主 査 太田博之

主 査 我妻浩子

臨時職員 松本 完

臨時職員 町田奈緒子

臨時職員 井上富美子

調査担当者

文化財保護係

主 査 太田博之

臨時職員 松本 完

臨時職員 町田奈緒子

凡 例

1. 本書所収の遺跡全体図におけるX・Y座標値は国土標準座標第IX系に基づく。各遺構における方位針は座標北を示す。
2. 本調査に用いたグリッドは、まず宍勝寺裏埴輪窯・宍勝寺北裏遺跡を含む東西1km、南北1kmの区画の内部に、1辺100mの正方形の大グリッド100区画を設定した。
大グリッドの呼称は北西隅を000とし北から南へ向かい001、002、003、004、005……西から東へ向かい010、020、030、040、050……とし北東隅を099とした。
なお、宍勝寺裏埴輪窯・宍勝寺北裏遺跡は072、073、082、083グリッドに該当する。
3. 大グリッド内部には、1辺20mの正方形の中グリッド25区画を設定した。
グリッドラインの呼称は、西から東へ向かいA、B、C、D、E……北から南へ向かい1、2、3、4、5……となる。
各グリッドはA1、A2、A3……のように、北西隅杭の呼称を当該グリッドの呼称としている。
4. 中グリッド内部には、1辺2mの正方形の小グリッド100区画を設定した。
小グリッドの呼称は北西隅を00とし北から南へ向かい01、02、03、04、05……西から東へ向かい10、20、30、40、50……とし北東隅を99とした。
本文中では大～小グリッドを合わせ [072A1-00]、[083E5-99] という呼称法をとった。
5. 本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則的に以下のとおりである。

[遺構図]	[遺物実測図]
埴輪窯…1/80	埴輪・完形資料…1/6
竪穴状遺構…1/80	埴輪・破片資料…1/4
	土師器…1/4

その他のものについては、個別にスケールを示した。
6. 遺構断面図の水準数値は海拔を示す。単位はmである。
7. 本書に掲載した土層断面図の土層番号ならび土層注記は、すべて14頁・図4に記載の土層番号ならび土層注記と同一である。
8. 観察表中の遺物の胎土の分類は以下のとおりである。
 - 1類一粗砂を多量に含み、 ϕ 5mm以上のチャート礫を疎らに含むもの。
 - 2類一精良な粘土に一定程度の砂粒の含むもの、チャート礫は含まないもの。
 - 3類一精良な粘土に砂礫をほとんど含まないもの。
9. 観察表中の遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所色票監修の新版『標準土色帖』2000年版によった。
10. 本書で使用した地形図は国土地理院発行1/50,000「高崎」、位置図は本庄市都市計画図1/2,500に加筆したものを用いた。
11. 本書の引用・参考文献は巻末に一括して記載した。

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	

I 調査に至る経過	1	(6) 2号埴輪窯灰原	36
II 遺跡の環境		(7) 3号埴輪窯	43
1 地理的環境	2	(8) 2・3号埴輪窯灰原	46
2 歴史的環境	2	(9) 4号埴輪窯	54
(1) 古 墳	2	(10) 3・4号埴輪窯灰原	54
(2) 埴輪生産遺跡	5	(11) 5号埴輪窯	57
III 既往の調査		(12) トレンチ出土遺物	59
1 踏査による表面採集	7	(13) 既存の表面採集資料	65
2 早稲田大学有勝寺北裏遺跡 調査会による調査	7	2 竪穴状遺構	
IV 調査の目的	8	(1) 遺 構	70
V 調査の方法と経過		(2) 遺 物	71
1 基本層序	10	3 方形周溝墓	
2 調査の方法	11	(1) 遺 構	73
3 調査の経過	13	(2) 遺 物	74
VI 調査の成果		4 その他の遺構と遺物	
1 埴輪窯		(1) 住居その他	77
(1) 埴輪窯の概要	17	(2) 縄文土器	77
(2) 1号埴輪窯	19	VII 有勝寺裏埴輪窯跡出土埴輪の成分分析	79
(3) 1号埴輪窯灰原	20	VIII 調査成果の検討と今後の課題	89
(4) 2号埴輪窯	34	文献	
(5) 1・2号埴輪窯灰原	35	写真	

挿図目次

図1 周辺の遺跡	3	図30 2・3号埴輪窯灰原出土土円筒埴輪拓影図(1)	47
図2 調査区位置図	9	図31 2・3号埴輪窯灰原出土土円筒埴輪拓影図(2)	48
図3 II・III次調査区トレンチ配置図	12	図32 2・3号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図(1)	50
図4 II次調査区埴輪窯トレンチ配置図	14	図33 2・3号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図(2)	51
図5 II次調査区埴輪窯全体断面図	15・16	図34 2・3号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図・拓影図(3)	53
図6 II次調査区埴輪窯全体図	17	図35 3・4号埴輪窯灰原出土土円筒埴輪拓影図	55
図7 1号埴輪窯平面図	18	図36 3・4号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図・拓影図	56
図8 1号埴輪窯断面図	19	図37 5号埴輪窯出土土円筒埴輪拓影図	57
図9 1号埴輪窯出土土円筒埴輪拓影図	20	図38 5号埴輪窯出土形象埴輪実測図・拓影図	58
図10 1号埴輪窯灰原埴輪集中位置図	21	図39 トレンチ6-8ベルト出土土円筒埴輪拓影図	59
図11 1号埴輪窯灰原埴輪集中遺物出土状況図	21	図40 トレンチ8出土土円筒埴輪拓影図	59
図12 1号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図(1)	23・24	図41 トレンチ8出土形象埴輪実測図	60
図13 1号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図(2)	25・26	図42 トレンチ9出土土円筒埴輪拓影図(1)	61
図14 1号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図(3)	27・28	図43 トレンチ9出土土円筒・朝顔形埴輪拓影図(2)	62
図15 1号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図(4)	29・30	図44 トレンチ9出土形象埴輪実測図	64
図16 1号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図(5)	31・32	図45 トレンチ15出土形象埴輪実測図	64
図17 1号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図(6)	33	図46 トレンチ21出土形象埴輪実測図	65
図18 2号埴輪窯平面図・断面図	34	図47 トレンチ21出土土師器実測図	65
図19 1・2号埴輪窯灰原出土土円筒埴輪拓影図	35	図48 II次調査区出土形象埴輪実測図	65
図20 1・2号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図	36	図49 表面採集形象埴輪実測図(1)	67
図21 2号埴輪窯灰原出土土円筒埴輪実測図	37	図50 表面採集形象埴輪実測図・拓影図(2)	68
図22 2号埴輪窯灰原出土土円筒埴輪拓影図(1)	38	図51 1号竪穴状遺構平面図・断面図	70
図23 2号埴輪窯灰原出土土円筒埴輪拓影図(2)	39	図52 2号竪穴状遺構平面図・断面図	71
図24 2号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図(1)	41	図53 1号竪穴状遺構出土形象埴輪実測図	72
図25 2号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図(2)	42	図54 II・III次調査区方形周溝基位置図	74
図26 2号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図(3)	43	図55 1号周溝墓出土土師器実測図	75
図27 3・4・5号埴輪窯平面図・横断面図	44	図56 II次調査区出土縄文土器拓影図	77
図28 3・4・5号埴輪窯縦断面図	45	図57 赤坂埴輪窯出土家形埴輪実測図	91
図29 3号埴輪窯出土土円筒埴輪拓影図	46		

写真目次

写真1上 埴輪窯の立地	下 1～2号埴輪窯確認状況
下 II次調査区埴輪窯全景	写真3上 2～5号埴輪窯確認状況
写真2上 1号埴輪窯確認状況	下 3～5号埴輪窯確認状況
2号埴輪窯確認状況	写真4 1号埴輪窯灰原埴輪集中(1～3)

写真5上	1号竪穴状遺構確認状況	1・2号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No1~4)
中	1号方形周溝墓遺構確認状況	下 1号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No6~10)
下	1号方形周溝墓遺構確認状況	1・2号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No1~4)
写真6	1号方形周溝墓遺物出土状況(1~3)	写真22上 2号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No1~12)
写真7上	1号埴輪室出土円筒埴輪	下 2号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No13~22)
	1・2号埴輪室灰原出土円筒埴輪 (No1~3)	写真23上 2号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No1~12)
	3号埴輪室出土円筒埴輪 (No1~2)	下 2号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No13~22)
下	2号埴輪室灰原出土円筒埴輪 (No1)	写真24上 2・3号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No1~15)
写真8上	2号埴輪室灰原出土円筒埴輪 (No2~9表)	下 2・3号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No16~18)
下	2号埴輪室灰原出土円筒埴輪 (No10~16表)	写真25上 2・3号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No1~15)
写真9上	2号埴輪室灰原出土円筒埴輪 (No2~9裏)	下 2・3号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No16~18)
下	2号埴輪室灰原出土円筒埴輪 (No10~16裏)	写真26上 2・3号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No19~31)
写真10上	2号埴輪室灰原出土円筒埴輪 (No17~22表)	下 3・4号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No1~11)
下	2・3号埴輪室灰原出土円筒埴輪 (No1~10表)	5号埴輪室出土形象埴輪 (No1~4)
写真11上	2号埴輪室灰原出土円筒埴輪 (No17~22裏)	写真27上 2・3号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No19~31)
下	2・3号埴輪室灰原出土円筒埴輪 (No1~10裏)	下 3・4号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No1~11)
写真12上	2・3号埴輪室灰原出土円筒埴輪 (No11~29表)	5号埴輪室出土形象埴輪 (No1~4)
下	3・4号埴輪室灰原出土円筒埴輪 (No1~10表)	写真28上 トレンチ8出土形象埴輪 (No1~3)
写真13上	2・3号埴輪室灰原出土円筒埴輪 (No11~29裏)	トレンチ9出土形象埴輪 (No1~4)
下	3・4号埴輪室灰原出土円筒埴輪 (No1~10裏)	トレンチ15出土形象埴輪
写真14上	5号埴輪室出土円筒埴輪 (No1~6表)	II次調査区出土形象埴輪
下	トレンチ6-8ベルト出土円筒埴輪(表)	下 1号竪穴状遺構出土形象埴輪 (No1~4)
	トレンチ8出土円筒埴輪 (No1~3表)	トレンチ21出土形象埴輪
	トレンチ9出土円筒埴輪 (No1~5表)	写真29上 トレンチ8出土形象埴輪 (No1~3)
写真15上	5号埴輪室出土円筒埴輪 (No1~6裏)	トレンチ9出土形象埴輪 (No1~4)
下	トレンチ6-8ベルト出土円筒埴輪(裏)	トレンチ15出土形象埴輪
	トレンチ8出土円筒埴輪 (No1~3裏)	II次調査区出土形象埴輪
	トレンチ9出土円筒埴輪 (No1~5裏)	下 1号竪穴状遺構出土形象埴輪 (No1~4)
写真16上	トレンチ9出土円筒埴輪 (No6~10表)	トレンチ21出土形象埴輪
下	トレンチ9出土円筒・朝顔形埴輪 (No11~19表)	写真30上 表面採集形象埴輪 (No1~8)
写真17上	トレンチ9出土円筒埴輪 (No6~10裏)	下 表面採集形象埴輪 (No9~20)
下	トレンチ9出土円筒・朝顔形埴輪 (No11~19裏)	写真31上 表面採集形象埴輪 (No1~8)
写真18	1号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No1)	下 表面採集形象埴輪 (No9~20)
写真19上	1号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No2)	写真32上 II次調査区出土縄文土器 (No1~8)
下	1号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No3)	下 赤坂埴輪室出土形象埴輪
写真20上	1号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No4)	写真33上 トレンチ21出土土師器 (No1・2)
下	1号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No5)	1号周溝墓出土土師器 (No1・2)
写真21上	1号埴輪室灰原出土形象埴輪 (No6~10)	下 1号周溝墓出土土師器 (No3・4)

I 調査に至る経過

平成8年5月8日付けで本市市長茂木稔から、本市大字北堀、栗崎、西富田地区において「地方拠点法に基づく新都心地区」整備の計画があり、これに関係する「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」の協議が本市教育委員会に提出された。本市市長から協議のあった新都心地区の開発計画は、上越新幹線本庄新駅周辺の土地区画整理事業であり、その総面積は約241haにおよぶ大規模なものであった。本市教育委員会で埼玉県教育委員会発行の「本市遺跡分布地図」をもとに当該開発計画予定地の埋蔵文化財包蔵地の所在を調査したところ、同地には県選定重要遺跡である有勝寺裏埴輪窯跡(53-116)、大久保山寺院跡(53-119)をはじめ34箇所、総面積96.7haにおよぶ周知の埋蔵文化財包蔵地の所在することが判明した。

本市教育委員会では、このような状況を踏まえ、平成8年5月20日付け本教社発第36号で、埼玉県教育委員会あてに当該開発計画にかかる埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行った。埼玉県教育委員会からは平成10年2月20日付け教文第1486号で「地方拠点法に基づく新都心地区にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて」の回答があり、1)本市教育委員会の方針に従い、適切に実施すること、2)新たに問題が生じた場合には、埼玉県教育委員会と協議することの見解が示された。また、本市教育委員会には、当該開発計画予定地に関する周知の埋蔵文化財包蔵地について、事前の範囲確認調査を積極的に実施するよう指導があった。

平成13年度に入り、本市から「(仮称)本庄新都心地区区画整理事業」の概要が示され、本市教育委員会では、これを受けて、平成13年10月30日付け本教社発第193号で、埼玉県教育委員会あて改めて「(仮称)本庄新都心地区区画整理事業にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて」の協議を行った。埼玉県教育委員会からは平成13年11月28日付け教文第1161号で先の協議についての回答があり、1)当該事業計画地内に所在する埋蔵文化財の保護については本市教育委員会の方針に従い、適切に実施すること、2)事業着手前に埋蔵文化財の保護に関する協定書を本市、本市教育委員会、埼玉県教育委員会の三者で締結することの指導がなされた。その後、平成14年3月20日付けで「本庄新都心地区区画整理事業地区内の埋蔵文化財の保護に関する協定書」が締結され、この中でとくに県選定重要遺跡である有勝寺裏埴輪窯跡と大久保山寺院跡については事前に詳細な試掘調査を行い、その結果歴史上あるいは学術上極めて重要な遺跡であると認められた場合は、必要な保存措置を講ずるものとする事が謳われた。

本市教育委員会では以上のような経緯を鑑み、埼玉県教育委員会の指導を受けて県選定重要遺跡及び隣接遺跡についての範囲確認調査計画を立案し、平成13年度から現地調査を実施することとなった。調査は、まず上越新幹線本庄新駅に近く、本市が土地を所有し、すでに早稲田大学の調査により一部の遺構の所在が明らかな有勝寺裏埴輪窯跡ならびに有勝寺北裏遺跡を対象とすることとし、平成13年度に有勝寺裏埴輪窯跡のうちの埴輪窯が存在する地点を中心に約3,480㎡について、平成14年度には有勝寺裏埴輪窯跡から有勝寺北裏遺跡にかけての約8,660㎡について範囲確認調査を実施した。現地調査期間は、平成13年度が9月6日から10月25日まで、平成14年度は5月2日から5月23日までであった。

II 遺跡の環境

1 地理的環境

本市市の地形は利根川右岸に広がる低地と、市街地をのせる台地とに区分される。低地部には利根川の氾濫による自然堤防が発達し、同川沿いに妻沼低地、加須低地へと連続している。いっぽう、台地部は身馴川扇状地と神流川扇状地との複合地形からなり、本庄台地と呼称され、立川期に対応するものとされる。身馴川扇状地は西側を第三系の残丘である生野山、大久保山といった児玉丘陵に、東側を松久丘陵、櫛引台地によって画され、身馴川、志戸川などが北東方向へ流れている。河川の周辺は沖積化が著しく、自然堤防状の微高地が発達し、遺跡の多くはこの上に立地している。神流川扇状地は群馬県鬼石町浄方寺付近を扇頂部とし、扇端部は上里町金久保から本市市万年寺、同市鶴森にかけて比高差6～10mの段丘崖を形成して、一部にはなお伏流水の湧出が観察される。この扇状地を開析して流れる中小河川には女堀川、男堀川などがあり、周辺には沖積地の発達が顕著である。また、段丘崖下の低地には元小山川が東流している。さらに近年、詳細な微地形の観察によって、現状では一見平坦に映る台地下面にも幾筋かの埋没谷の存在が想定されてきており、これらの地形が一般に「久城水」と呼称される野水と密接に関係するものであることが指摘されている。

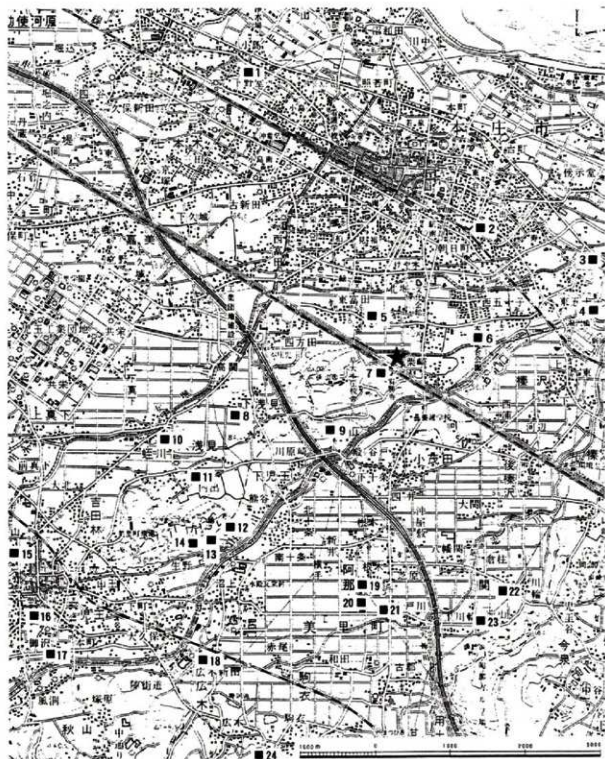
2 歴史的環境

児玉地域は地理的にも上野国に隣接し、武蔵国にありながら過去において常に隣国の影響下にあった地域であった。また、古墳時代においては美里町南志戸川遺跡、同日の森遺跡などにみる畿内系、東海系土器の流入、児玉町ミカド遺跡で推定された初期須恵器窯の存在など該期における流通・生産の中心地としての地位を占めていたと考えられる。さらには、和泉期における甕のいち早い導入に見るような先進性や本市市公御塚古墳の格子タタキ技法の円筒埴輪から想定される渡来系工人の移入も含め、その地域的特殊性についてはすでに多くの議論がなされている。以下では児玉地域の古墳の変遷と埴輪生産遺跡の現況を概観し、宥勝寺裏埴輪窯跡・北裏遺跡をめぐる歴史的環境の理解としたい。

(1) 古 墳

児玉町鷺山古墳は、現在、児玉地域において最古とされる古墳である(坂本1986)。女堀川中流域の小丘陵上に位置し、手焙形土器の破片が採集されたことにより、以前から有力な古式古墳として注目されてきたが、その後の調査の結果、全長60mの前方後方墳となることが判明した。特異な形状を呈する前方部、出土土器などから、築造は4世紀中葉以前に遡るものとされ、県内でも最古の古墳として位置づけられるようになった。しかし、出土した底部穿孔壺形土器は口縁部にも円孔を穿ち、外面調整にはハケを主体的に用いている。このことから、底部にのみ穿孔を有し、ナデ調整による壺形土器に比べ、より儀器化が進行し、かつ埴輪への傾斜を深めた段階のものとする評価も可能であろう。鷺山古墳の帰属時期は、なお検討の余地を残すといえる。

美里町長坂聖天塚古墳(径50m)は志戸川右岸の丘陵上に占地する円墳である。粘土槨と木棺直葬の計6基の埋葬施設から雲文方格規矩鏡、獸首鏡、滑石製模造品などが出土している。築造時期は



★宍勝寺裏埴輪窯跡・宍勝寺北裏遺跡 1. 旭・小島古墳群 2. 塚合古墳群 3. 赤坂埴輪窯跡 4. 東五十子古墳群 5. 公卿塚古墳 6. 西五十子古墳群 7. 前山1・2号墳 8. 巽山古墳 9. 塚本山古墳群 10. 蛭川埴輪窯跡 11. 金殿神社古墳 12. 生野山古墳群 13. 生野山9号墳 14. 生野山將軍塚古墳 15. 八幡山埴輪窯跡 16. 長沖14号墳 17. 長沖古墳群 18. 広木大町古墳群 19. 勝丸稲荷古墳 20. 道瀬山古墳 21. 志戸川古墳 22. 川輪聖天塚古墳 23. 長坂聖天塚古墳 24. 宇佐久保埴輪窯跡

図1 周辺の遺跡

鏡の型式、精製品を含む滑石製の刀子の形態などから、前期後半を降らないと考えられる。また、近隣の美里町川輪聖天塚古墳は長胴化の進行した特異な壺形埴輪を持ち、長坂聖天塚古墳に次ぐ時期の築造とされる。大久保山丘陵上に立地する本庄市北堀前山2号墳は従来、径28mの円墳とされてきたが（柿沼ほか1978）、本庄市教育委員会による2・3次調査の結果一辺30m前後の方墳となることが確認された（松本2002）。埋葬施設に粘土槨を有し、直刃鎌・剣・刀子等が出土しているほか周堀から土師器が検出されている。この北堀前山2号墳と同一尾根上の上位に位置する本庄市北堀前山1号墳は、その立地から築造時期は北堀前山2号墳を遡るものと推定される。現在は径30～40mの円墳とされるが、墳裾から南西方向の尾根上に若干の高まりを認めることから、全長60～70m程度の方後円墳となる可能性も考えられている。

本庄市旭・小島古墳群は本庄台地北縁に分布する大規模な古墳群で、前期から終末期まで、断続的な古墳の造営を認める。万年寺八幡山古墳（径43m）は、埋葬施設に箱式石棺を有することが知られていたが（本庄市1986）、近年の確認調査で石棺内から鉄剣2振が出土した。この箱式石棺は墳丘中心を大きくずれることから、同墳には未確認の中心主体部が存在すると考えられ、築造時期は前期に遡る可能性が考えられる。万年寺八幡山古墳に隣接する本庄市万年寺つつじ山古墳は一辺25mの方墳で、刀子、鎌、短冊形鉄斧などの石製模造品が出土している（南毛古墳文化研究会2001）。また、同じ方形墓の万年寺10号墓（辺24m）では石剣が出土している（並木1976）。なお、旭・小島古墳群では、最近の調査で一辺20mを超える複数の方形墓の存在が判明している。従来、これらの方形墓は「方形周溝墓」として一括理解される場合が多いが（並木1976・菅谷1976a・埼玉県1982）、これまで円墳とされてきた北堀前山2号墳が方墳であった事実が確認されたこと、万年寺つつじ山古墳、万年寺10号墓などに見るように低墳丘方形墓の副葬遺物に古墳副葬品と同様の品目が含まれていること、さらに前期の小型方墳群が列島各地に確認できることなどを考慮すれば、旭・小島古墳群中の方形墓を「方形周溝墓」として一括するこれまでの理解は再検討すべき段階に来ているといえよう。

中期前葉から中葉にかけては生野山丘陵に兎玉町生野山將軍塚古墳（径60m）、兎玉町金鑽神社古墳（径68m）、女堀川流域に本庄市公卿塚古墳（径60m）などの大型の円墳が相次いで築造される。兎玉町地方で古墳がもっとも大型化するのはこの段階であり、いずれも定型化した埴輪を持ち、生野山將軍塚古墳、金鑽神社古墳では段築・葦石の存在も確認されている。また、生野山將軍塚・金鑽神社・公卿塚の3古墳では埴輪に格子タタキ技法の存在することが知られている。生野山將軍塚での実態は明らかではないが、公卿塚ではヨコハケ及びナデ調整によるものと共伴し、金鑽神社古墳ではヨコハケを欠き、一次タテハケのみのものがこれに加わる。格子タタキ技法による埴輪についてはこれまでも初期須恵器、半島系軟質土器などとの系譜的な関係が論じられ、製作に渡来系工人の関与があった可能性は高い。

これら3古墳に比べやや規模の小さい志戸川流域の美里町志戸川古墳（径40m）、小山川上流域の兎玉町長沖157号墳（径32m）ではⅢ式の円筒埴輪を出土し、格子タタキ技法を認めない。なお、公卿塚古墳では盾、家、志戸川古墳では短甲形埴輪の草摺部分出土している。形象埴輪群全体の組成は明らかではないが、定型化した円筒埴輪とともに形象埴輪も導入されている事実を確認できる。詳細は不明ながら志戸川左岸の水田地帯に存在する美里町道灌山古墳（径40m）、同勝丸稲荷古墳（径30m）もこの頃の築造と推定される（美里町1986）。

中期後葉には前段階のような直径60mクラスの大型円墳の築造は認められず、首長墳は小山川上流の長沖14号墳(径34m)、生野山丘陵の生野山9号墳(径42m)など30~40m台の円墳となる。なお、生野山9号墳では人物埴輪、馬形埴輪の存在が確認され、同種の埴輪としては県内における出現期の資料である。また、古式群集墳もこの段階に形成を開始する。美里町塚本山古墳群の塚本山73号墳(径12m)、同77号墳(径14m)、本庄市塚合古墳群の本庄東小学校1号墳(径19m)、同2号墳(径12m)、同旭・小島古墳群の三笠山2号墳(径22m)、上前原5号墳(規模未詳)、杉の根7号墳(規模未詳)などいずれも10~20m前半台の小型円墳で、IV式の2条突帯3段構成の円筒埴輪を樹立し、TK208段階並行の土器を伴う。美里町広木大町古墳群、本庄市西五十子古墳群、同東五十子古墳群、岡部町白山古墳群などはやや遅れて、V式の円筒埴輪とTK23~47段階並行の土器を出土する群集墳である。さらに、MT15段階に造営が開始される神川町青柳古墳群では、いち早く横穴式石室を導入することが知られている。

後期後葉段階に入るとそれまで古墳の存在が知られていなかった地域にも新たに築造が開始される。とくに神流川流域の植竹・関口・元阿保・四軒在家・大御堂などの古墳群は周辺地域の開発の進展にともなってこの時期新たに出現してくる群集墳である(埼玉県教育委員会:1975)。横穴式石室を埋葬施設とする小型円墳は広木大町古墳群、塚本山古墳群、旭・小島古墳群、塚合古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群など古式群集墳中に混在あるいは隣接するように群在する事例も多い。

また、後期段階には首長墓として前方後円墳が採用されるようになる。小山川上流域では児玉町長沖古墳群の長沖25号墳(40m)、同31号墳(51m)、同秋山古墳群の秋山諏訪山古墳(60m)、同生野山古墳群の生野山鏡子塚古墳(58m)、生野山16号墳(58m)、小山川中流の岡部町四十塚古墳群の寅稲荷古墳(52m)、本庄市塚合古墳群中の大林二子山古墳(規模未詳)、同旭・小島古墳群の下野堂二子塚古墳(規模未詳)、神流川流域の神川町青柳古墳群の白岩鏡子塚古墳(46m)、中新里諏訪山古墳(42m)などが知られる。

終末期には、前方後円墳に代わる首長墓としては岡部町前原愛宕山古墳(辺37m)のような方墳(金子ほか:1973)と旭・小島古墳群の上里町浅間山古墳(径38m)のような円墳とが前方後円墳に代わる首長墓として採用されている。また各地の群集墳も後期後葉段階からの連続的な造営が確認できる。

(2) 埴輪生産遺跡

児玉地域における埴輪生産遺跡は、現在、宥勝寺北裏遺跡を含め4箇所確認されている。また、未確認ながら埴輪生産遺跡の所在を想定できる地点が複数存在している。

美里町宇佐久保埴輪窯跡は、上武山地の北東側に連なる丘陵の端部に位置し、南北を二つの小谷によって挟まれ、東方へ延びる舌状丘陵の北側裾部に占地している。埴輪窯跡は、採土により掘削された丘陵の断面で、いずれも焼土層の落ち込みとして確認されたもので、窯体の規模や構造が判明するものはない。分布調査において確認できた窯跡は12基で、丘陵裾部の切通箇所、7号窯跡の灰原が存在する。掘削による丘陵断面はさらに東西方向に延長していたが、他には窯跡を認めなかったことから、報告者はこの丘陵斜面に構築された窯の総数は、調査時に確認した12基を上回らないと予測している。窯跡の分布は3群に分かれ、東側の谷口寄りから1~6号窯と8~11号窯とが隣接して群在し、さらにその西方に60mほど離れて12号窯が単独で存在する。7号窯については、灰原との位置関

係から、焚口を谷側に向け、等高線に対し斜交して構築されていることが確認できる。各窯の操業回数、新旧関係はほとんどわからない。ただ、8～11号窯跡は切合い関係にあって、報告者は、断面の観察から、9号窯跡を群中で最新の遺構と判断している。遺物は7号窯跡の灰原で採集されている(山川ほか1981)。確認できる器種は円筒のみで、ほかに鳥の可能性が考えられる形象埴輪片が1点存在する。なお、窯跡は特定できないものの、同所では以前に馬形埴輪の破片が採集されている。なお、周辺の丘陵斜面部における埴輪窯の存否は不明で、遺跡の範囲は確定していない。

児玉町八幡山埴輪窯跡は、かつて県立児玉高等学校の敷地内に所在した埴輪窯群である。1930年、八高線敷設工事の土取り中に発見され、その際、人物埴輪、馬形埴輪などが出土した(埼玉県1982)。その後、1961年に高等学校の校地拡張工事に伴い、2基の埴輪窯を調査している。窯は「半地下式有段登窯」とされ、円筒埴輪、女子人物埴輪の頭部を検出している(柳1961)。現在、遺物の所在が明らかではなく、窯の操業年代、埴輪の型式の特徴などは不明である。

本庄市赤坂埴輪窯跡は、女堀川右岸の本庄台地北東端部に位置する。工場建設に際する整地作業中に、焼土とともに馬形埴輪が出土し、その後、工場内に機械を設置するため掘削をおこなったところ、ふたたび焼土とともに大型の馬形埴輪と家形埴輪を出土したことから埴輪窯跡の存在が想定されている(菅谷1976c)。本庄市教育委員会では、この際に出土したと考えられる家形埴輪片1点を保管している。

なお、児玉町姪川埴輪窯跡は、町立共和小学校の校庭を整地した際に、多量の埴輪と焼土が出土したとされ、埴輪窯が存在した可能性が考えられている(鈴木1983)。遺跡は、女堀川中流の右岸に発達した自然堤防上に占地する。すでに一帯の耕地整理が終了しているため、地形の原状は著しく変化し、出土地点の詳細を確認することは難しく、現在では正確な出土地点も特定できなくなっている。その後、同小学校敷地内の近接地点でも発掘調査を実施しているが、埴輪や焼土の出土を確認していない。埴輪窯跡が実在した場合でも、さほど広範囲に分布するものではないことが予測される。

また、実態は全く不明ながら美里町から大里郡阿部町にかけての山崎山周辺にも埴輪生産遺跡の存在を指摘する意見がある(橋本・佐々木ほか1980)。

児玉地域からは離れるが、東方の櫛引台地に占地する深谷市割山埴輪窯跡は多年にわたる調査により当地における拠点的な埴輪生産遺跡であることが判明しつつある。櫛引台地には、現在、数本の小河川が北流するほか、北端部には、かつて北方に開口する開析谷が発達していたと考えられている。割山埴輪窯跡の遺構は、この櫛引面の北端部に形成された開析谷の斜面部及び縁辺部に集中している。1962年の第1次調査以来、これまでに深谷市教育委員会が7次にわたる調査を実施している。第6次調査の段階までに、埴輪窯21基を検出したほか、関連する遺構として、粘土採掘場29、粘土置場2、堅穴遺構1を確認している。さらに、未報告ながら、第7次調査において、すでに埋没した開析谷の斜面部にも1群の埴輪窯の存在が確認されている。遺跡の範囲は未確定で、今後もあらたに遺構が発見される可能性は高い。窯の構造は、すべて半地下式無段登窯と考えられる。また、窯が灰原を共有し、所謂八つ手状の群集形態をとるものが多い。確認できる生産器種は、円筒、朝顔形、家、盾、鞍、大刀、柄、馬、人物など多種にわたる。操業年代は、粘土採掘場などにおいて検出した土師器の型式から、6世紀中葉から後半代と推定される。

III 既往の調査

1 踏査による表面採集

宥勝寺北裏埴輪窯跡の所在する丘陵斜面では、以前から、焼土とともに埴輪が出土することが知られ、早くから埴輪窯跡の存在が推測されていた。

菅谷浩之はそれまでの踏査によって表面採集した資料の一部を『本庄市史』資料編に報告している(菅谷1976b)。菅谷によれば、これらは同地点で長年にわたって自身が個人的に採集した資料であり、『本庄市史』資料編には髷、大刀の勾金、人物に付された鞆、馬の降泥と壺鏡各1点、器種不明の破片2点および滑石製刀子1、白玉17が図示されている。現在、本庄市教育委員会では、これら市史掲載の埴輪片以外にも形象埴輪および円筒埴輪片若干を保管しており、この中には上記資料のほか、家、鞆の破片、馬の鈴などが含まれている。

なお、上記の本庄市教育委員会保管資料については、今回の報告にあたり、『本庄市史』資料編掲載分を含め、あらためて実測図と観察記録を掲載した(VI-1-13)。

2 早稲田大学宥勝寺北裏遺跡調査会による調査

1978年7月、早稲田大学内に設けられた宥勝寺北裏遺跡調査会が調査を実施し(第1次調査)、3基の埴輪窯跡の存在を確認するとともに埴輪片を検出している(宥勝寺北裏遺跡調査会1979、橋本・佐々木ほか1980)。報告によれば、調査は、埴輪片、焼土、炭化物の分布と電気探査のデータをもとに窯跡の所在が予測される地点に2mピッチのグリッドを設けて調査がすすめられた。調査は、掘削を遺構確認面までにとどめ、表土中の遺物を採集するとともに、平面図・断面図を作成するという方法を取っている。調査の結果、標高66~69mの位置で等高線に対し、ほぼ直交するようにして3基の埴輪窯跡を検出し、北から順にそれぞれ1号窯~3号窯の名称が付された。検出した窯跡の部位は、1号窯が先端部分、2号窯が中央部分、3号窯が灰原とされている。遺構の全面を検出していないので確認はないものの、窯は3基とも煙道を尾根側に、焚口を麓側に向けて構築されていることが推測できる。なお、3号窯から南方へ26m地点まで断続的にグリッドの掘削が試みられているが、3号窯以南には窯跡が検出されていない。また、1号窯の北方へは斜面がさらに延長しているが、この方面には調査グリッドが設定されておらず、窯跡の有無は確認できていない。

遺物は、すべて確認面上層からの出土で、器種は円筒、家、鞆、人物、馬を確認できる。円筒埴輪は、すべて1次タテハケ調整のみによる個体で、段構成の判明する資料は認められない。一部に板押圧による底部調整を施す個体が存在する。これらの遺物を検討した橋本博文は、馬形埴輪の頭部成形技法が松村一昭のいう第1型式と第2型式の折衷型式で、筒状に成形した頭部本体に逆U字状に粘土板を貼付するものであることを指摘し、これを別型式として認定した(松村1969)。また、群馬県藤岡市本郷埴輪窯跡では馬形埴輪の頭部成形技法に松村の第2型式が存在するとして、埴輪生産遺跡相互の成形技法の差異に論及している。さらに、円筒埴輪は悉く2次調整を欠き、底径が小さく、突帯断面の低平化が進行していることから窯の操業年代を6世紀後半以降に推定するとともに、赤坂埴輪窯との操業期間、埴輪供給圏との関係についても注目している(橋本1980)。

IV 調査の目的

前章に見たように、早稲田大学宥勝寺北裏遺跡調査会による第1次調査では3基の埴輪窯跡の所在を確認し、あわせて出土遺物から生産器種を特定して操業年代の一端を解明することに成功するなど貴重な成果を得た。ただいっぽうで、窯跡の分布範囲をはじめとして十分な解明に至らなかった部分も多く残された。調査者のひとりである橋本博文も報告書中で、1) 窯跡の規模・構造の解明、2) 操業年代の確定、3) 窯相互の時間的前後関係の追及、4) 埴輪生産に伴う祭祀の究明、5) 付随する工房の所在確認、6) 工人集団の規模の解明、7) 円筒埴輪の製作技法・形態的特徴を基準とする類型設定と工人個人・集団の抽出、8) 考古学的観察と自然科学的手法による周辺古墳出土埴輪との比較と需給関係の究明等々多岐にわたる問題点を今後の課題として指摘している。しかしながら、窯跡の所在確認を第一の目的とした限定的な調査の性格からして、それらの課題が残されたことは、また無理からぬことであった。

本庄市教育委員会では、今次の範囲確認調査に際し、既往の調査成果とそこで指摘された諸課題を踏まえ、以下の4項目を主たる調査目的として設定した。

1) 窯の規模・総数・分布範囲の確認

第1次調査では丘陵斜面の上位に3基の埴輪窯が検出しているが、いずれも窯の一部を確認するにとどまり、窯の形状・規模は不明の状態であった。また、第1次調査では3基の埴輪窯の南側には埴輪窯の存在しないことが確認できていたが、丘陵尾根へ続く緩斜面、裾部へ連続する下位の斜面、第1次調査北方の斜面部は未調査のままとなっていた。このことから、調査では第1次調査区の再調査とともに、西・北・東側へ調査範囲を拡張し、窯の分布と総数を確認することとした。

2) 操業期間の解明

既存の出土資料から、宥勝寺裏埴輪窯跡の操業期間はすでに一部が判明しているが、複数存在する埴輪窯の操業期間の全体を明らかにする必要から、調査では窯の分布と形状を確認する作業の過程で個々の埴輪窯の操業時期を示す資料を可能な限り得よう努めることとした。

3) 工房の所在確認

各地の埴輪生産遺跡の調査成果から、埴輪窯の近傍には、焼成前までの埴輪製作の諸工程が行われる堅穴住居状の工房が存在する場合の多いことが知られている。埴輪窯が丘陵や台地の斜面部に構築されているような遺跡では、埼玉県東松山市桜山埴輪窯の調査などから、工房は丘陵の尾根上や台地上の平坦面に占地する事例のあることが判明している。このような先行調査の例から、調査では確認の範囲を丘陵上の平坦面にまで拡大し、埴輪窯に付随する工房の所在を確認することとした。

4) 埴輪胎土の自然科学的分析

埴輪胎土の自然科学的分析は、周辺の古墳や他窯との需給関係を解明するうえで有効な接近方法である。従来主流であった「蛍光X線分析」は分析対象となる成分が4ないし6元素にとどまっているため、児玉地域のように比較的狭い範囲に埴輪窯が集中するような場合、各窯間の埴輪胎土の化学的差異の把握は必ずしも十分なものはならないことが予測された。そこで、今回は「プラズマ蛍光分析」(ICP/AES)を採用し、より多くの元素を対象とした分析データを得ることを目的とした。

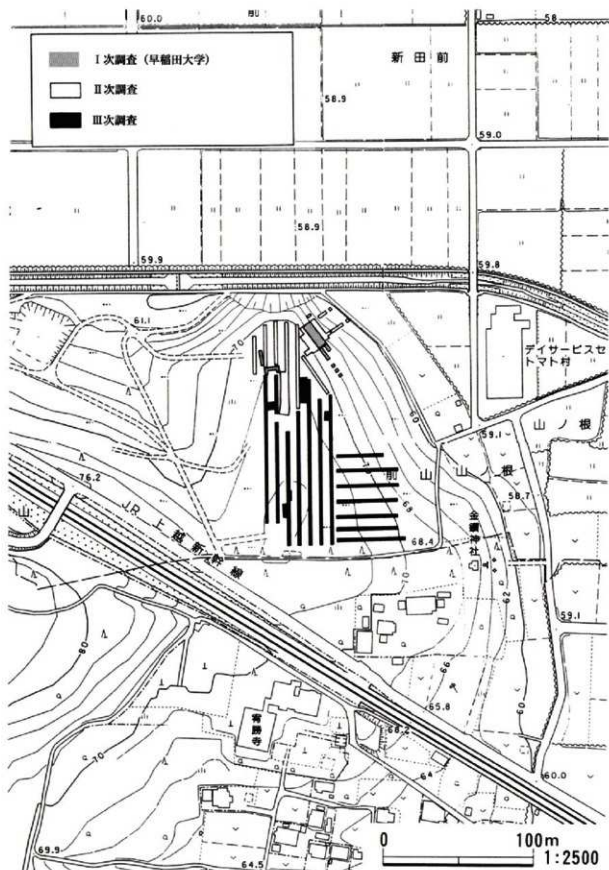


図2 調査区位置図

V 調査の方法と経過

1 基本層序

基本層序は、以下の8層に分けられる。

- I a 層：暗褐色～灰黄褐色土からなる表土層。盛土層を含む。
- I b 層：いわゆる浅間A軽石を含むさらさらした山砂様の褐色土（図4・5：3層）である。I a層も含め基本的に近世以降の堆積土である。I層全体での層厚には、8～62cmと幅がある。
- II a 層：黒褐色土を主とするか、ほぼロームと黒褐色土の混合土のみからなる土層をII a層とした。窯および灰原覆土と考えた黒褐色土が流出し、様々な割合でロームと混合した層（図4・5：5～9層）と窯の覆土（図28：4層）の2種からなる。
- 前者は、斜面下方の表土を除く多くの土層が該当し、層厚はおおよそ30～40cmである。
- 後者は、3号埴輪窯の最上層および1号埴輪窯灰原の埴輪集中の一部のみで断面観察ができた。確認した埴輪窯の範囲は、原則的に上面でとらえられた本層の分布範囲ということになる。
- II b 層：縄文時代の遺物包含層である暗褐色土層である。尾根頂部の北側一帯や窯を確認した北東斜面では見られず、III次調査を行った頂部平坦面の基部に近い一帯および東斜面にのみ残存していた。総じて上下の界線は乱れ、とくに下部は、次に記すIII層との境が不明瞭である。本層下部にまで、Y.P.（板鼻黄色軽石）が小ブロックとして混じることがあった。
- III 層：いわゆるソフトローム層である（図4・5：10層）。Y.P.と思われる白色・灰黄色の軽石の小ブロックが所々点在する。小ブロックは、III・IV層の界面からIV層上部にかけてかなりの上下幅をもって分散する。斜面の上がり際での層厚は、15cm前後であり、頂部平坦面の残りのよい所では層厚30～40cmと厚く堆積していた。
- IV 層：黄褐色のハードローム層である。斜面では、大小のハードロームのブロックが密集し、上面に著しい凹凸がみとめられた。III層との境あたりを平らに削ってゆくと、ブロック間をIII層土と同じソフトロームが充たすかに見えた。層厚は、40～50cmである。
- V 層：埴輪窯確認区の斜面上部では、水平堆積したローム層が斜めに切断された形で観察でき、下方にゆくほど下部のロームが表土下に露出する状態であった。IV層の下位には、「小豆色」の硬いロームが堆積していたが、トレンチ1では、表土層下に何枚もの砂礫層、あるいは礫の空隙にシルトの詰まった層が重畳し堆積していた。
- 深掘して、明確な層序関係を確定したわけではないが、前者の硬い「小豆色」のローム層をV層とする。
- VI 層：上記トレンチ1および尾根先端の露頭に見られるV層の下位に堆積する砂礫層をひとまずまとめてVI層とする。露頭では、ほぼ上から下まで砂礫層が重なり合い堆積する様子が観察できる。

2 調査の方法

調査方法に関しては、窯の確認調査の方法の概略を記すことにしたい。また、以下の記載にあたっては、今回の調査範囲である大久保山（浅見山丘陵）の北に張り出した支丘を、全体として支丘、尾根と呼び、上面のおおむね平坦な一帯、三方に広がる斜面を、それぞれ頂部平坦面、北東斜面、東斜面、北西斜面、西斜面と呼び分ける便宜的な呼称を用いる。

まず、調査に際しては、座標計算された基準杭にもとづき、調査範囲内全域を覆うグリッドを設定した(図3)。20m×20mの各グリッドを、北から南へA1、A2、A3……と呼称し、その各々を2m×2mのより小さなグリッドに分割し、その小グリッドを西から東へ00、10、20、30……90、北から南へ00、01、02、03……09と呼び分けた。あわせて「A1-00」、「A3-49」といった呼称法を用いた。調査範囲が狭いため、今回の調査では、トレンチ調査した頂部平坦面を除いて、20m×20mの中グリッドまでしか用いなかったが、20m×20mの中グリッドが東西、南北5個ずつで構成する100m×100mの大グリッドを、今後の周辺域での調査にそなえて用意した。

早稲田大学によるⅠ次調査（試掘調査）の結果から、斜面の傾斜に沿って並んでいたとされる3基の窯跡を再確認するために、まず斜面を横切るトレンチを設定し、掘り下げることから作業をはじめた。Ⅰ次調査の終了時、セクションベルトをのこし開掘したテストピットをそのまま埋めもどしたということであったが、実際表土を除去し掘り下げてゆくとⅠ次調査のテストピットの痕跡はほとんどみられず、トレンチ5の南東半で直角に折れる3、4cmの段差が地山にみとめられただけであった。前回の調査以降窯を覆う土壌が流出しつづけるとともに、篠竹の根の繁茂などによる攪乱や新たな土壌の流入により攪拌されつづけた結果であろう。浅いところでは、直接被覆する表土層が10cmにも満たない本遺跡の埴輪窯は、遺存状態の点で、きわめて危険な状態にあることは間違いない。

埴輪窯の全容がおおむね推定できた段階で、窯全体の遺存状態を確かめ、また窯の正確な基数、分布範囲に加えて、操業時期や製作品の特徴などをより正確に把握するための基礎資料をえるべく、トレンチを漸次追加、拡張した。焼成部から焚口部周辺にかけての部分を中心に確認した斜面上部では、比較的容易に輪郭をとらえることができたが、斜面をやや下ると埴輪片や炭化物、焼土の出土量が急激に増加するとともに、窯の輪郭をとらえることがかなり困難になった。

1～3層とした表土層下には、黒褐色土や褐色土を主とし、埴輪片や炭化物をかなり含みややしまった土壌が斜面下方まで堆積していた(図4・5)。1～3層とは截然と区別できたが、どこまでが本来の覆土であるのかということは、実際窯を掘ってみなければ確定できない。調査時の所見では、5～8層の大半は、窯や灰原本来の覆土というよりそれらが二次的に流出した土と考えられた。斜面を下った部分の窯の輪郭線は、炭化物や焼土がとくに集中する黒みの強い範囲をひとまず線引きしたものである。また斜面下方および1号窯の北東半では、さらに黒褐色土が増し、しまりが強くなった土が露出した時点で、それを暫定的に窯や灰原の覆土と認め、窯の範囲として大きく括った。

窯に直接ともなう可能性のある遺物に関しては、三次元的な測点記録を原則とし、他の遺物は、トレンチ内での小分けした出土範囲、出土層準を記し、取り上げた。1号埴輪窯に接し、靴形埴輪が折り重なるようにして出土した埴輪集中の範囲に関してのみ、出土状態を図化し、埴輪片を取り上げた。

Ⅱ次調査では、埴輪窯確認区の北側斜面および北東斜面の裾に、窯の範囲を確認するためのトレンチを設定し試掘調査を行うとともに、頂部平坦面に、工房跡などの埴輪窯関連施設の有無を確認する

ために同種作業を継続して行った。また、翌年Ⅲ次調査として、Ⅱ次調査の南側の頂部平坦面、緩斜面ほぼ全域にトレンチを設定し、やはり試掘調査を実施した。試掘調査は、重機により表土層を除去し、遺構・遺物の有無を確認する方法をとった。

3 調査の経過

Ⅱ次調査は、平成13年9月6日に、調査員、作業員一同現地に集合し、器材の搬入、テントの設営を行い、トレンチを設定する範囲内の草刈りから作業を開始した。同時に、調査に必要な基準杭の設定を業者に委託・実施し、宥勝寺裏壇輪窯跡および宥勝寺北裏遺跡の一部を含む頂部平坦面、東斜面全域にグリッドを設ける用意をした。

草刈りの終わったトレンチ2～5より手掘りによる表土剥ぎを開始し、9月12日までには、1号壇輪窯をのぞく壇輪窯のすべてを確認することができた。以降壇輪窯の全形をとらえるべく、トレンチを順次拡張、新設し、9月25日までには、北東斜面上半の窯跡の全容を把握するにいたった。トレンチ4～6を設定したあたりは、斜面の傾斜がゆるやかになり狭いながらも平場をなすらしく、壇輪窯の焚口、窯体はおおむねこの平場の斜面上方に限られるようであった。

つづいて壇輪窯および灰原の斜面下方への広がり具合を確かめるべく、トレンチ2を斜面下方のばすとともに、トレンチ12～14を設定した。トレンチ12～14では、表土層直下からおびただしい量の壇輪片が出土したため、トレンチを四分割し遺物を取りあげた。10月2日以降、土柱を残し出土位置にとどめた遺物を測点記録する作業をはじめ、10月3日には、壇輪集中と仮称した壇輪密集部分より靴形壇輪の一部を検出した。以降、測点記録により遺物を取り上げながら包含層を掘り下げつづけ、また遺物出土状態の写真撮影、土層断面図の作成などの諸作業を合間をみて行った。靴形壇輪の密集部分に関しては、図化作業を10月9日から12日まで行った。10月15日までに壇輪窯の確認作業をほぼ終え、灰原あるいは遺物集中範囲の状態をほぼとらえることができた。

なお、9月28日には、早稲田大学本庄高等学院生が、10月15日には、遺跡近くの北泉小学校6年生児童が引率教員とともに課外授業の一環として来跡したため、簡単な遺跡見学会、説明会を行った。

10月16日には、調査範囲の全景および窯跡の確認状態の写真撮影を行い、10月19日には、全体図の作成およびレベリングを行い、10月22日に、壇輪窯確認部分全体を重機により埋め戻した。

10月23日からは、頂部の平坦面にトレンチを設定し、工房などの壇輪窯関連施設を確認するための試掘調査に着手した。設定したトレンチは、トレンチ17～22とした6本で、表土の除去は、重機により行った。トレンチ20では、確認面で壇輪片が出土した住居が1軒、周溝の一部と思われる屈曲のある溝1条、トレンチ21でも周溝と思われる溝を確認した。10月25日からは、平坦面のトレンチとは別に、トレンチ1、15a・15b、16a・16bとして、壇輪窯確認範囲の北側、および斜面下方にトレンチを設定・開掘し、壇輪窯の周辺の状態を把握する作業を行った。同日トレンチを埋めもどし、現地作業をすべて終了した。Ⅱ次調査は、実働25日であった。

Ⅲ次調査は平成14年5月2日より同5月23日まで、範囲確認のための試掘調査として実施した。Ⅱ次調査でトレンチを開掘したのは頂部平坦面北半の一部であったが、Ⅲ次調査では、平坦面の残りのほぼ全域、南半の東側斜面を対象として試掘調査を行った(図2・3)。

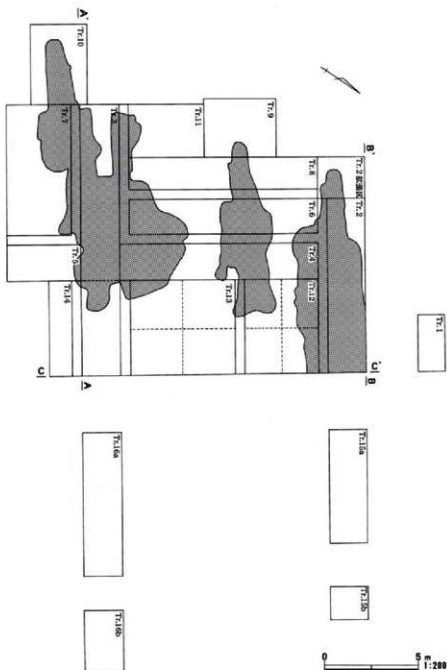


図4 II次調査区地輪窯トレンチ配置図

有勝寺裏地輪窯跡・土層注記

- 1層：灰褐色～褐色土層。蘇竹の根が繁茂するやや黒みのある褐色の表土。
- 2層：褐色土層。褐色土とやや黒みのある褐色土との混合土。近世以降の溝などの遺構覆土を含む。
- 3層：褐色土層。粘性、しまりの全くない粒子の粗い山砂様の褐色土。浅間Aと思われる軽石粒を含む。
- 4層：褐色土層。褐色土を主に、黒褐色土、ローム粒を含む。焼土、炭化物を少量、地輪片を含む。粒子が細かく、しまっており、3層とはかなり厳然と区別される。3号地輪窯の覆土最上部の土層の可能性はある。
- 5層：暗褐色土層。4層に近いが、さらに黒褐色土が多い。炭化物を所々含み、地輪片を含む。
- 6層：暗褐色土。5層に近いが、黒褐色土が多い。焼土、炭化物、小礫を少量、地輪片を含む。5層に比べ、粘性、しまりが大きい。
- 7層：褐色土。褐色土と黒褐色土が不規則な互層をなす。黒褐色土は所々雲状、縞状に混入し、6層に比べ、ラミナが明瞭である。
- 8層：褐色土。ソフトロームを主とし、黒褐色土を少量含む。
- 9層：褐色土層。褐色土を主に、黒褐色土を少量含む。
- 10層：褐色土。ソフトロームの地山。真ん中よりやや上の層準でY.P.板鼻黄色軽石と思われる白色、灰黄色の軽石、スコリアの小ブロックがかなり上下幅をもって点在する。

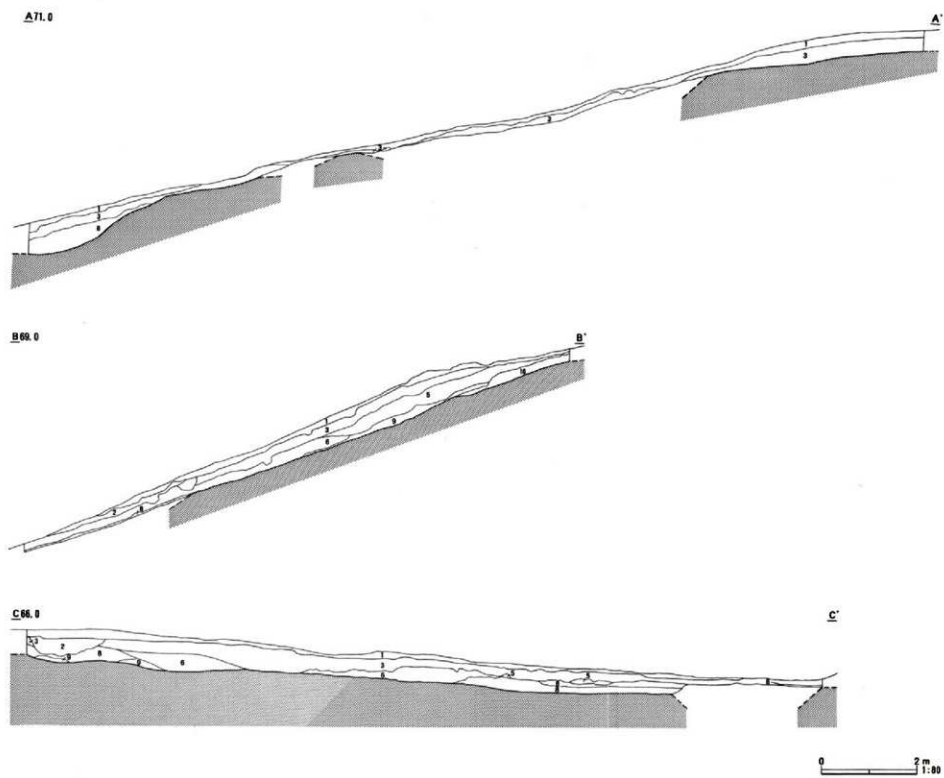


图5 II次調查区埴輪窯全体断面图

VI 調査の成果

1 埴輪窯

(1) 埴輪窯の概要

確認した埴輪窯は、5基である。早稲田大学有勝寺北裏遺跡調査会による試掘調査（1次調査）の際に付された埴輪窯の番号を生かし、北から1～3号埴輪窯と呼称した。したがって、埴輪窯の番号は、前回と同じである。ただし、今回の調査結果から、1次調査の「3号埴輪窯跡」が、2基の埴輪窯の重複例と判明したため、「3号埴輪窯跡」を3・4号埴輪窯跡の2つに分け、また4号埴輪窯と重複し、焼成部、前庭部を新たに確認した窯跡を5号埴輪窯と呼び分けた。

埴輪窯の輪郭をより明確にとらえるためには、焼土、炭化物の濃集層をさらに掘り下げる必要があったが、遺構を損壊する恐れがあったため、今回の調査では遺構にかかわる堆積土の除去を最少限にとどめた。焼成部から前庭部の過半、斜面上方にあたる部分にかけては、明瞭な掘りこみが確認できたが、前庭部の斜面下方にあたる部分から灰原にかけては、焼土、炭化物の濃集する黒褐色土、暗褐色

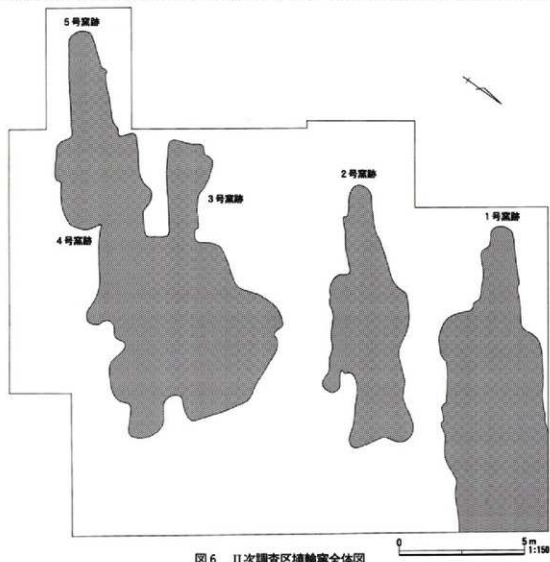


図6 II次調査区埴輪窯全体図

土の広がりをもって窯跡の範囲としており、窯跡そのものの形態をとらえ切れていない。平面形などから見て、実際の窯跡の基数は、窯がさらに重複している可能性もあり、より多くなることもあると考えている。

なお、埴輪窯の範囲確認を目的として、窯のある斜面の北側隣接地、および斜面下方にトレンチを設定、開掘し（トレンチ1、トレンチ15a・15b、16a・16b）、確認作業を行った（図4）。

北側のトレンチ1では、層厚33cmのほとんど標準土層I b層土からなる表土層下に、II a層土が層厚70cm前後で堆積しており、以下、明褐色、灰白色のシルト質土を交えた砂礫層が堆積していた。表土層および直下のII a層土には、埴輪片や焼土、炭化物が全く含まれず、II a層土の堆積時点においても強い傾斜をもった砂礫層の斜面が露出していた状態であったと考えられる。トレンチ1の北側では、先端に向って尾根全体が収束してゆくとともに、斜面の傾斜が一段と強くなっており、窯を造りうる余地はほとんどない。北端の1号埴輪窯が、今回確認した窯群の北限をなすと考えてよいであろう。

埴輪窯確認区の斜面下方に開掘したトレンチ15a・15b、16a・16bでは、なおかなりの量の埴輪片が出土したが、窯跡などの遺構を確認することはできなかった。

トレンチ15aでは、層厚11cmのI a層、層厚22cmのI b層からなる表土層の直下に、埴輪片を多量に包含する黒褐色土あるいは黒褐色土混じりのII a層土が堆積しており、トレンチ15bでは確認できた地山のロームを確認することができなかった。1号埴輪窯の灰原あるいは灰原から流出した土が、窯の下方に広範囲に広がると思われる。

トレンチ16aでは、トレンチ半ばまで埴輪片を含む黒褐色土混じりのII a層土が堆積していたが、さらに下方ではI層土がローム層の直上を覆っており、トレンチ16bでは埴輪片の出土量自体少なくなる。地山としたローム層は、いずれもロームが集塊状をなし凹凸が見られ、所々小礫を含むなど、不安定な堆積環境を示している。丘陵上のローム層との対比が困難であり、再堆積したロームである可能性がある。

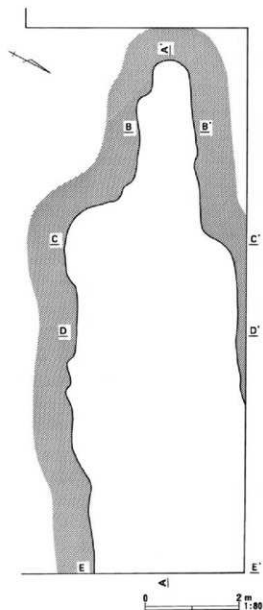


図7 1号埴輪窯平面図

(2) 1号埴輪窯

a. 遺構 (図7・8、写真2)

埴輪窯確認区の北端で確認した埴輪窯で、082A2-23・24グリッドを中心に位置する。焼成部から前庭部にかけて輪郭が明確にとらえられた範囲の確認面は、Ⅲ層上面で、現地表面から確認面までの深さは16~80cmである。斜面下方に広がる部分は、埴輪片を多量に含む灰原および流出した覆土を主とする包含層の範囲であり、窯跡本来の形態を示すのは、斜面上方の部分であろう。確認した全長は灰原を含め10.83mである。前庭部が斜面途中におさまるとすれば、平面形は、隅の丸い方形あるいは長方形の前庭部に細長い焼成部のつく形態と推定される。焼成部の長さは2.9~3.7m、幅は0.79~1.23m、前庭部の幅は3.38~3.68mである。中心軸の方向は、S-55°-Wである。

窯より上の堆積土は、8層に分層される。斜面上方では、多く流出した土壌からなる厚い堆積土が窯を覆っていた。とくに焼成部から前庭部にかけて3層が厚く堆積しており、斜面半ばの傾斜の弱い場所に前庭部が造られ、後代までそこが火山灰などが溜まりやすい場所であったことを物語っている。上面での観察になるが、窯の覆土は、焼成部では、ロームの多い褐色土あるいは暗褐色土、前庭部で

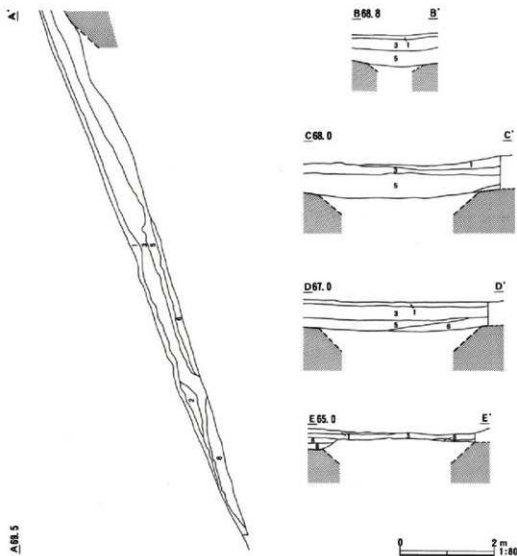


図8 1号埴輪窯断面図

は、炭化物をやや含む黒褐色土で、焼土はあまり多くなかった。この黒褐色土が流出したのかもしれない土が斜面下方にまで広がるようであり、本窯の下方に設定したトレンチ15a・15bにおいても埴輪片を多量に含む黒褐色土を確認している。

b. 遺物

1号埴輪窯焼成部に関するトレンチ2の尾根寄りの部分では下方の灰原部分に比べ、遺物の出土量も少なく、また細片が多かった。窯の覆土から検出した遺物も同様で円筒埴輪の破片も若干存在するのみである。

円筒埴輪 (図9、写真7)

図示した資料は円筒埴輪の口縁部の破片で、推定される口径から2条突帯3段構成品であると考えられる。内外面とも細かいハケ調整を施す。口唇部には強いナデを加え、口唇端面と内面は凹面をなす。胎土は精良で、礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。

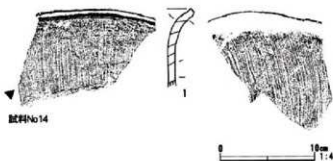


図9 1号埴輪窯出土円筒埴輪拓影図

1号埴輪窯出土円筒埴輪観察表

番号	器種	部 位	外面調整・ハケ本数/2cm	内面調整・ハケ本数/2cm	胎土	焼 成	色 調	備 考
1	円筒	第 3 段	1次タテハケ・14	ナメハケ・14	3類	良 好	橙 色(5YR6/6)	分析試料No14

(3) 1号埴輪窯灰原

1号埴輪窯の前庭部以下の斜面では、灰原が発達し多量の埴輪片が出土している。とくに前庭部付近と考えられる一角に形象埴輪片が集中する地点(埴輪集中)が存在する。

埴輪集中 (図10・11、写真4)

埴輪集中は1号埴輪窯の焼成部左下方にあって、焼成部の外面確認線が左右に大きく広がり、前底部と推測される部位から灰原にかけての左側外面確認線をまたぐように分布している。大型の破片が多く、焼成後に窯から取り出された不良製品が何らかの理由により破碎されず、前底部の脇にまとめ置いたような出土状態であった。埴輪片には一定のレベル差があり、浅い土壌状の落ち込みの内部に投棄したか、あるいは窯の前底部付近の傾斜面に遺棄したものと推測される。図示した資料のうちでは髷[1]、靱[2~6]が当該地点からの出土である。欠失する部分も多いが、靱2~5の4個体はほぼ同形同大のものと推測できる。

形象埴輪 [1~10] (図12~17、写真18~21)

髷 [1] (図12、写真18)

基部と円筒台部上半の一部及び髷本体の大半が欠失している。横輪により円筒形の台部を成形する。台部は中位に1条の突帯がめぐる。突帯直下の左右に小型の透孔を1対穿つ。外面は縦方向のハケを、内面は縦方向のナデ全体に施す。円筒台部の上端には1条の突帯をめぐらせ、上面をドーム状にいったん絞り込んで、その上に髷本体を造形している。髷本体は板状で基部からいったん水平方向に張り

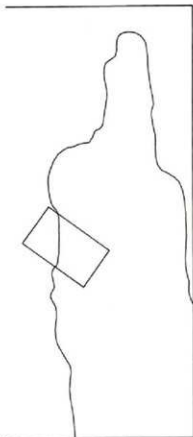


図10 1号埴輪窯灰原埴輪集中位置図

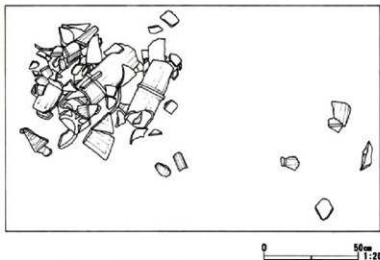


図11 1号埴輪窯灰原埴輪集中遺物出土状況図

出し、角を形成してやや開き気味に上方へ立ち上がる。調整は表裏ともやや粗い不定法のハケを施し、縁辺部にはナデを加えている。表面には放射状に直線を線刻している。残存部位が少ないため確言はできないが、直線で区画した内側にはさらに線刻を加えてはいないようである。裏面には2本の粘土帯を「V」状に貼付している。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。

靱 [2] (図13、写真19)

基部、靱本体の背面上半と正面右上端及び右背負板のすべてを欠失している。輪積により円筒形の台部を成形し、中位に1条の突帯がめぐる。外面は縦方向のハケにより、内面は縦方向のナデにより調整している。突帯直下の左右に小型の透孔を1対穿つ。靱本体にはほぼ全面に粗いハケにより調整を加えている。下半部は左右に長い三角形を呈する罎状の板を貼付し、正面下端部には直下の突帯にかかるように幅広の粘土帯を貼付する。上半部との境界には断面三角形の突帯状の粘土紐を加える。残存する左背負板の中央には斜方向に並行して直線2条の線刻が入る。背負紐は靱本体の左右上端から垂下し、上半部の中央で交差する。背負紐交差点から左右斜下方に結び目の輪を表す。靱本体上端の円形の粘土粒が2個残存している。元来は4～5個存在したらしい。鏝は逆台形の粘土板に5本の粘土紐を貼付して立体的に表現し、上端近くにヘラ状工具で「ハ」状にキザミを入れ鏝身部を示す。裏面には2本の粘土帯を「V」状に貼付している。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。

靱 [3] (図14、写真19)

台部の大半、靱本体下半の一部及び左右の背負板を欠失している。輪積により円筒形の台部を成形し、中位に1条の突帯がめぐる。外面は縦方向のハケにより、内面は縦方向のナデにより調整している。突帯直下の左右に小型の透孔を1対穿つ。靱本体は外面に粗いハケ、内面は縦方向のナデにより調整を加えている。下半部は左右に長い三角形を呈する罎状の板を貼付し、正面下端部には直下の突帯にかかるように幅広の粘土帯を貼付する。上半部との境界には断面三角形の突帯状の粘土紐を加え

る。残存する左背負板の中央には斜方向に並行して直線2条の線刻が入る。背負紐は靱本体の左右上端から垂下し、上半部の中央で交差する。背負紐交差点から左右斜下方に結び目の輪を表す。靱本体上端の円形の粘土粒が2個残存している。鎌は逆台形の粘土板に5本の粘土紐を貼付して立体的に表現し、上端近くにヘラ状工具で「ハ」状にキザミを入れ鎌身部を示す。裏面には2本の粘土帯を「ハ」状に貼付している。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。

靱 [4] (図15、写真20)

台部の一部、靱本体の左半部、左右の背負板、鎌のすべてを欠失している。輪積により円筒形の台部を成形し、中位に1条の突帯がめぐる。基部は粘土板を表裏に2枚を合せて成形する。外面は縦方向のハケにより、内面は縦方向のナデにより調整している。突帯直下の左右に小型の透孔を1対穿つ。靱本体は外面に粗いハケ、内面は縦方向のナデにより調整を加えている。下半部は左右に長い三角形を呈する鱗状の板を貼付し、正面下端部には直下の突帯にかかるように幅広の粘土帯を貼付する。上半部との境界には断面三角形の突帯状の粘土紐を加えている。靱本体上端の円形の粘土粒が1個残存している。背負紐の原状は明らかではないが、他の個体と同様と思われる。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。

靱 [5] (図16、写真20)

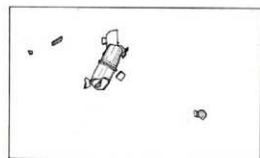
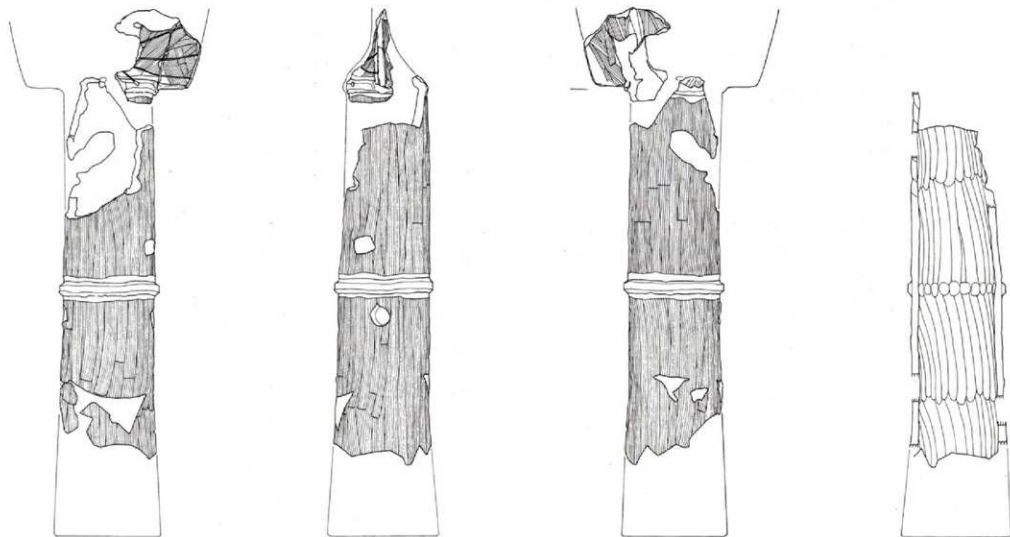
台部と、靱本体の正面下半部、左右の背負板を欠失している。輪積により円筒形の台部を成形し、中位に1条の突帯がめぐる。外面はタテ方向のハケにより、内面は縦方向のナデにより調整している。突帯直下の左右に小型の透孔を1対穿つ。靱本体は外面に粗いハケ、内面は縦方向のナデにより調整を加えている。下半部は左右に長い三角形を呈する鱗状の板を貼付し、正面下端部には直下の突帯に一部かかるように幅広の粘土帯を貼付する。上半部との境界には断面三角形の突帯状の粘土紐を加える。背負紐は靱本体の左上端から垂下し、上半部の中央で交差する。背負紐交差点から左右斜下方に結び目の輪を表す。靱本体上端の円形の粘土粒が3個残存している。鎌を表現する線刻の下端はこの粘土粒の上半にまで及んでいる。鎌の本数からすると元来は4個存在したものと推測される。鎌は2・3と異なり、逆台形の粘土板に4本の矢印状の線刻を加えて表現している。裏面には2本の粘土帯を「ハ」状に貼付している。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。

靱 [6・7] (図17、写真21)

6は靱本体から剥落した左の背負板である。靱本体へは接合部を肥厚させ、直接表面に貼付している。靱本体には調整には不定方向のハケとナデを施し、さらに縁辺部にはナデを加えている。原形は2～5の靱と同形の製品であった可能性が高い。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。7も靱の可能性が高い破片である。胎土は精良で、若干の微細な砂粒を含む。焼成は良好であるが表面は還元化している。色調は黄褐色(2.5YR5/3)を呈する。

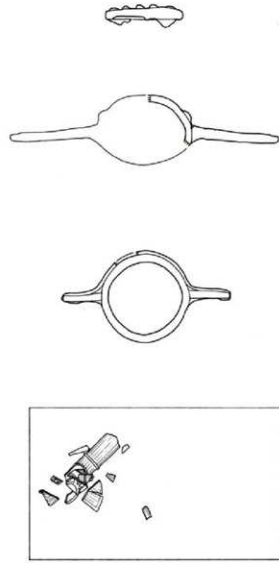
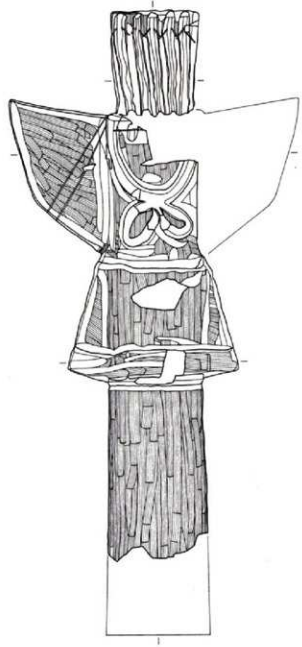
馬 [8～10] (図17、写真21)

8は十字文楕円形鏡板の一部である。地板の表面には粗いハケをナデ残している。また、裏側の剥離面には作業台の木目圧痕を観察できる。楕円形の粘土板の上面に粘土紐で縁金と十字文を表し、縁金と十字文の交点とその中間、十字文中央の交点の上面に円形の粘土粒で銚を表現する。9は面繫の



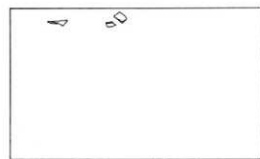
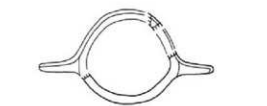
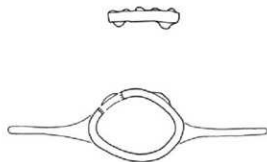
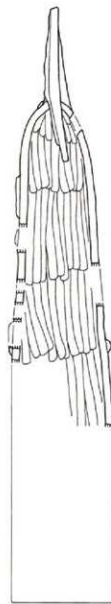
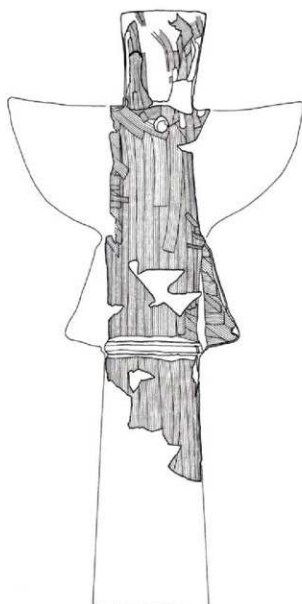
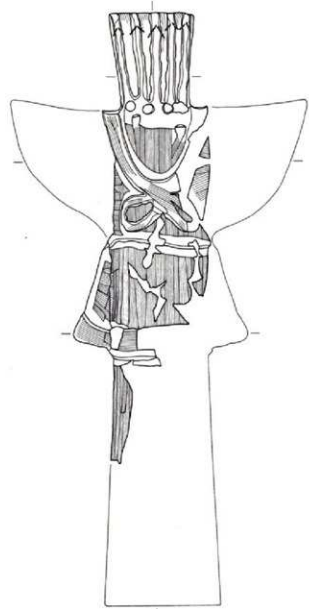
1号埴輪窯灰原出土形象埴輪突測(圖1)

图12 1号埴輪窯灰原出土形象埴輪突測(圖1) [1/6]



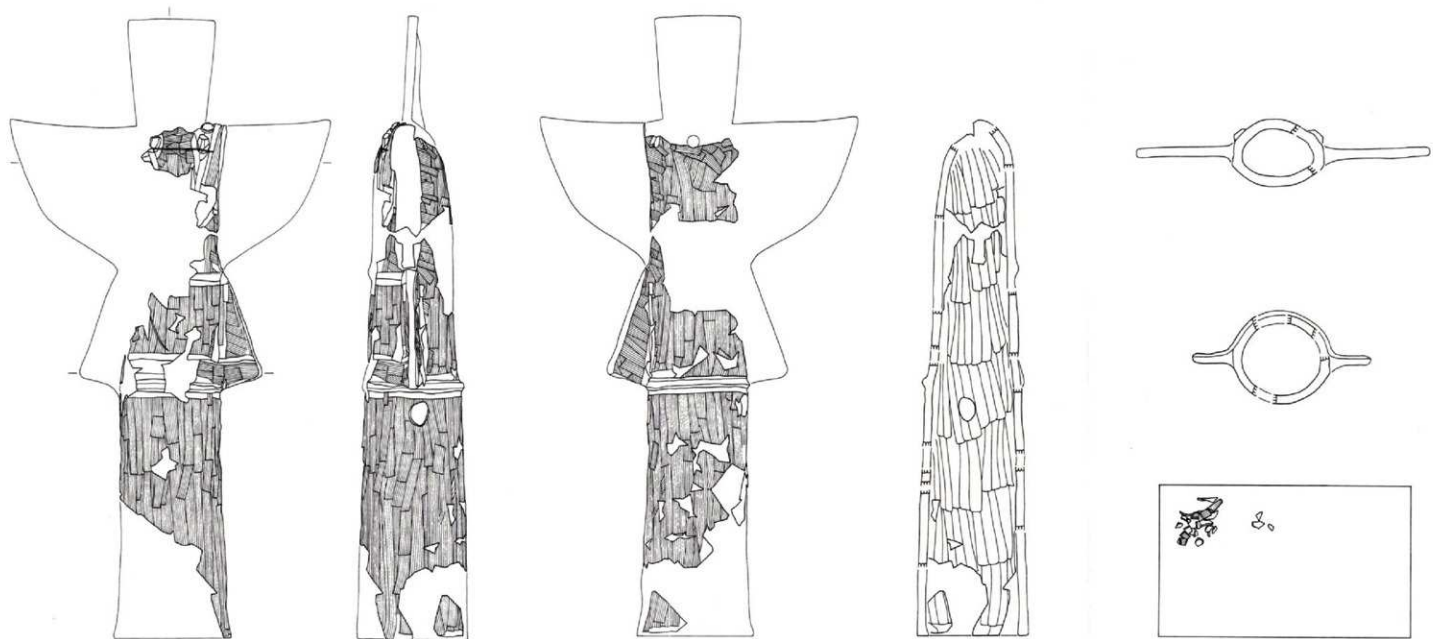
1号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測图2

图13 1号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測图2 [1/6]



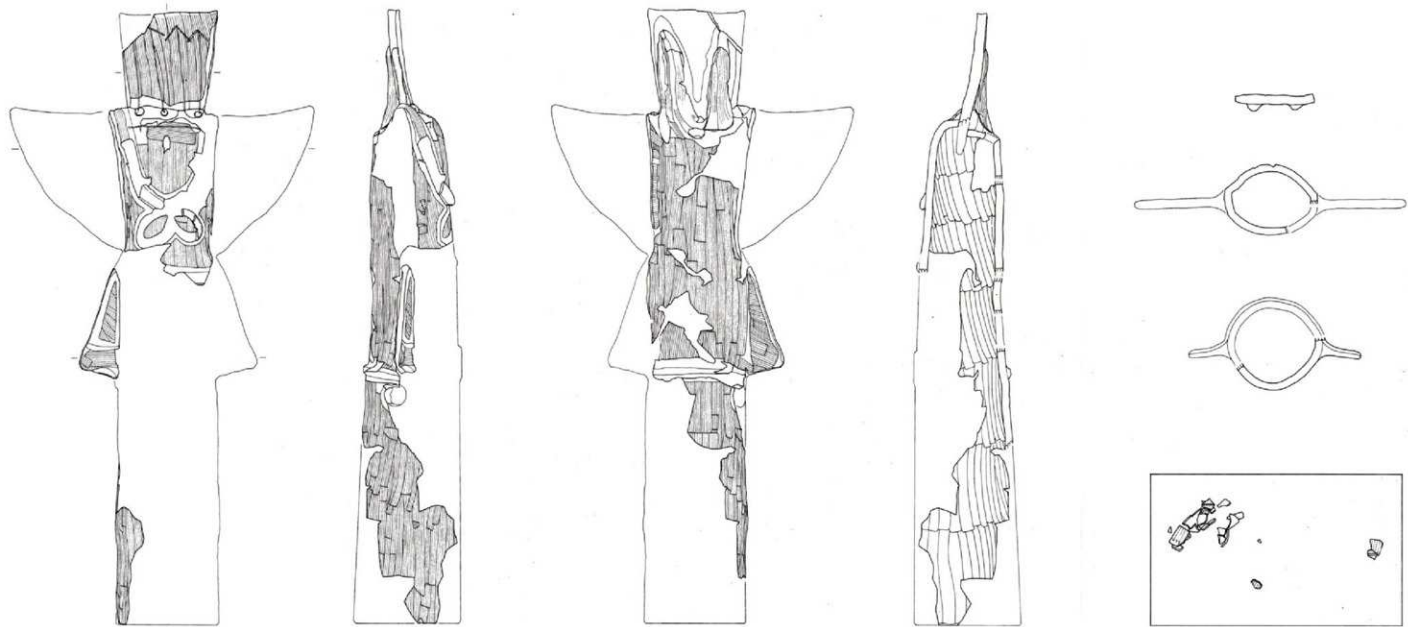
1号埴輪窯灰原埴輪集中

图14 1号埴輪窯灰原出土形象埴輪类测图3 [1/6]



1号埴輪窯灰原出土形象埴輪集中

图15 1号埴輪窯灰原出土形象埴輪美測图(4) [1/6]



1号埴輪窯灰原埴輪集中

图16 1号埴輪窯灰原出土形象埴輪實測圖5 [1/6]

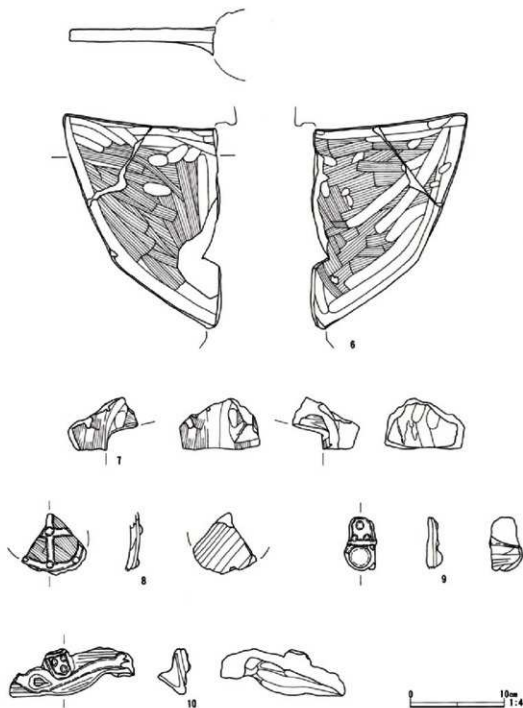


図17 1号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図(6)

半球形辻金具である。舌状の脚の1方のみが残る。調整は全面に丁寧なナデが施されている。半球部の裾には細い粘土紐がめぐり、脚との境界には資金具を表している。脚には円形の粘土粒を貼付して3個の銚を表現する。10は右下顎周辺の破片である。中央に面繫の辻金具の脚が残る。脚の先端部は角をもち、三角形を呈する。9の脚先端部とは形状が異なる。脚上面には粘土紐と粘土粒で資金具と銚を表現する。下縁に沿って引手壺と手綱を表す。いずれも胎土は精良で、若干の微細な砂粒含む。焼成は良好である。色調は8・9が橙色(5YR7/6)、10が明赤褐色(2.5YR5/6)を呈する。

(4) 2号埴輪窯

a. 遺構 (図18、写真2・3)

埴輪窯確認区の北寄りで確認した窯で、082A1-23・24グリッドを中心に位置する。確認面はⅢ層上面で、現地表面から確認面までの深さは8～45cmである。斜面下方に広がる部分は、埴輪片や炭化物、焼土を多量を含む灰原などの範囲であり、窯本来の形態を残すのは、斜面上方の部分である。確認し

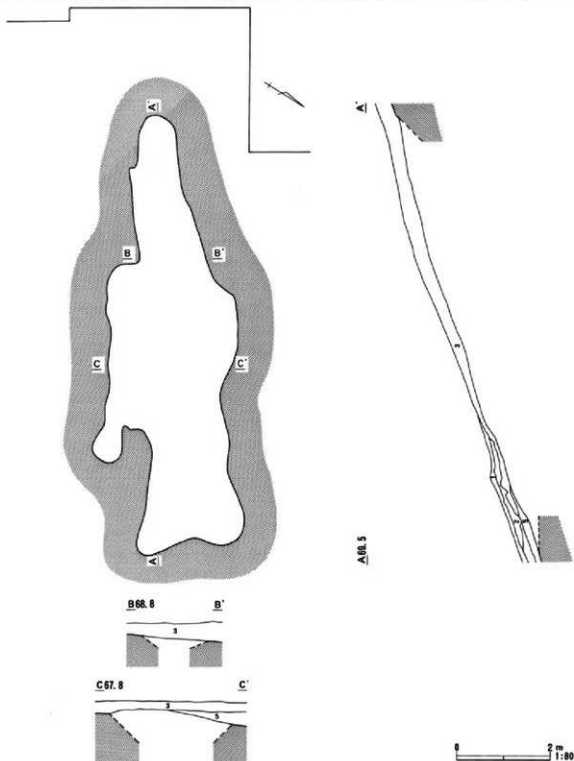


図18 2号埴輪窯平面図・断面図

た全長は9.29mである。確認できたのはやや不規則な形であるが、南東縁は途中舌状に小さく突出した後屈曲してすぼまるかに見え、あるいは実際の前庭部はこの部分までなのかもしれない。この場合、焼成部も含めた窯本体の全長は、6.6m前後となる。いずれにせよ、平面形は、隅の丸い方形あるいは長方形の前庭部に細長い焼成部のつく形態となろう。焼成部の長さは3.1m前後、幅は0.82~1.38cm、前庭部の幅は2.36~2.72mである。中心軸の方向は、S-54°-Wである。

窯より上の堆積土は、6層に分けられる。斜面上方では、浅間A軽石を多く含む3層が厚く覆っている。斜面下方では、黄褐色土と褐色土、暗褐色土とが交互に堆積しており、どこまでが本来の窯跡と直接かかわる堆積土なのか判別することが困難であった。とくに前庭部から灰原にかけては、強くしまった黒褐色土、暗褐色土を主とする土が露出した時点で確認面としたため、窯跡そのものの輪郭をとらえるにはいたらなかった。上面観になるが、窯の覆土は、焼成部では、ロームの多い褐色土、前庭部の手前側、斜面下方にゆくほど黒みが強くなり、炭化物、焼土を、多く含むようであった。

b. 遺物

2号墳輪窯焼成部はトレンチ8・9において検出したが、焼成部の直上面に及び覆土から出土した遺物は細片が多く、また量もわずかであった。器種は円筒埴輪のほかに、形象埴輪の小片もわずかに認める。トレンチ8・9の上層からは一定量の円筒埴輪片が出土しているが、焼成部の直上面付近の出土量がわずかであることを考えると、これら上層出土遺物が2号墳輪窯に帰属するという確証はない。

(5) 1・2号墳輪窯灰原

トレンチ12において検出した1号墳輪窯及び2号墳輪窯の灰原確認面の上位層から出土した遺物である。両窯の灰原は、トレンチ12内の上層において重複しており、出土した個々の遺物が帰属すべき遺構については不明であることから、1・2号墳輪窯灰原出土として一括で扱うこととする。

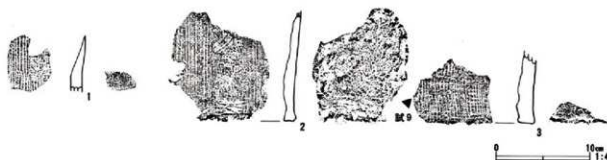


図19 1・2号墳輪窯灰原出土円筒埴輪拓影図

1・2号墳輪窯灰原出土円筒埴輪観察表

番号	器種	部位	外面調整・ハケ本数/2cm	内面調整・ハケ本数/2cm	胎土	焼成	色調	備考
1	円筒	不明	1次タテハケ・8	タテナデ	3類	良好	明赤褐色(5YR5/6)	
2	円筒	第1段	1次タテハケ・14	刺彫	3類	良好	橙褐色(5YR6/6)	
3	円筒	第1段	1次タテハケ・6	タテナデ	3類	顕著質	鈍い黄褐色(10YR6/3)	分析試料№9

円筒埴輪 (図19、写真7)

いずれも小片で、1・2号窯と同様に2条突帯3段構成の円筒埴輪の破片と考えられる。2・3は基底部の破片であるが、底部調整は観察できない。胎土は1・2が精良で、砂礫をほとんど含まないのに対し、3は若干の微細な砂粒含む。焼成は良好であるが、3は全体が還元化し、色調もぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。

形象埴輪 (図20、写真21)

馬 [1~4]

1は鬣の一部と考えられる一方の面はナナメハケののち縁辺部と端面に丁寧なナデを施している。他の一方の面は器面の荒れが著しく調整の観察が難しい。胎土は精良で、若干の微細な砂粒含む。焼成は良好である。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。2は耳の付根から鬣にかけての部位である。耳が根元から欠落している。耳の付根に面皸の剝離痕を認める。鬣は頸部を切開し、基部を挿入して成形している。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は橙色(2.5YR6/6)を呈する。3は鞍の後輪の下端部である。胴部本体から剝離し、左右の別は定かではない。全面に丁寧なナデ調整を加えている。焼成は良好である。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。4は胴の一部と考えられる。平板な粘土板の上面に丁寧なナデ調整を加え、粘土紐を貼付したのちへら状工具の先端で連続刺突を加えて繫の草紐を表現している。裏面には粗いナデ調整を施す。胎土は精良で、若干の微細な砂粒含む。焼成は良好である。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。

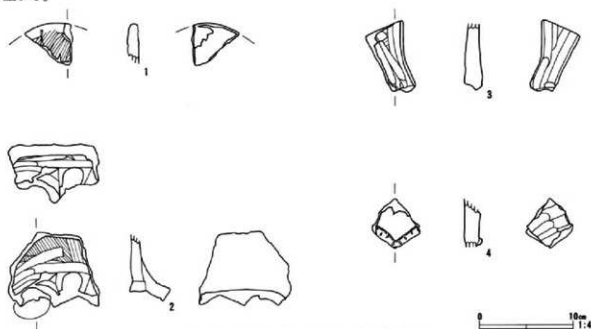


図20 1・2号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図

(6) 2号埴輪窯灰原

トレンチ4・6・12・13において検出した2号窯の灰原確認面で出土した遺物である。円筒埴輪、形象埴輪ともに出土量が多く、とくにトレンチ4とトレンチ12の南半に集中する傾向を認める(図4)。1号埴輪窯灰原埴輪集中のような全形の判明する資料は認めないが、その他の地点に比べ大型の破片が多く含まれる。

円筒埴輪 [1~22] (図21~23、写真7~11)

1は今回の調査で出土した円筒埴輪のなかで確実に段構成の判明する唯一の資料である。2条突帯3段構成の製品で、第1段下部を欠失するため段構成比は不明であるが、第2段幅に比べ第1段幅が広く、第3段幅の狭いや細長い形状を呈するものと推測される。外面は1次タテハケのみによる調整で、2次調整を認めない。内面は縦及び斜方向のナデで、一部に輪痕を残す。突帯断面はやや偏平化した台形を呈し、第2段に1対の円形透孔を穿つ。胎土は精良で、若干の微細な砂粒を含む。焼成は良好であるが部分的に還元化している。色調はにぶい黄橙色

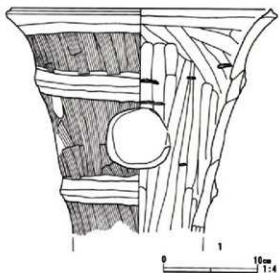


図21 2号埴輪麻原出土円筒埴輪実測図

(10YR6/4)を呈する。2~22はすべて破片資料であるが、湾曲の度合いから見て大型品は含まれず、いずれも2条突帯3段構成品の破片である。外面調整はすべて1次タテハケにより、確認できる透孔は円形のみである。2には二重線による弧状の線刻を認める。

形象埴輪 [1~22] (図24~26、写真22・23)

家 [1~6] (図24、写真22・23)

1は入母屋造の家の妻部である。妻側に大型の円形付文が付く。胎土は粗砂を多量に含み、内面は還元化している。色調は橙色(7.5YR6/8)を呈する。2は壁の角の部位にあたり、3~6は壁面から剥落した突帯の一部である。胎土は2~4が精良で、若干の微細な砂粒を含むのに対し、5・6は粗砂を多量に含み還元化している。色調は2~4が橙色(5YR6/6)、5・6がにぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。靴 [7] (図24、写真22・23)

背負板の一部と考えられる。横方向に粗いハケを施し、上端部にナデを加えている。側端面は板状の工具で強くナデ付けたように平滑となっている。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は橙色(2.5YR6/6)を呈する。

大刀の柄頭 [8] (図25、写真22・23)

玉置大刀の柄頭で、上面を粗いハケ、下面をナデにより調整している。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は橙色(2.5YR6/6)を呈する。

馬 [9~15] (図25、写真22・23)

9は鼻面の右側方にあたる部位で細かいハケ調整を加えた上に環状鏡板を表現する。10は右耳周辺の部位で、耳の付根の周囲に面皸の剝離痕を認める。鬣は後頸部を切開して挿入している。11は鬣の一部である。両面とも細かいハケとナデにより調整をおこなっている。12は尻の一部で、尻鬣の剝離痕を認める。剝離痕の中央にはへら先による列点状の刺突が残る。13は尻部から脱落した尾で、先端を「T」字状に造形している。14は鞍橋の一部で、両面とも粗いハケ調整を施す。15は左側障泥の下半部で、外面は不定方向のハケ及びナデ、裏面は不定方向のナデにより調整している。障泥の表面には覆輪、鏡の表現を認めない。11以外はいずれも胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良

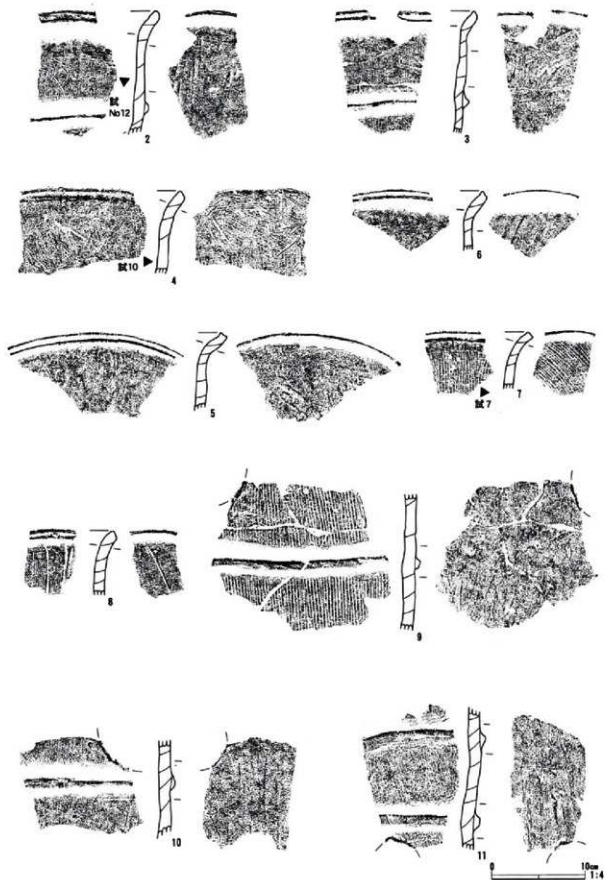


图22 2号埴輪窯灰原出土円筒埴輪拓影(1)

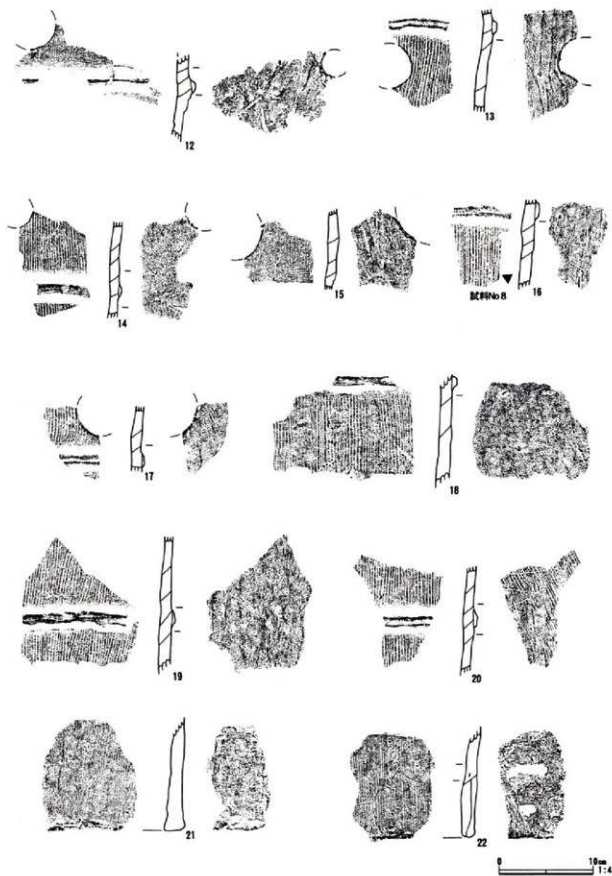


图23 2号埴輪窯灰原出土円筒埴輪拓影图(2)

2号埴輪窯灰原出土円筒埴輪観察表

番号	器種	部位	外面調整・ハケ本数/2cm	内面調整・ハケ本数/2cm	胎土	焼成	色調	備考
1	円筒	第1～3段	1次タテハケ・18	タテナデ、ナナメナデ	1類	良好	橙 色(7.5YR6/6)	円形透孔。内面輪槽状。
2	円筒	第2・3段	1次タテハケ・18	タテハケ・18 ナナメナデ	3類	良好	明赤褐色(5YR5/8)	外面線刻。 分析試料№12
3	円筒	第2・3段	1次タテハケ・18	ナナメハケ・18 タテナデ、ヨコナデ	3類	良好	明赤褐色(2.5Y5/6)	
4	円筒	第3段	1次タテハケ・10	ヨコ、ナナメハケ・10 タテナデ	2類	良好	橙 色(5YR6/8)	内面線刻。 分析試料№10
5	円筒	第3段	1次タテハケ・18	タテナデ、ナナメナデ	1類	良好	橙 色(7.5YR6/6)	
6	円筒	第3段	1次タテハケ・20	ナナメハケ・20	2類	良好	橙 色(7.5YR6/8)	
7	円筒	第3段	1次タテハケ・20	タテナデ	3類	良好	橙 色(7.5YR6/6)	分析試料№7
8	円筒	第3段	1次タテハケ・20	タテハケ・20 ナナメハケ	1類	良好	鈍い黄褐色(10YR7/4)	
9	円筒	第1・2段	1次タテハケ・8	タテナデ、ナナメナデ	2類	良好	明黄褐色(10YR6/6)	円形透孔。
10	円筒	第1・2段	1次タテハケ・20	タテナデ、ナナメナデ	2類	良好	明黄褐色(10YR6/6)	円形透孔。
11	円筒	第2～4段	1次タテハケ・20	ナナメハケ・20 タテナデ、ナナメナデ	1類	良好	黄褐色(2.5Y5/3)	円形透孔。
12	円筒	第1・2段	1次タテハケ・20	ナナメハケ・20 タテナデ、ナナメナデ	3類	良好	明褐色(7.5YR5/6)	円形透孔。
13	円筒	第2・3段	1次タテハケ・6	タテナデ	3類	良好	橙 色(7.5YR6/6)	円形透孔。
14	円筒	第1・2段	1次タテハケ・8	タテナデ、ナナメナデ	2類	良好	明黄褐色(10YR6/6)	円形透孔。
15	円筒	第2段	1次タテハケ・20	タテナデ、ナナメナデ	3類	良好	明赤褐色(5YR5/6)	円形透孔。
16	円筒	不 明	1次タテハケ・8	タテナデ	3類	良好	鈍い黄褐色(10YR6/6)	
17	円筒	第1・2段	1次タテハケ・8	タテナデ	2類	良好	黄褐色(2.5Y5/3)	円形透孔。
18	円筒	不 明	1次タテハケ・8	タテナデ	2類	良好	橙 色(7.5YR6/6)	
19	円筒	第1・2段	1次タテハケ・8	タテナデ	2類	良好	鈍い黄褐色(10YR6/4)	
20	円筒	第2・3段	1次タテハケ・7	タテハケ・7 タテナデ	1類	良好	橙 色(7.5YR6/6)	分析試料№4
21	円筒	第1段	1次タテハケ・18	タテナデ	3類	良好	橙 色(5YR6/6)	
22	円筒	第1段	1次タテハケ・18	タテナデ	3類	良好	橙 色(5YR6/6)	

好である。色調は橙色(2.5YR6/6)を呈する。11は粗砂をやや多く含み、一部還元化してる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

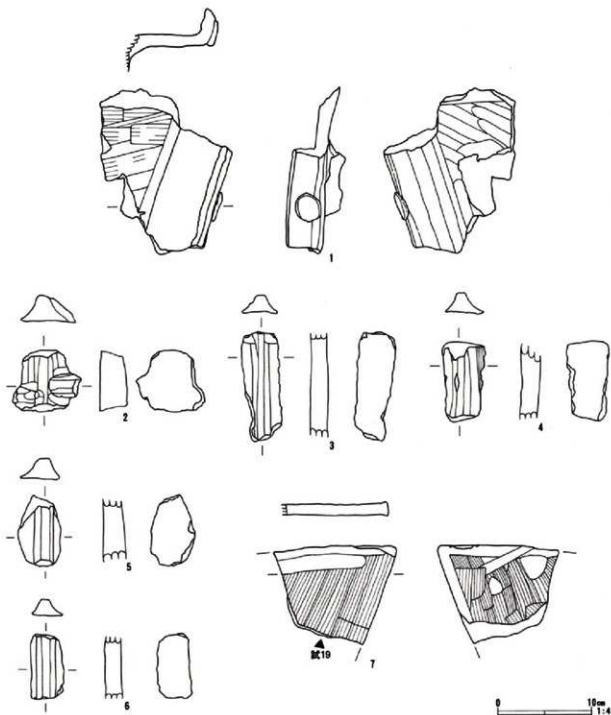


図24 2号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図(1)

器種不明 [16~19] (図26、写真22・23)

16は大型全身人物立像の脚の付根の破片である可能性がある。胎土は粗砂を多量に含む。色調は黄褐色(2.5YR5/3)を呈する。17~19は若干の微細な砂粒を含み、橙色(7.5YR6/8)を呈する。

形象台部 [20~22] (図26、写真22・23)

20には小型の円形透孔を認める。22は基底部近くに突帯を持つ。大型全身人物立像の台部と推測される。ともに胎土には粗砂を多量に含み、チャート礫を疎らに含む。色調はにぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。21の胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。色調は橙色(2.5YR6/6)を呈する。

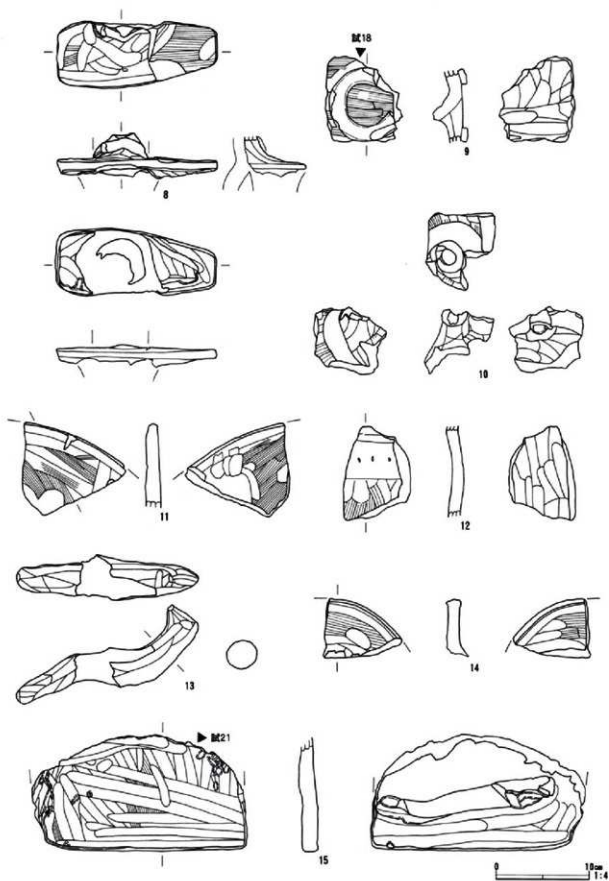


图25 2号埴輪灰原出土形象埴輪実測(図2)

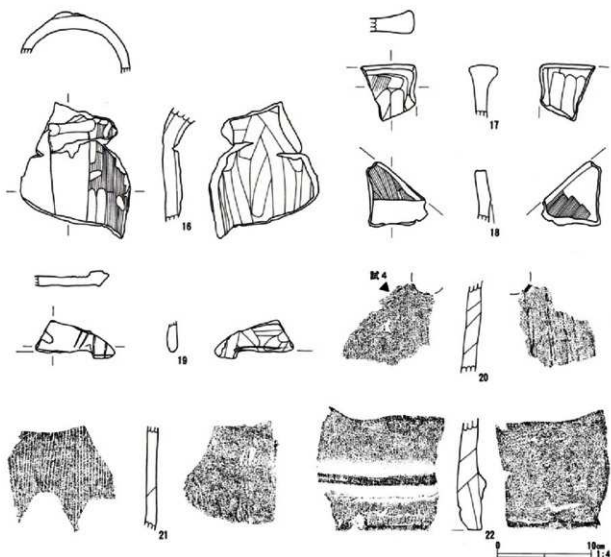


図26 2号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図(3)

(7) 3号埴輪窯

a. 遺構 (図27・28、写真3)

埴輪窯確認区の南寄りで確認した埴輪窯で、082A1-49グリッドを中心に位置する。確認面は、表土層直下のIII層上面で、現地表面から確認面までの深さは、4~24cmである。4号埴輪窯と前庭部が重複している。

平面形がわかるのは、焼成部から燃焼部にかけてのみであり、前庭部手前側の形態は不整形である。本来は隅丸方形、長方形の前庭部に直線的にのびる焼成部を備えた窯跡であったと推定される。前庭部の奥壁は左右でかなりずれており、あるいは正面から見て左側は、4号埴輪窯の奥壁の一部になるのかもしれない。灰原を含めた全長は、10m前後になる。焼成部の長さは3.42~3.61m、幅は1~1.58m、焼成部の右壁の一部が広がっているのは、壁の崩落などによるものであろう。燃焼部付近での奥壁現存幅は、2.6m前後、中心軸の方向は、S-58°-Wである。

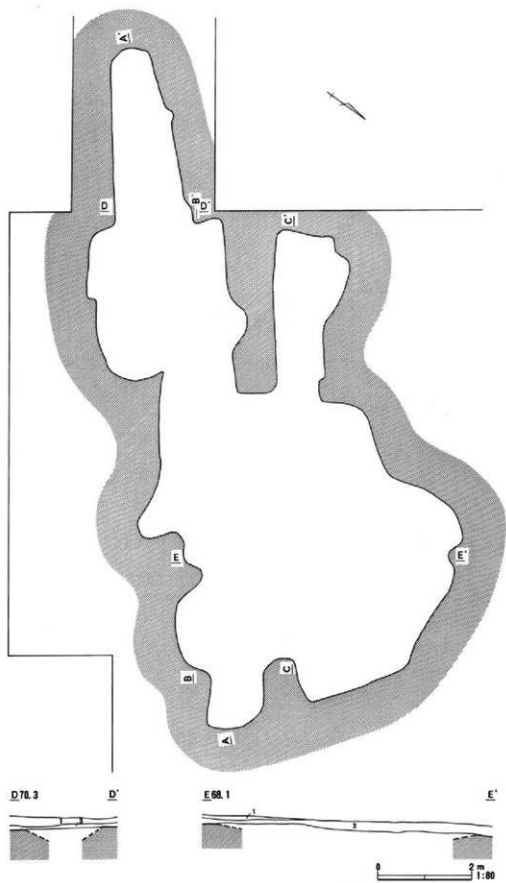


图27 3·4·5号埴輪底平面図・横断面図

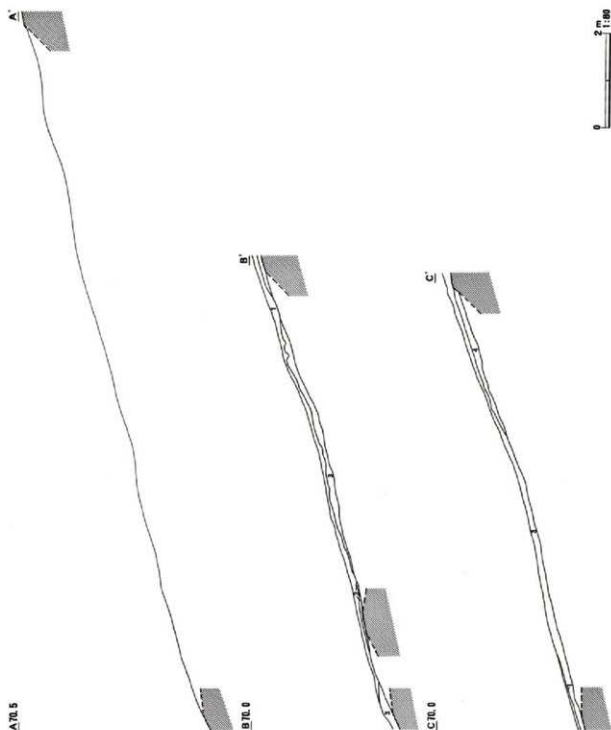


図28 3・4・5号埴輪窯縦断面図

窯跡を直接被覆する堆積土は、2層である。被覆土が最も薄い窯跡であり、雑草を根ごと抜くと覆土が所々露出するような状態であった。斜面上部で3層とした部分の一部は、1層が極々薄く図化し切れず、1・3層をまとめて図化している。4号窯跡も含めて、表土の流失とともに遺構そのものが亡失しかねない状態にさらされている遺構である。本窯跡では、確認面がやや低かったこともあり、焼成部の覆土の一部を断面観察している(図28)。4層とした覆土は、ロームを主とし黒褐色土、焼土、炭化物をわずかに含む褐色土である。

b. 遺物

円筒埴輪 [1・2] (図29、写真7)

3号埴輪窯焼成部における遺物は、いずれも円筒埴輪の小片で、出土量もわずかであった。調整は外面が1次タテハケ、内面がナデで円形透孔を認める。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。

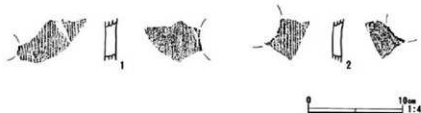


図29 3号埴輪窯出土円筒埴輪拓影図

3号埴輪窯灰原出土円筒埴輪観察表

番号	部種	部 位	外面調整・ハケ本数/2cm	内面調整・ハケ本数/2cm	胎土	焼 成	色 調	備 考
1	円筒	第 2 段	1次タテハケ・8	タテナデ	3類	良 好	明赤褐色(5YR5/6)	円形透孔。
2	円筒	第 2 段	1次タテハケ・8	タテナデ	3類	良 好	橙 色(7.5YR6/6)	円形透孔。

(8) 2・3号埴輪窯灰原

トレンチ13において検出した2号埴輪窯及び3号埴輪窯の灰原からは多数が出土している。両窯の灰原は同トレンチ内において重複しており、出土した個々の遺物が本来帰属すべき遺構については不明であることから、2・3号埴輪窯灰原出土として一括で扱うこととする。

円筒埴輪 [1～29] (図30・31、写真10～13)

いずれも2条突帯3段構成品の破片である。外面調整はすべて1次タテハケにより、確認できる透孔は円形のみである。2の外面に波状文を、4・21・23・26の外面には線刻を認める。

形象埴輪 [1～31] (図32～34、写真24～27)

大刀の勾金 [1] (図32、写真24・25)

玉纏大刀の勾金と考えられるが、ほとんど湾曲を認めない。表裏面とも粗い縦方向のハケで調整している。表面に三輪玉の剝離痕を、裏面に縦方向の補強帯の剝離痕を観察する。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。

靱 [2・3] (図32、写真24・25)

靱の背負板の一部である。表裏面とも横ないし斜め方向のハケで調整し、端部にはナデを加えている。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。

人物 [4～8] (図32、写真24・25)

4は女子人物の髻の一部である。粘土板を上下に2枚合わせて成形しているが、上側の粘土板は剝離している。頭部本体との接合部もなく、4については前後の別も明らかではない。下面は不定方法のナデ調整を加えている。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。

5は髻を結う緒の一部である。薄く幅広い粘土紐を輪状に造形し、緒の結び目を表現している。髻本体から剝離し、裏面はすべて剝離面となっている。胎土は4とは明らかに相違し、粗砂を多量に含

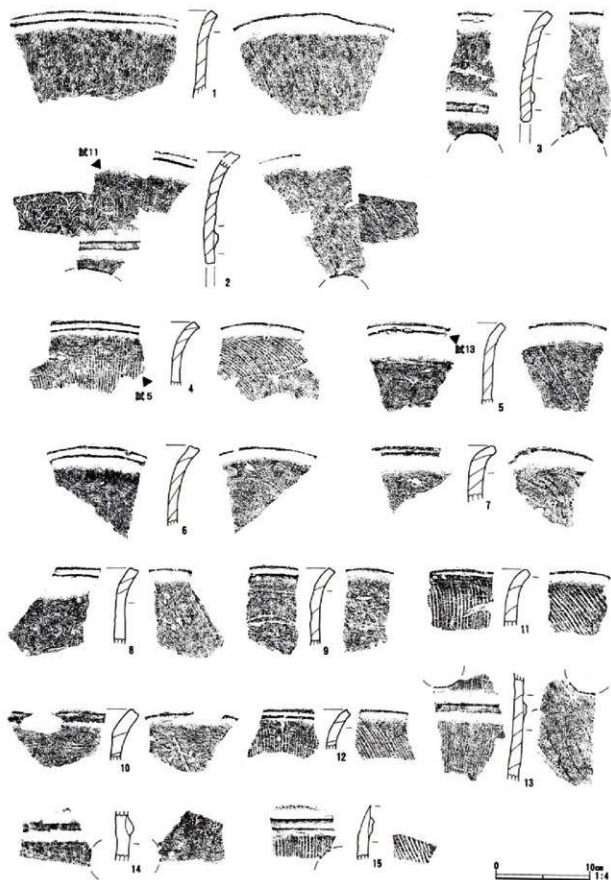


图30 2·3号堆轮窯灰原出土陶筒堆輪拓影(1)

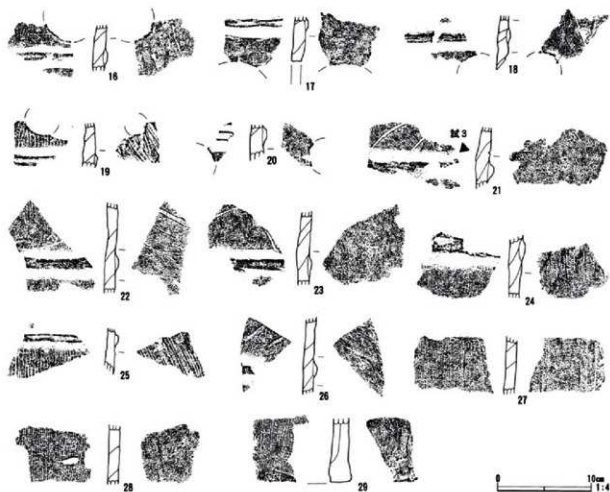


図31 2・3号埴輪窯灰原出土円筒埴輪拓影(図2)

2・3号埴輪窯灰原出土円筒埴輪観察表

番号	器種	部位	外面調整・ハケ本数/2cm	内面調整・ハケ本数/2cm	胎土	焼成	色調	備考
1	円筒	第3段	1次タテハケ・6	ナナメハケ・16	1類	良好	橙 色(7.5YR6/8)	
2	円筒	第2・3段	1次タテハケ・16	ナナメハケ・16 ナナメナデ	2類	良好	明赤褐色(5YR5/6)	外面波状文。 円形透孔。
3	円筒	第2・3段	1次タテハケ・16	ナナメハケ・16 ナナメナデ	1類	良好	橙 色(7.5YR6/6)	円形透孔。
4	円筒	第3段	1次タテハケ・8	ナナメハケ・8 ナナメナデ	3類	良好	橙 色(7.5YR6/6)	外面線刻。 分析試料No 5
5	円筒	第3段	1次タテハケ・18	ナナメハケ・18 ナナメナデ	2類	良好	明赤褐色(5YR5/6)	分析試料No13
6	円筒	第3段	1次タテハケ・18	ナナメハケ・18 ナナメナデ	1類	良好	鈍い橙 色(7.5YR6/4)	内面輪痕。
7	円筒	第3段	1次タテハケ・16	ナナメハケ・表面摩滅 ナナメナデ	1類	良好	黄 褐色(2.5YR5/3)	
8	円筒	第3段	1次タテハケ・18	ナナメハケ・18 ナナメナデ	1類	良好	鈍い黄橙色(10YR6/4)	
9	円筒	第3段	1次タテハケ・16	ナナメハケ・16	1類	良好	橙 色(7.5YR6/6)	外面線刻。

10	円筒	第 3 段	1次タテハケ・18	ナナメハケ・18	1類	良好	橙 色(7.5YR6/6)	
11	円筒	第 3 段	1次タテハケ・5	ナナメハケ・5	1類	良好	鈍い黄橙色(10YR6/6)	
12	円筒	第 3 段	1次タテハケ・8	ナナメハケ・8	1類	良好	明 褐色(7.5YR5/8)	
13	円筒	第 1・2 段	1次タテハケ・18	ナナメナデ	1類	良好	橙 色(5YR6/6)	円形透孔。
14	円筒	第 2・3 段	1次タテハケ・16	タテナデ	1類	須恵質	暗 灰 黄色(2.5Y5/2)	円形透孔。
15	円筒	第 2・3 段	1次タテハケ・5	タテハケ・5	1類	良好	鈍い黄橙色(10YR6/4)	円形透孔。
16	円筒	第 1・2 段	1次タテハケ・20	タテナデ	1類	一 部 須恵質	鈍い黄橙色(10YR6/4)	円形透孔。
17	円筒	第 2 段	1次タテハケ・20	タテナデ	1類	良好	橙 色(7.5YR6/6)	円形透孔。
18	円筒	第 2・3 段	1次タテハケ・20	タテナデ	3類	良好	橙 色(5YR6/6)	円形透孔。
19	円筒	第 1・2 段	1次タテハケ・5	ナナメハケ・5	1類	良好	橙 色(7.5YR6/6)	円形透孔。
20	円筒	第 2・3 段	1次タテハケ・18	タテハケ・18 タテナデ	2類	良好	橙 色(7.5YR6/6)	円形透孔。
21	円筒	第 2・3 段	1次タテハケ・18	ナナメハケ・18 タテナデ	1類	良好	明 黄 褐色(10YR6/6)	外面線刻。
22	円筒	第 1 段	1次タテハケ・18	ナナメナデ	1類	良好	橙 色(7.5YR6/6)	
23	円筒	第 2・3 段	1次タテハケ・16	ナナメハケ・16	2類	良好	橙 色(7.5YR6/6)	外面線刻。内面輪積痕。
24	円筒	不 明	1次タテハケ・18	タテナデ	2類	良好	明 赤 褐色(5YR5/6)	
25	円筒	第 2 段	1次タテハケ・6	ナナメハケ・8	1類	良好	明 黄 褐色(10YR6/6)	
26	円筒	第 2・3 段	1次タテハケ・20	ナナメハケ・20 ナナメナデ	1類	良好	橙 色(7.5YR6/8)	外面帯状線刻。
27	円筒	不 明	1次タテハケ・16	タテナデ	1類	良好	鈍い黄褐色(10YR5/4)	
28	円筒	不 明	1次タテハケ・10	タテナデ	1類	良好	橙 色(5YR6/8)	
29	円筒	第 1 段	1次タテハケ・16	タテナデ	1類	一 部 須恵質	鈍い黄褐色(10YR5/3)	内面輪積痕。

有してチャート礫が疎らに混じる。焼成は良好である。色調は橙色（5YR6/6）を呈する。

6は左側の背中から肩にかけての部位で、腕を挿入した際の臍穴の一部が残る。内外面とも不定方向のナデにより調整されるが、外面の一部に細かいハケを認める。胎土は粗砂を多量に含む。焼成は良好である。色調は橙色（5YR6/6）を呈する。

7・8は上衣裾部の破片である。7・8ともに胴部本体から剝落し、裏面はすべて剝離面となっている。



图32 2·3号埴輪灰原出土形象埴輪实测图(1)

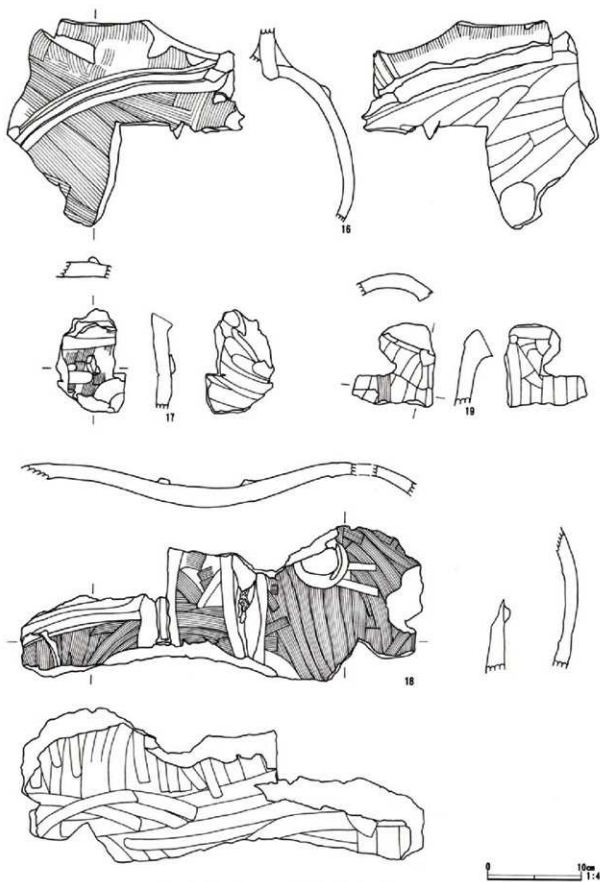


图33 2·3号埴輪窯灰原出土形象埴輪实测图(2)

表面は細かな縦方向のハケののち、端部に丁寧なヨコナデを加えている。7の胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。これに対し、8の胎土は7とは明らかに相違し、粗砂を多量に含有してチャート礫が疎らに混じる。焼成は良好であるが、全体に還元化している。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。

馬 [9~26] (図32~34、写真24~27)

9~15は馬の頭部の破片である。いずれも調整は多くがナデによるが、部分的に細かいナデを認める。9は右顎の後端部で、顎部本体からは粘土紐による面繫と手綱の表現が残る。10は詳細な部位は不明である。面繫の一部の可能性が考えられる。11は鬣の先端から耳の付根にかけての部位で、面繫、鬣、耳はすべて脱落している。12は眼孔部とその後方を通る面繫の額革である。額革の表面には粘土粒を貼付し縞を表現する。13は眼孔部付近、14は耳、15は鬣の中間部分である。

16は頸部左側で、鬣はいったん成形した頸部を切開して挿入されている。表面は粗いハケ、内面はナデにより調整している。粘土紐により手綱を表現する。

17は後輪から後胴にかけての部位である。表面を細かいハケ、内面をナデにより調整する。尻繫の一部と考えられる粘土紐が残る。後輪と馬鈴ないし杏葉と思われる剝離痕が観察できる。

18は左前足の付根から側胴、左側の尻にかけての部位である。表面は細かいハケ、内面はナデにより調整している。障泥は完全に脱落しているが、胸繫、鐙の吊手ないし障泥の覆輪及び後輪の下端部と考えられる縦方向の突帯状の表現が残り、胸繫の下方には馬鐙の剝離痕、後胴には尻繫及び馬鈴の剝離痕を認める。

19~22は脚部の破片である。19は脚の付根で、切開再接合技法を観察する。20は下端近くに三角形の透孔を穿つことで蹄の表現としており、特異な造形である。21・22は脚下端部の後方をヘラ状工具により三角形に鋭く切り取って蹄を表現する。

23は鞍橋の一部である。前後面とも粗いハケにより調整し、端部には丁寧なナデを加えている。

24は障泥から剥落した三角錐形壺蓋である。全面に丁寧なナデを施して調整している。剝離面には作業台の木目匠痕を観察する。

25・26は部位不明ながら、ヘラ状工具により杉綾状線刻を施した粘土紐を貼付することから繫の一部と考えられる。

馬の胎土は、粗砂を多量に含有し、チャート礫が疎らに混じるものと(10~12・14・15~23)精良で、砂礫をほとんど含まないもの(9・13・24~26)とに分かれる。焼成はともに良好であるが、17~19・21・22は全体に還元化している。色調は10~12・14・15~19・21・22がにぶい黄橙色(10YR6/4)、9・13・20・23~26が橙色(5YR6/6)を呈する。

器種不明 [27~30] (図34、写真26・27)

27~29には紐状の表現や、円形付文を認める。28はくびれた円筒状を呈し、内面に輪痕を認める。人物の頸部の可能性が考えられるものの確証はない。いずれも胎土は精良であるが、若干の砂粒を含む。焼成は良好である。27・29は橙色(5YR6/6)、28・30はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。

形象台部 [31] (図34、写真26・27)

調整は外面縦方向のハケ、内面がナデである。小型の円形透孔を認める。胎土は精良であるが、若干の砂粒を含む。焼成は良好である。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。



图34 2·3号埴輪窯灰原出土形象埴輪实测图·拓影图(3)

(9) 4号埴輪窯

a. 遺構 (図27・28、写真3)

埴輪窯確認区の南寄りで確認した遺構で082A2-40グリッドを中心に位置する。5号埴輪窯の前庭部に接続する細い溝状の掘りこみのみを確認した遺構である。確認面はⅢ層上面で、現地表面から確認面までの深さは5~22cmである。窯跡の一部であることは間違いないであろう。5号窯と重複する溝状の部分、焼成部の一部と見て、3号窯と重複する前庭部を有し、南東に偏し焼成部を設けた窯と考えた。3号窯と関連する窯の一部と見てもよいが、一応斜面の上下という位置関係から、本窯に続いて、より上方の5号窯が造り直された過程が最も考えやすい。すなわち、3・4号窯から5号窯へという構築順序が想定できる。いずれの新旧関係も、面的にはとらえることができなかった。焼成部と推定した部分での横幅は、80cm前後、同部分の向きは、3号窯とほぼ同じである。

Ⅳ 3・4号埴輪窯灰原

トレンチ3の中央部からその下方及びトレンチ5・14にかけては、3号埴輪窯及び4号埴輪窯の灰原が重複し、一定量の埴輪片が出土した。これらを3・4号埴輪窯灰原出土として一括で扱うこととする。**円筒埴輪** [1~10] (図35、写真12・13)

いずれも2条突帯3段構成品の破片である。外面調整はすべて1次タテハケにより、確認できる透孔は円形のみであるが、3・5については歪みが著しい。8~10には基部成形を認める。

形象埴輪 [1~10] (図36、写真26・27)

鬮 [1~3]

表面には不定方向のハケ、裏面にはハケのちナデを加え、端部には丁寧なナデを施す。1・3には放射状の線刻を認める。胎土は粗砂を多量に含む。色調は橙色(5YR6/8)を呈する。

大刀の勾金 [4] (図36、写真24・25)

玉纏大刀の勾金である。表裏面とも縦方向のハケで調整する。表面に三輪玉の剝離痕を観察し、裏面に補強帯を持たない。胎土に砂礫をほとんど含まない。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。

穀 [5] (図36、写真24・25)

右側の鱗状部で、表裏面にハケ調整を施す。胎土に粗砂を含み、色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。

馬 [6・7] (図36、写真24・25)

6は右耳周辺の部位で、鬣、面繫は剝離している。外面にハケ、内面にナデ調整を施す。7は本体から脱落した尾で、先端に上方へ向く小突起を造り出す。6は胎土に砂礫をほとんど含まず、色調は橙色(5YR6/6)を呈する。7は胎土に粗砂を多量に含む、色調は橙色(7.5YR6/6)を呈する。

器種不明 [8~10] (図36、写真24・25)

8は脱落した帯状の部品で、表面に杉綾状の線刻を認める。9は薄い板状を呈し、表面に鋸歯状の線刻を認める。10は本体から脱落した円形付文である。胎土はいずれも精良で、9が砂礫をほとんど含まず、8・10は若干の砂粒を含む。色調は8・9が橙色(5YR6/6)を、10がにぶい橙色(5YR7/4)を呈する。

形象台部 [11] (図36、写真26・27)

調整は外面縦方向のハケ、内面がナデである。小型の円形透孔を認める。胎土は精良である。若干の砂粒を含む。色調は橙色(5YR6/8)を呈する。

なお、1~10はすべて焼成は良好であるが、7・10は部分的に還元化している。

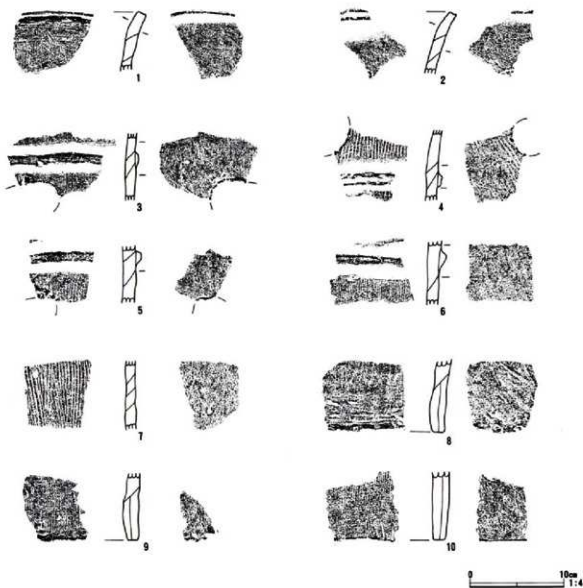


図35 3・4号埴輪窯灰原出土円筒埴輪拓影図

3・4号埴輪窯灰原出土円筒埴輪観察表

番号	器種	部位	外面調整・ハケ本数/2cm	内面調整・ハケ本数/2cm	胎土	焼成	色調	備考
1	円筒	第3段	1次タテハケ・16	ナナメハケ・16	胎土	良好	橙 色(5YR6/6)	
2	円筒	第3段	1次タテハケ・16	ナナメハケ・16	胎土	良好	明赤褐色(5YR5/6)	
3	円筒	第2・3段	1次タテハケ・18	ナナメハケ・18 ナナメナデ	胎土	良好	橙 色(5YR6/6)	円形透孔。
4	円筒	第2・3段	1次タテハケ・6	ナナメハケ・6 タテナデ	胎土	良好	橙 色(5YR6/6)	円形透孔。
5	円筒	第2・3段	1次タテハケ・5	タテナデ	胎土	良好	鈍い黄褐色(10YR6/4)	円形透孔。
6	円筒	不明	1次タテハケ・8	タテナデ	胎土	良好	黄褐色(10YR5/6)	

7	円筒	不明	1次タテハケ・6	タテナデ	1類	良好	明黄褐色(10YR6/6)	
8	円筒	第1段	1次タテハケ・18	ナナメナデ	1類	良好	黄褐色(10YR5/6)	
9	円筒	第1段	1次タテハケ・18	タテナデ	3類	良好	明赤褐色(10YR6/6)	
10	円筒	第1段	1次タテハケ・10	ナナメナデ	2類	良好	黄褐色(2.5Y5/3)	

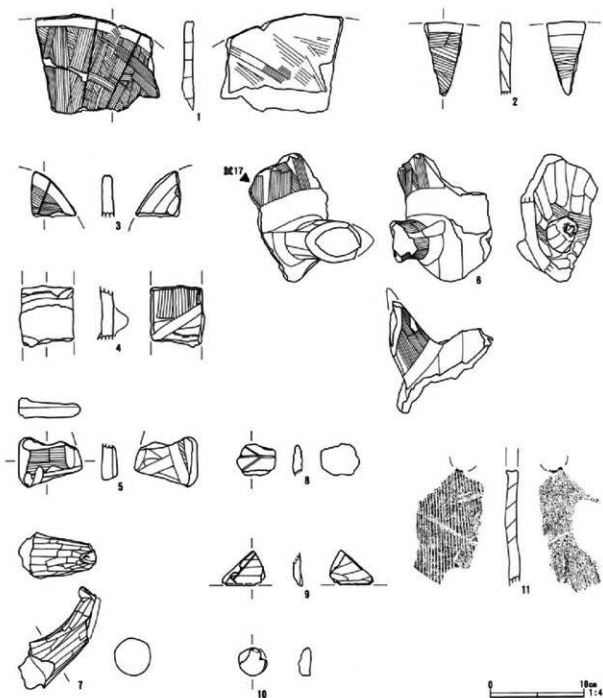


図36 3・4号埴輪窯灰原出土形象埴輪実測図・拓影図

(II) 5号埴輪窯

a. 遺構 (図27・28、写真3)

今回確認した窯跡の中で斜面の最も高所に位置する遺構で、082A2-31グリッドを中心に位置する。表土層直下にハードローム面が露出する斜面上部で確認したこともあり、輪郭が最も明瞭にとらえられた窯跡でもある。確認面はIII層上面で、現地表面から確認面までの深さは14~18cmである。焼成部から燃焼部にかけての壁は、ローム層を掘りこんだ外形線として鮮明にとらえられたが、上面での観察では、壁そのものが被熱赤化している痕跡は明瞭ではなかった。平面形は、おおむね隅丸方形の前庭部に細長い焼成部のつく形態である。焼成部の長さは3.72m、幅は0.83~1.62m、前庭部は、長さ3.12~3.55m、幅2.8m前後である。中心軸の方向は、S-47°-Wである。

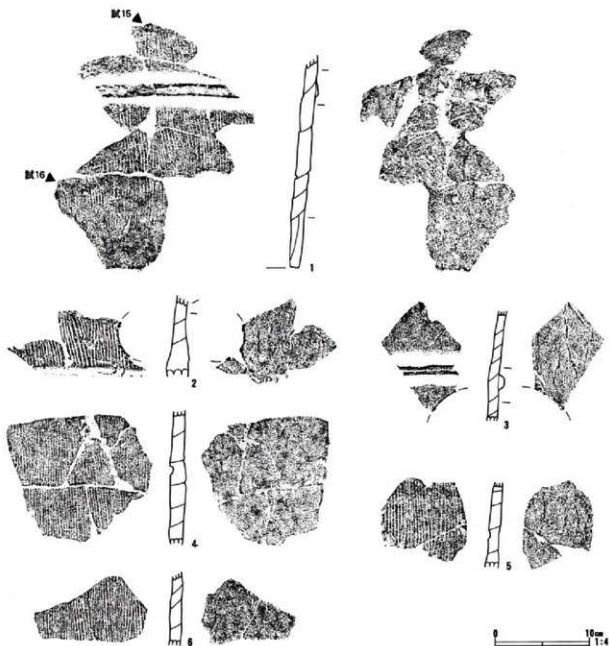


図37 5号埴輪窯出土円筒埴輪拓影図

5号埴輪窯円筒埴輪観察表

番号	器種	部 位	外面調整・ハケ本数/2cm	内面調整・ハケ本数/2cm	胎土	焼 成	色 調	備 考
1	円筒	第1・2段	1次タテハケ・7	タテナデ	2類	良 好	橙 色(7.5YR6/8)	底部調整。 分析試料No.15・16
2	円筒	第1・2段	1次タテハケ・8	タテナデ	2類	良 好	橙 色(7.5YR6/6)	円形透孔。
3	円筒	第2・3段	1次タテハケ・20	ナナメハケ・20 タテナデ	2類	良 好	橙 色(5YR6/6)	円形透孔、内面輪横紋。
4	円筒	不 明	1次タテハケ・8	タテナデ	2類	良 好	橙 色(7.5YR6/6)	
5	円筒	不 明	1次タテハケ・8	タテナデ	2類	良 好	橙 色(7.5YR6/6)	
6	円筒	不 明	1次タテハケ・8	タテナデ	2類	良 好	明黄褐色(10YR6/6)	

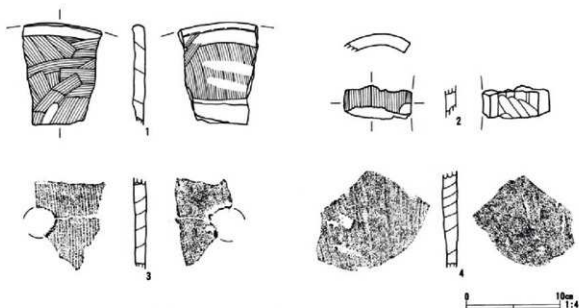


図38 5号埴輪窯出土形象埴輪実測図・拓影図

窯跡を直接覆う堆積土は1・3層で、ともに近世以降の堆積土である。上面観になるが、焼成部の覆土は、ロームを主とし黒褐色土の混入する褐色土で、焼土、炭化物は顕著ではない。一方前庭部の手前側を下るにつれ、埴輪片や焼土、炭化物が多く含まれるようになる。調査時の所見では、焼成部の残存状態は比較的良好で、前庭部にかけて土壌の削剥、流失などによる影響を強く受けているかに見えた。

b. 遺物

円筒埴輪 [1～6] (図37、写真14・15)

いずれも2条突帯3段構成品の破片である。外面調整はすべて1次タテハケにより、確認できる透孔は円形のみである。1の基部には板押圧による底部調整を施す。2・3には円形透孔を認める。

形象埴輪 [1～4] (図38、写真26・27)

器種は必ずしも明確ではない。1は線刻を認めないが髻の一部と思われる。粗砂を多量に含み、にぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。2は馬の脚下部の蹄部分である可能性が高い。胎土は精良で、砂礫を含まない。還元化し褐灰色(10YR4/1)を呈する。3・4は台部の破片で、3には円形透孔を認める。

⑫ トレンチ出土遺物

埴輪窯とその周辺部に設定したトレンチでは、埴輪窯やこれに付随することが明らかな灰原など明瞭な遺構に重複しない地点においても埴輪窯の採案に関係すると考えられる遺物を検出している。以下にそれらの遺物を示し観察を述べる。

a. トレンチ6-8ベルト

1号窯と2号窯、2号窯と3号窯は若干離れて存在し、その中間は遺構の存在しない部分がある。トレンチ6及び8は1～3号窯を横断する位置に設定したトレンチで、トレンチ6-8ベルトは両トレンチを画する土層観察用のベルトである。

円筒埴輪 (図39、写真14・15)

円筒埴輪の口縁部1片を検出した。大ききから2条突帯3段構成の円筒埴輪の口縁部の破片と考えられる。胎土は精良で、若干の微細な砂粒を含む。焼成は良好であるが、表面が還元化し、色調も暗灰黄色(2.5YR5/2)を呈する。

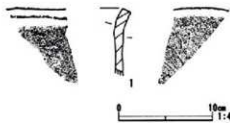


図39 トレンチ6-8ベルト出土円筒埴輪拓影図

トレンチ6-8ベルト出土円筒埴輪観察表

番号	器種	部位	外面調整・ハケ本数/2cm	内面調整・ハケ本数/2cm	胎土	焼成	色調	備考
1	円筒	第3段	1次タテハケ・20	ナナメハケ・20		2類良好	暗灰黄色(2.5YR5/2)	

b. トレンチ8

トレンチ8は1～3号窯を横断する位置に設定したトレンチである。遺物は遺構確認面の上位層で検出した。帰属遺構は不明である。

円筒埴輪 (図40、写真14・15)

いずれも大ききから2条突帯3段構成の円筒埴輪の破片と考えられる。2には円形の透孔を認める。

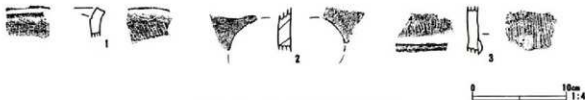


図40 トレンチ8出土円筒埴輪拓影図

トレンチ8出土円筒埴輪観察表

番号	器種	部位	外面調整・ハケ本数/2cm	内面調整・ハケ本数/2cm	胎土	焼成	色調	備考
1	円筒	第3段	1次タテハケ・表面厚減	ヨコナデ		2類良好	黄褐色(2.5YR5/3)	
2	円筒	第2段	1次タテハケ・16	タテナデ		2類良好	褐色(5YR6/6)	
3	円筒	不明	1次タテハケ・8	ナナメハケ・8		3類良好	褐色(5YR6/6)	

胎土は精良で、1が若干の微細な砂粒を含むのに対し、2・3は砂礫をほとんど含まない。焼成は良好であるが、1は全体が還元化し、色調も黄褐色(2.5YR5/3)を呈する。

形象埴輪

家〔1～3〕(図41、写真28・29)

1・2は入母屋式屋根の上半部の破片である。平板な造りで、表裏面とも不定方向のハケ調整を加えている。1の表面には横方向に1条の線刻を認める。屋根の表面の連続三角文の一部と思われる。3は家の壁基部と考えられる。表面には丁寧なナデ調整を施す。裏面は全面が剝離している。底面には作業台の木目匠痕を認める。いずれも胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。

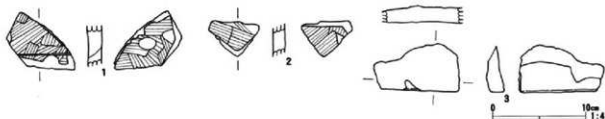


図41 トレンチ8出土形象埴輪実測図

c. トレンチ9

トレンチ9は2号窯の先端部とその上方に設定したトレンチである。遺物は窯直上部分からの出土ではないが2号窯に帰属する可能性が考えられる。

円筒埴輪〔1～17〕(図42・43、写真14～17)

いずれも大きさから2条突帯3段構成の円筒埴輪の破片と考えられる。13は基底部外面にヨコナデを施す。6～9には円形透孔を認める。胎土は粗砂を多く含むチャート礫を疎らに含むもの、粗砂をほとんど含まず若干の微細な砂粒を含むもの、砂礫をほとんど含まないの3種に大別される。焼成は総じて良好であるが、1・2・11は還元化している。とくに1は焼き歪みを生じている。

朝顔形埴輪〔18・19〕(図43、写真16・17)

18は肩から頸部にかけての部位で、内面には丁寧なナデを施している。胎土は精良で、若干の微細な砂粒を含む。19は口縁部で中位で屈曲してやや内側に立ち上がる。内面に輪痕を残す。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。

トレンチ9出土円筒・朝顔形埴輪観察表

番号	器種	部位	外面調整・ハケ本数/2cm	内面調整・ハケ本数/2cm	胎土	焼成	色調	備考
1	円筒	第2・3段	1次タテハケ・20	ナナメハケ・20 ナナメナデ、タタナデ	1類	一部須恵質	明黄褐色(10YR7/6)	
2	円筒	第2・3段	1次タテハケ・20	ナナメハケ・20 ナナメナデ	2類	良好	明黄褐色(10YR6/6)	外面帯状線刻。内面輪痕。円形透孔。
3	円筒	第3段	1次タテハケ・8	ナナメハケ・8	1類	良好	橙色(5YR5/6)	

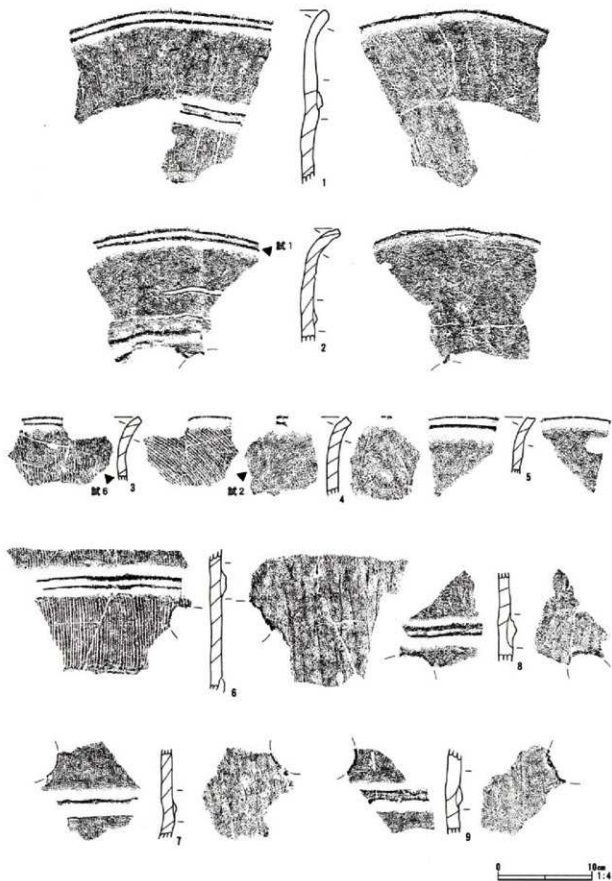


図42 トレンチ9出土円筒埴輪拓影(1)

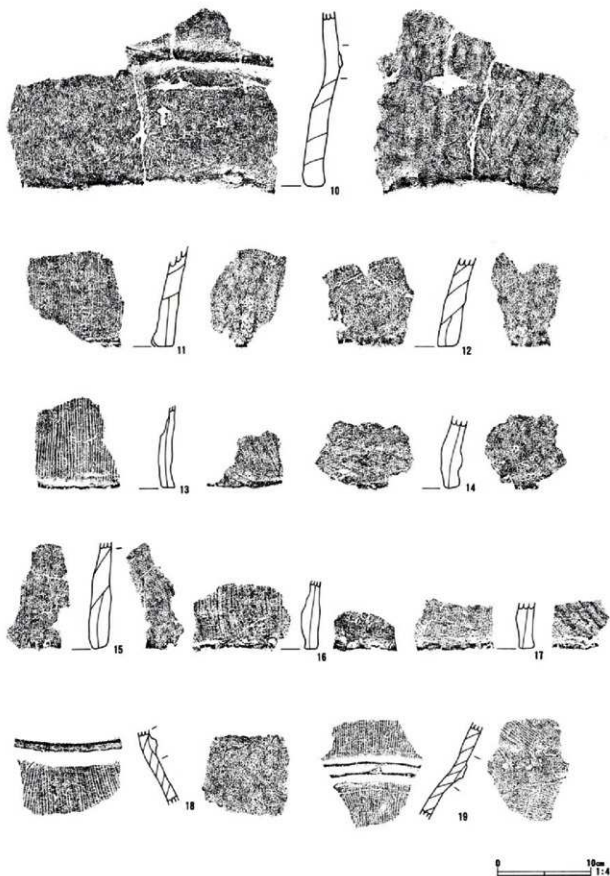


図43 トレンチ9出土円筒・朝顔形埴輪拓影図(2)

4	円筒	第 3 段	1次タテハケ・20	ナナメハケ・20	1類	良好	明黄褐色(10YR6/6)	
5	円筒	第 3 段	1次タテハケ・16	ナナメハケ・16 ナナメナデ	3類	良好	明褐色(7.5YR5/6)	
6	円筒	第2・3段	1次タテハケ・8	ナナメハケ・8 タテナデ	2類	良好	明黄褐色(10YR6/6)	円形透孔。
7	円筒	第1・2段	1次タテハケ・16	ナナメハケ・16 タテナデ	3類	良好	明褐色(7.5YR5/6)	内面輪痕あり。 円形透孔。
8	円筒	第2・3段	1次タテハケ・18	タテナデ	1類	良好	明黄褐色(10YR7/6)	円形透孔。
9	円筒	第1・2段	1次タテハケ・14	タテハケ・14、タテナデ	1類	良好	橙色(5YR6/6)	円形透孔。
10	円筒	第1・2段	1次タテハケ・20	タテナデ	1類	良好	鈍い黄褐色(10YR6/4)	
11	円筒	第 1 段	1次タテハケ・14	タテナデ	1類	良好	黄褐色(2.5Y5/4)	
12	円筒	第 1 段	1次タテハケ・20	タテナデ	1類	良好	明黄褐色(10YR6/6)	
13	円筒	第 1 段	1次タテハケ・8	タテナデ	3類	良好	橙色(5YR6/6)	
14	円筒	第 1 段	1次タテハケ・16	タテナデ	1類	良好	明黄褐色(10YR7/6)	
15	円筒	第 1 段	1次タテハケ・表面摩滅	タテナデ	1類	良好	明黄褐色(10YR7/6)	
16	円筒	第 1 段	1次タテハケ・6	タテナデ	3類	良好	明褐色(7.5YR5/6)	
17	円筒	第 1 段	1次タテハケ・20	タテナデ	1類	良好	明黄褐色(10YR5/6)	
18	朝顔	第 3 段	1次タテハケ・6	ナナメナデ	3類	良好	橙色(7.5YR6/6)	
19	朝顔	第 3 段	1次タテハケ・8	ナナメハケ・8 ナナメナデ	3類	良好	明赤褐色(5YR5/6)	

形象埴輪

家 [1～3] (図44、写真28・29)

1は壁の上端から屋根の下縁にかけての一部である。屋根の表面には横向の細かいハケにより調整を施し、線刻で連続三角文を表す。屋根の下縁に円形付文を貼付する。裏面はすべて破断面となっている。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は明黄色(10YR6/6)を呈する。2は格子状の突帯を配する壁の中間部の角の一部である。縦方向の太い突帯の両側から左右方向に細目の突帯が伸びる。壁本体からは剝離し、裏面はすべて剝離面となっている。全面にナデ調整を施す。胎土は精良で、若干の微細な砂粒を含む。焼成は良好である。色調は橙色(7.5YR7/6)を呈する。3は壁の最下部の角の一部である。縦方向に伸びる太目の突帯で、壁本体からは剝離し、裏面はすべて剝離面となっている。全面に丁寧なナデ調整を施す。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は明褐色(5YR5/8)を呈する。

器種不明 [4] (図44、写真28・29)

4は器種不明の破片である。2枚を合わせて成形している。円孔があり、その縁辺部に破断面を認

める。粘土板から垂直方向に派生する部品が存在したらしい。馬形埴輪頭部の耳の付根付近の造形と類似する。表面には不定方向のハケ及びナデ、裏面には不定方向のナデ調整を施す。胎土は精良で、若干の微細な砂粒を含む。焼成は良好であるが全体に還元化している。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。

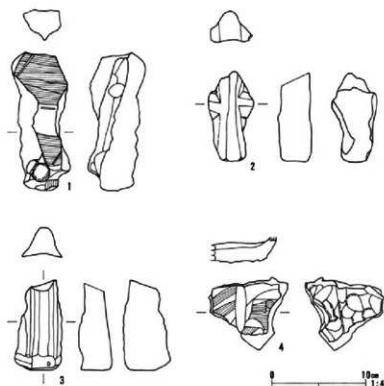


図44 トレンチ9出土形象埴輪実測図

d. トレンチ15

トレンチ15は、1号埴輪窯の下方に設定したトレンチで表土下に埴輪片を多量に含む黒色土の堆積を確認し、この部分においても灰原の存在が確認されている。調査の性格上、灰原の上面を検出するにとどまったが、若干の埴輪片が出土している。

形象埴輪

人物 (図45、写真28・29)

腕を挙げ持つ女子人物の手である。腕の下側に粘土板を貼付し4本の線刻を入れて指を表現している。親指が欠落している可能性があり、その場合は左手を表現していることになる。腕は半球状を呈する。胎土は精良で、若干の微細な砂粒を含む。焼成は良好である。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈する。

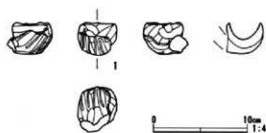


図45 トレンチ15出土形象埴輪実測図

e. トレンチ21

トレンチ21は埴輪窯に直接かかわるトレンチではないが、埴輪窯調査区の南西方向に隣接し、埴輪工房の可能性が考えられる1号竪穴状遺構と埴輪窯調査区との中間の位置にある。とくに明瞭な遺構に伴うものではないが、周囲には埴輪窯及びその関連遺構以外に遺物の示す年代に属する遺構は存在しないことから、これら遺物は埴輪生産に関係する資料である可能性が高いものと考えられ、本節に

含めて取り扱うこととした。

形象埴輪

人物 (図46、写真28・29)

顔面は筒状に成形した頭部本体に、粘土板を貼付することにより成形している。内面に輪積痕を認める。顔面には丁寧なナデ調整を施し、頸部には一部にハケ調整を認める。口は薄いヘラ状工具で鋭く穿っている。

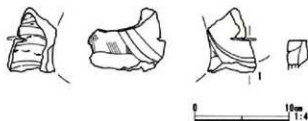


図46 トレンチ21出土形象埴輪実測図

性別は不明である。胎土は精良で、若干の微細な砂粒を含む。焼成は堅緻で、頭部右側方が還元化している。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈する。

土師器

坏蓋模倣坏 [1・2] (図47、写真33)

2点を検出した。1は底部が丸底で、体部と口縁部を画する稜線から口縁部が外反気味に立ち上がる。口唇部端面に凹線がめぐる。底部から体部にかけての外面にはヘラケズリにより、内面には丁寧なナデにより調整を施し、口縁部にはヨコナデを加える。

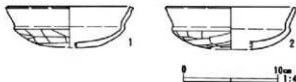


図47 トレンチ21出土土師器実測図

胎土・焼成とも良好で、色調は橙色(7.5YR6/6)を呈する。口径13.4cm、器高4.3cmを測る。2は底部が丸底で、体部と口縁部を画する稜線から口縁部が外反気味に立ち上がる。口唇部に端面をもつ。底部から体部にかけての外面にはヘラケズリにより、内面には丁寧なナデにより調整を施し、口縁部にはヨコナデを加える。胎土・焼成とも良好で、色調は橙色(7.5YR6/6)を呈する。口径14.0cm、器高4.4cmを測る。

f. II次調査区出土遺物

調査区全体の一括資料である。

形象埴輪

人物 (図48、写真28・29)

人物の顔面から剝離した鼻である。三角錐状の粘土塊を成形し顔面に貼付している。鼻孔を造形しない。全面に丁寧なナデ調整を施している。胎土は精良で、若干の微細な砂粒を含む。焼成は良好である。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。



図48 II次調査区出土形象埴輪実測図

(3) 既存の表面採集資料

「III既往の調査」で述べたとおり、宥勝寺裏埴輪窯跡では以前からの踏査で埴輪片、石製模造品などを表面採集し、「本庄市史」資料編でもその一部を紹介している。これらの資料が今回の調査で確認された埴輪窯のいずれに帰属するものであるかは明らかではないが、宥勝寺裏埴輪窯での生産器種を解明するうえで重要な資料を含んでいる。ここでは、「本庄市史」掲載資料も含め、現在までに本庄市教育委員会が保管することとなった表面採集資料を示し、観察の結果を述べる。

家 [1] (図49・写真30・31)

壁の上端から屋根の下縁にかけての一部である。屋根の表面には不定方向の細かいハケにより調整を施し、線刻で連続三角文を表す。屋根の下縁に円形付文を貼付する。裏面はすべて破断面となっている。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。

鬚 [2・3] (図49、写真30・31)

鬚本体の一部である。板状を呈する。表裏とも不定方向のハケにより調整を施している。表面には、線刻と円形付文により鬚の構造を表現する。中央に「∩」形の線刻があり、内部を縦・横の直線で区画する。周囲には屋羽状の文様を放射状に配する。中央の「∩」形線刻のうえに等間隔に小型の円形付文を貼付する。裏面には2条の補強帯剝離痕が存在する。3は板状の破片で裏面中央の縦長の剝離痕を認める。2と同様の線刻と円形付文による表現を認め、胎土・焼成・色調も酷似することから3も鬚の一部である可能性を想定した。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調はにぶい橙色(5YR6/6)を呈する。

大刀 [4] (図49、写真30・31)

大刀の勾金上端部である。勾金は先端を斜めに成形し、内外面とも丁寧なナデにより調整を施している。勾金表面に2個の三輪玉を表現する。三輪玉は3個の粘土粒を横方向に接続したような形状で粗雑な造形である。柄頭との境界付近に緒の一部が残存する。胎土は精良で、若干の微細な砂粒を含む。焼成は堅緻で、部分的に還元化している。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈する。

鞘 [5・6] (図49、写真30・31)

鞘の中央部の破片である。上下・左右方向に湾曲する。表面には不定方向のハケを施し、裏面には丁寧なナデを加えている。5・6とも線刻により文様を付加している。5は二重の弧線により区画した内部に同じく二重線による鋸歯文を表す。6も直線と弧線により区画を設け、内部に鋸歯文を表す。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調は5がにぶい赤橙色(5YR5/4)を、6が明赤橙色(5YR5/6)を呈する。

人物に付属する鞘 [7] (図49、写真30・31)

人物の腰部から剝落した鞘である。ナデにより調整を施したのち、表面から側面にかけて径3mmの棒状工具を用い、全面的に刺突を加えて施文している。裏面には剝離痕が残る。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

馬具 [8～17] (図49・50、写真30・31)

いずれも馬本体から剝離した種々の馬具である。

8は左側障泥の下半部とその表面に付された鍔である。障泥は左右方向に緩やかに湾曲する。表面には全面に縦方向のハケを施し、端部から端面は丁寧なナデを加えている。前後の縁刃に粘土紐を貼付し、さらにその上面にヘラ状工具の先端で連続刺突を加え覆輪を表現する。裏面には馬本体の剝離痕を認める。鍔は杓子形壺鍔で踏込部を平坦に造形し、表面には粘土紐・粘土粒により縁金を表す。鍔の周囲は丁寧にナデが施されている。胎土は精良で、若干の微細な砂粒を含む。焼成は堅緻で、障泥下縁の一部が還元化している。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。

9は右側の鍔で、障泥の表面から剝落したものである。8と同形の杓子形壺鍔であるが、8に比べ、

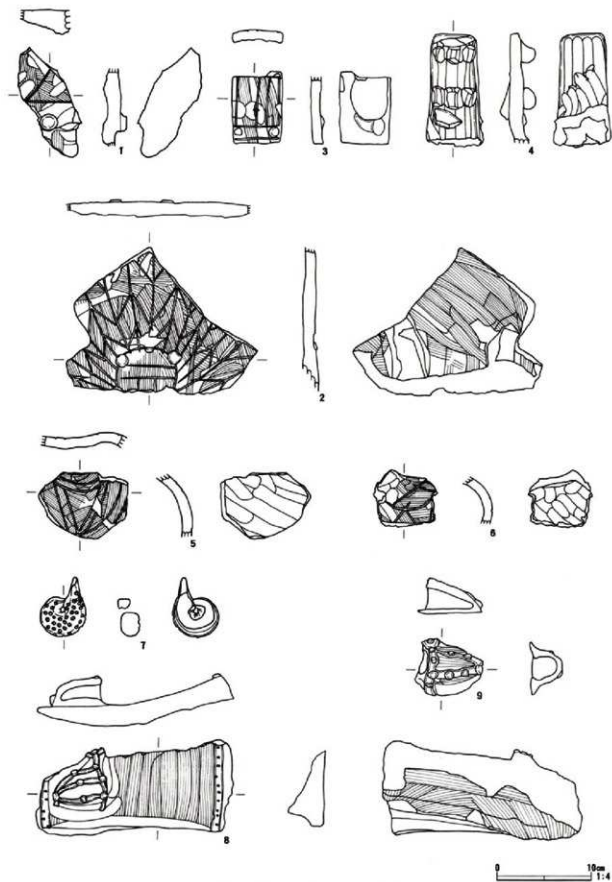


图49 表面採集形象填輪突測(圖1)

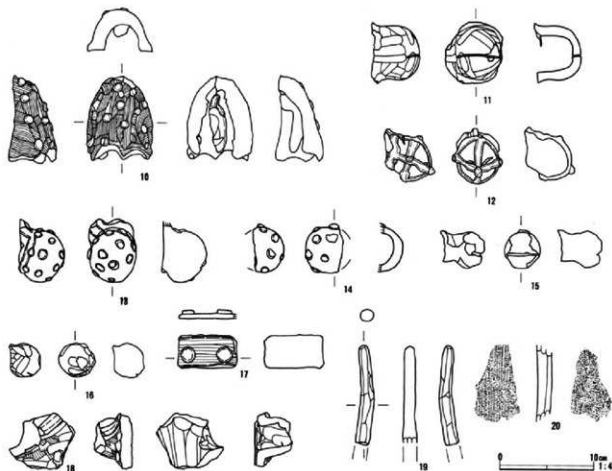


図50 表面採集形象増輪軸測図・拓影(図2)

踏込部を平坦に造形しない点や、縁金を表す粘土紐の本数が少ないのに対し、粘土粒の数が多などとの相違点を認める。胎土は精良で、若干の微細な砂粒を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色(10 YR6/4)を呈する。

10は馬鐸で馬本体から剥落したものである。表面には不定方向の細かいハケにより調整を施し、裏面には粗いナデを加えている。下縁を波状に造形し、表面に15個の小型円形付文を貼付する。円形付文1点は剥落している。内面には縦方向に棒状粘土を貼付し、舌を造形している。胎土は精良で、若干の微細な砂粒を含む。焼成は堅緻であるが、下半部は還元化が著しく、ヒビが目立つ。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈する。

11~16は馬鈴である。11・13・14は中空成形、12・15・16は中実成形で、いずれもナデにより調整を施している。11は鈴口部の切り込みが中空部にまで達している。裏面には繫の剝離を示す凹面が存在する。12は基部と中位に粘土紐を全周し、これに直交して十字の粘土紐を上重ねし、さらに基部の粘土紐を除くこれらの交点に小型円形付文を付加している。13・14は表面に小型の円形付文を認め、13は基部に粘土紐がめぐる。15・16は前4点に比べ小振りやや粗雑な造形である。胎土は精良で、13・14が若干の微細な砂粒を含むのに対し、他は砂礫をほとんど含まない。焼成はいずれも良好である。色調は11・13・14がにぶい橙色(5YR6/4)、12・15・16が橙色(5YR6/6)を呈する。

17は剥落した繫の飾金具である。長軸方向に粗いハケ調整を施している。やや大型の円形付文を配

する。裏面は全面が剝離痕である。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好である。色調はにぶい橙色 (5YR6/4) を呈する。

器種不明 [18・19] (図50、写真30・31)

18は緩やかに湾曲する板状の部分から、円筒状の部位が突出する形状を呈する。人物の中空式腕部の付根部に造形が似るが特定はできない。内外面はともに丁寧なナデを施す。突出部に沿って立ち上がるように1条の粘土紐が残る。胎土は精良で、若干の微細な砂粒を含む。焼成は良好である。色調は橙色 (5YR6/6) を呈する。

19は断面円形の棒状の部品である。中位で緩やかに屈曲し、先端部は丸く成形している。基部側の端は、断面ではなく端面を形成する。全面ナデによる調整を加えている。胎土は精良で、若干の微細な砂粒を含む。焼成は良好である。色調は橙色 (7.5YR6/6) を呈する。

円筒ないし形象の基部 [20] (図50、写真30・31)

20は円筒埴輪ないし形象埴輪基部の破片である。粘土板を表裏2枚合わせとする基部成形を認める。外面には通常のタテハケ、内面は縦方向の丁寧なナデを施す。胎土は精良で、砂礫をほとんど含まない。焼成は良好で、外表面が還元化している。色調はにぶい橙色 (10YR6/4) を呈する。

2 竪穴状遺構

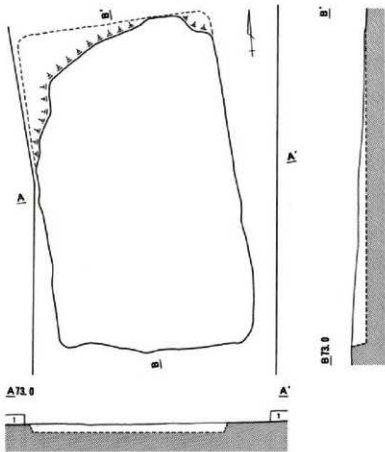
(1) 遺構

II・III次調査では、埴輪窯跡のある斜面の南西側、尾根上の近接地で竪穴状遺構を1基ずつ確認している。調査の順に従い西側の遺構から1・2号竪穴状遺構の呼称を与えた。ともに埴輪窯跡にごく近接した位置にあること、周辺に同じような時期の竪穴住居が見られないことなどから、工房など埴輪窯に関連する遺構である可能性が高いと考えた。また確認面からではあるが、1号竪穴状遺構からは形象埴輪の破片が出土している。

a. 1号竪穴状遺構 (図51、写真5)

尾根平坦面の北端、072 E3-40・41グリッドを中心に位置する。最短距離にある3号埴輪窯からは、南西に18mほど離れた位置にある遺構である。確認面は、表土層直下のIII層上面、現地表面から確認面までの深さは、最も深いところでも30cm前後である。北側は表土が薄くなり、遺構の北縁付近は、現地表面に露出している状態であった。遺構の北側部分が不整形に近いのは、壁まで削平され、覆土の下部が部分的に残存するためであろう。北縁近くのほぼ中央で炭化物のやや集中する箇所が見られたが、表土がほとんどない部分でもあり、攪乱に類するものであるか否か確定できない。カマドの痕跡は見られなかった。

平面形は長方形、あるいは隅丸長方形と推定され、長軸方向での最大長は、7.08m、短軸長は、4.22mである。南側を入口部と見るなら、長軸方向は、N-9°-Wである。遺構を覆う土は、上部がI a層、下部がI b層からなる表土層である。上面での観察では、遺構覆土は、ローム層より黒みの強い暗褐色土で、焼土、炭化物あるいは土器片など遺物の混入は顕著ではなかった。



褐色土層：上部は暗褐色土の純表土。下部は粘性、しまりの全くない粒子の粗い山砂様褐色土。

図51 1号竪穴状遺構平面図・断面図

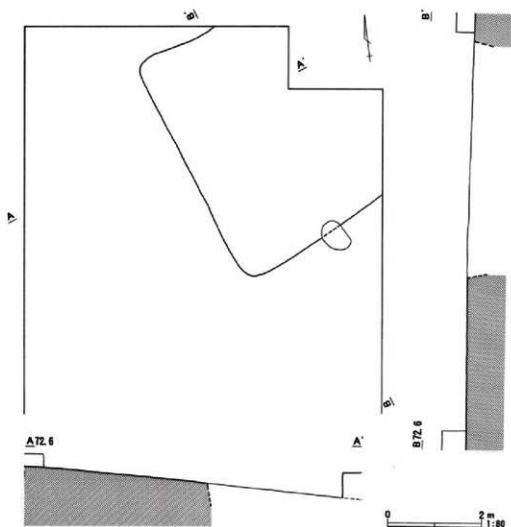


図52 2号竪穴状遺構平面図・断面図

b. 2号竪穴状遺構 (図52)

尾根平坦面の北東端、082A3-31・32グリッドに位置する。最短距離にある5号埴輪窯からは、南西に約20mの位置にある。確認面はⅢ層上面で、現地表面からの深さは24～56cmである。Ⅲ層上面が斜面に向かって傾斜しており、西側は表土が薄い。

確認できたのは、遺構の南西半のみであるが、平面形は方形と見てよいであろう。北西辺、南東辺間は、4.2m前後、南西辺の方向は、N-20°-Wである。カマドの痕跡は確認できなかった。

(2) 遺物 (図53、写真28・29)

1号竪穴状遺構からは計4点の埴輪片を検出した。いずれも人物双脚立像の台部から脚にかけての部位に該当する。1・2は脚の付根から足の爪先にかけての部位である。台部の天井を輪積によりドーム状に成形し、同じく輪積により天井から断面円形の脚部を造り出している。足は台部から脚を造り出したのち、脚の付根に三角形の粘土板を貼付して造形している。前方へは突出せず、ドーム状に成形された台部上面に密着させている。3はドーム状の天井部から脚の付根にかけて、4は台部本体から天井部への立ち上がりの部位である。台部は内外面とも不定方向のナデ、脚部は内外面とも縦方向

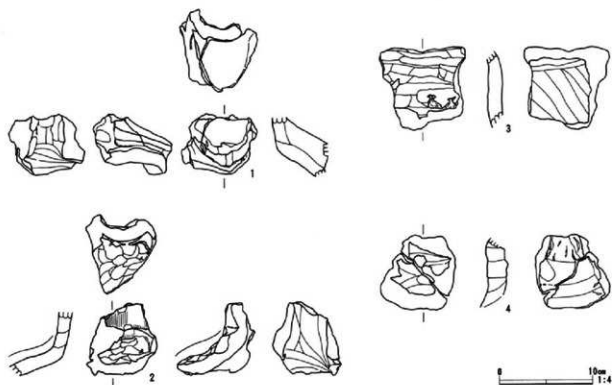


図53 1号整穴状遺構出土形象埴輪実測図

のナデにより調整を施している。いずれも胎土は精良で、若干の微細な砂粒を含む。焼成は堅緻で1の爪先周辺と4の下半部は還元化している。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈する。すべての個体が、断面を含め、やや摩耗している。

3 方形周溝墓

II・III次調査では、尾根の頂部平坦面および東斜面にトレンチを開掘し、確認調査を行った。調査の結果、頂部平坦面には、北半に竪穴状遺構と方形周溝墓が、南半には住居址、方形周溝墓および土坑、溝が高い密度で分布することが判明した。もとより確認調査ゆえ重複する遺構の基数、分布範囲⁽¹⁾、所属時期など検討すべき問題点も少なくないが、とくに方形周溝墓群に関しては、未知の墓域としてよく、早急に概要を明らかにする必要があると考えた。以下、確認した方形周溝墓について簡単な記載を行うことにしたい。

(1) 遺構 (図54、写真5)

II・III次調査で確認できた方形周溝墓は5基で、北から順に1～5号方形周溝墓の呼称を与えた。他にも周溝の一部かと思われる遺構があるため、方形周溝墓の実数は、さらに多くなると見てよいであろう。また、かなり丸みをもって周溝がめぐらに見える例もあり、方形以外の形態が含まれる可能性もないとは言えない。

なお、頂部平坦面の中央部から西斜面寄りにかけての帯には、広い範囲にわたって遺構がほとんど見られない。この範囲は表土が浅く、現地表下15～30cmでIV層としたハードルームが露出する状態であった。3号方形周溝墓と4号方形周溝墓との間にある周溝墓の大きな空白は、土壌の流失・削平を受け、方形周溝墓などの遺構が失われたことに起因する可能性がある。また、同様に尾根の北側先端一帯も土壌が大きく流失しており、余程深い遺構でなければ残存できない範囲と見てよい。

1～3号方形周溝墓は、頂部平坦面の北半で確認した遺構であり、確認面は、現地表面から10～20cm、III層上面である。

1・3号方形周溝墓は、南北の周溝がほぼ東西方向を向き、ともに西溝を確認していないが、おおむね方形、長方形に周溝がめぐら形態であろう。南北方向での現存長は、1号が16.5m、3号が12.5mである。1号の場合、西側が斜面にかなり近いため、西溝は土壌の流出とともに失われたのかもしれない。1号の東溝は、住居址と重複しそれを切り、北東コーナーも他の遺構と重複している可能性がある。トレンチ20の東西壁際では、サブトレンチを入れ断面観察したが、周溝が極めて浅く、覆土はロームを多く含む暗褐色土、あるいは褐色土であることのみ確認するに留まった。恐らく周溝の底面近くが辛うじて残存しているのであろう。北溝が東端で途切れているのは残存状態に関係するものと思われる。

1号方形周溝墓の北東コーナーで、小型壺、高坏坏部 (図55-1・2) と壺 (図55-3) を検出した。小型壺と高坏坏部は方台部寄りの位置で密着して、壺は南側わずかに離れた位置で、3点ともにほぼ同レベルから出土している。

2号方形周溝墓は、1・3号の東寄りで確認した遺構である。対角線がおおむね西南北を向いている。北西—南東方向での現存長は、9.2～10.5mである。南西溝は確認できず、周溝が全周しない形態となる可能性もある。北西溝の西端の確認面で壺が1点 (図55-4) 出土している。

4・5号方形周溝墓は、頂部平坦面の南半で確認した遺構であり、確認面は、現地表面から10～20cm、III層上面である。4号方形周溝墓は、南北溝の一部と東溝のみ確認した。東溝はやや丸みをもっているが、全体に方形、長方形に近い形態であろう。北溝が西端で途切れているのは残存状態がよく

ないためと見てよい。南北方向での現存長は6m前後である。5号方形周溝墓は、トレンチを拡張することで、おおむね西半部分を確認した遺構である。対角線がおおむね東西南北を向き、北西—南東方向での現存長は、9m前後である。4・5号の南、東側では後代の住居址が高い密度で分布しており、トレンチによる部分的な調査で、多数の遺構の中から周溝墓を選び分け判定すること自体困難であるが、大まかに見て、大小の周溝墓が細長い頂部平坦面に集中し、全体として基城を形成するものであることは間違いない。

(2) 遺物 [1~4] (図55、写真33)

1~3は、1号方形周溝墓出土土器、4は、2号方形周溝墓出土土器である。

1は高坏坏部で、口縁部の極一部を欠くも坏部はほぼ完存する。口径13.9cm、現存高は4.4cmである。一見すると碗形に近いが、坏部下半で微妙に屈曲し、上半が大きく外反する形態である。内外面ともにタテ、ナナメの丹念なミガキが加えられている。接合部の脚部側には、脚部が接着していた粘土の接合面が残されており、脚部は接合面から脱落した模様である。また中央には、坏部の内側から充填された粘土が丸く突き出ている。内外面ともに細かな剥落が顕著である。雲母の一種かと思われる光沢のある細かな岩片や赤色粒などの細砂を含み、橙色を呈する。焼成は良好である。

2は小型壺である。胴部中位から底部にかけて一部を欠失する。器高16.4cm、口径8.4cm、胴部最大径12.7cm、底径3.4cmである。頸部から口縁部にかけて微妙に彎曲し、いわゆる甗形壺の面影をとどめる。外面にはナナメのミガキが加えられているが、調整痕はかなり浅い。内面はナデ仕上げのように見えるが、所々整形痕をとどめており、どちらか区別できない部分も多い。胴部中位を中心に鮮明な黒斑が見られ、また所々淡い黒斑がみとめられる。胴部内面には細かな剥落が顕著である。

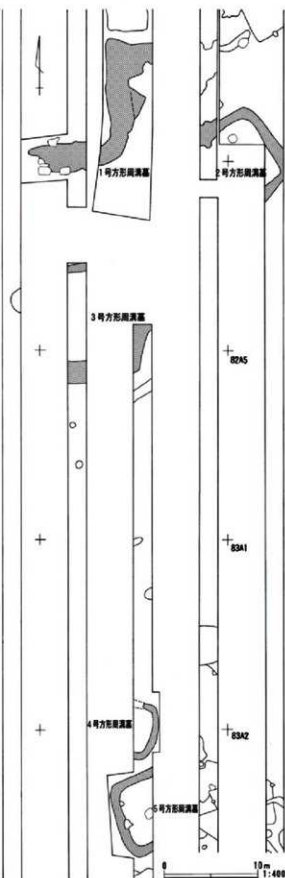


図54 II・III次調査区方形周溝墓位置図

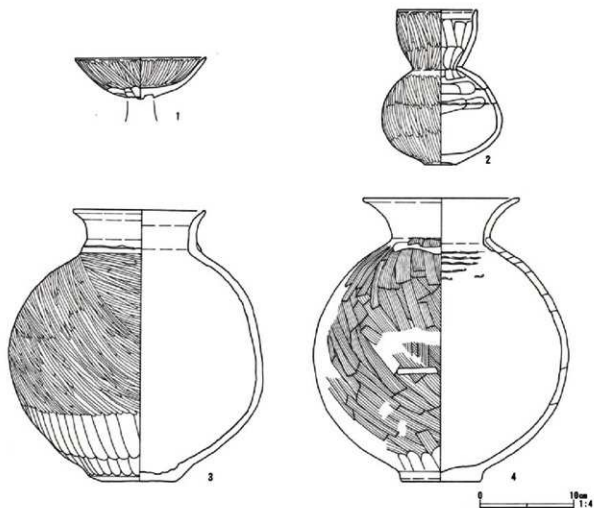


図55 1号周溝墓出土土師器実測図

二次的に火を受けている可能性がある。底面は上底である。角閃石片などの細砂をかなり含み、橙色を呈する。焼成良好であるが、精製土器としてはやや軟質である。

3は広口短頸の壺である。口縁部の大半が欠失しており、胴部中位から底部にかけては部分的に所々残存する破片を接合し、復元しえた。端部は極わずかに残存するのみで、しかも磨耗しており、もう少し口縁部が長くなるのかもしれない。器高28.5cm、口径19cm、胴部最大径26.7cm、底径7.8cmである。頸部以上の外面にはヨコナデが加えられ、下端には、断面三角形の低い突帯が付されている。以下、ナナメを主とする細かいミガキが加えられている。磨耗、剝落が著しく、調整痕は部分的にしか確認できない。胴部下位～底部の外面には、ナナメの粗い調整痕がみとめられる。口縁部内面はヨコ、以下ナナメ、ヨコのナデが加えられている。大小の丸い剝落が著しく、とくに底部の内面は剝落により本来の器表をほとんどどめない。被熱によるものか小礫はげた跡とも見える。底部の内外面に黒斑が見られる。大小砂粒を多量に含み、明赤褐色を呈する。焼成は良好であるが、やや軟質の土器である。

4も広口短頸の壺である。頸部から底部にかけて1/3～1/2前後欠失し、口縁部は極一部のみ残存する。器高30cm、口径16.6cm、胴部最大径27cm、底径8.1cmである。頸部以上の外面にはヨコナデが

施されているが、部分的に下調整の浅いハケメがみとめられる。以下、底部付近までナナメのハケ調整が加えられている。ハケメは、条間が5本で幅7mm前後、条が整っており、鮮明である。ただし、胴部中位から底部にかけて器壁が荒れており、ハケメも部分的に不明瞭である。底部付近の外面には、ナナメ、ヨコのケズリ、ナデが加えられている。口縁部から頸部にかけての内面調整は、ヨコハケである。胴部内面は、無調整に近いが、所々ナデ痕が見られる。胴部中位を中心に炭化物が所々途切れながら幅広い帯状をなし付着しており、胴部下位には黒斑がみとめられる。炭化物は、二次的な被熱にかかわるのかもしれない。微妙な上底で、底面には木葉痕がみとめられる。大小砂粒を含み、明赤褐色を呈する。焼成は良好である。

註

- (1) II・III次調査に加え、平成12年12月15日から平成13年1月20日までの期間、新幹線新駅建設関連の仮設道路敷設工事に伴う試掘調査を、同じ尾根の北西、西斜面全域にわたって実施した。調査範囲は、有勝寺北裏遺跡(53-109)の内におさまる範囲であったが、北西斜面の最上部、平場の落ち際にあたるやや傾斜のゆるい一帯で、数条の溝を確認した。II次調査の北西端のトレンチにごく近接した位置で確認した溝から、器受部のみほぼ完存する器台破片が出土している。残存状態がよくないこともあり、試掘調査時周溝の一部とする証左はとくに得られなかったが、北西斜面の一部に周溝墓が分布する可能性は捨て切れない。いずれにせよ北西、西斜面についても、今後とも遺跡の状態をより細かく見極めてゆく必要がある。

4 その他の遺構と遺物

(1) 住居その他 (図2)

前節においてすでに述べたとおり、II・III次調査区の南半部では、方形周溝墓のほかには竪穴住居、溝、土壇、円形周溝等の遺構が相当の密度で分布することが判明している。調査の範囲が限られるため、これら遺構群の性格、範囲等の全容はさらに今後の確認調査によらなければならないが、出土遺物から近接する上越新幹線の軌道敷設の際に調査された東谷遺跡と同時期と考えられる竪穴住居が存在する点は注目される。確認面上層からの出土ではあるが、竪穴住居に関係する遺物は6世紀代に所属するものも多く、今回の調査で検出した竪穴住居群は、東谷遺跡へと丘陵東側の同一斜面上に連続する一連の遺跡である可能性も考えられる。また、有勝寺裏埴輪窯跡の操業時期も確実に6世紀のうちに入ることから、同窯の操業に関係した埴輪工人の居住地としての可能性も存在しよう。

(2) 縄文土器 [1~8] (図56、写真32)

宥勝寺北裏遺跡は、周辺地域でも数少ない縄文時代草創期～早期の遺跡としてこれまで知られてきたが、確認調査ということもあり、II・III次調査ではごくわずかな縄文土器細片しか検出できなかった。本遺跡の場合、例えば縄文時代草創期～早期遺物に関しては、表面採集にもとづく所見(菅谷1976c)やI次調査(橋本ほか1980)で強調されてきたように、偏在する傾向が顕著なようであり、遺物の稀少さもそれゆえであろう。頂部平坦面の調査所見では、尾根の先端一帯は、ほとんど表土層直下にロームが露出する状態であり、標準土層II b層からIII層にかけての縄文時代包含層は全く遺存していなかった。また、北東斜面でも縄文時代遺物が検出できたのは、ほぼ斜面上部に限られた。

以下、主にII次調査時に得られた資料を記載するが、4は西斜面、8は前年度の試掘調査で尾根基部に近い一帯より得られた資料であり、参考までに提示することとした。

1・2は燃糸文系土器の胴部片である。1には縦走るRの燃糸文が密接施文されている。2は胴部下位で、燃糸条痕かと思われる条線が施され、破片左半にはケズリが加えられている。1は橙色で白色粒やスコリアかと思われる大粒の赤色粒をかなり含み、2にはぶい黄褐色を呈し、細かな白色粒を含む。ともに焼成良好である。稲荷台式であろうか。

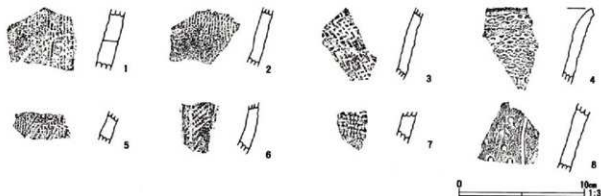


図56 II次調査区出土縄文土器拓影図

3・4は押型文の施された口縁部片、胴部片である。3には山形押型文が縦位に施文されている。押型文は部分的に重複しており、菱形を列ねたようにも見える。にぶい黄橙色を呈し、1～3mmの片岩片や砂粒を含む。外面は堅く、内面はやや脆弱で剝離が目立つ。4は口縁部がゆるやかに開く深鉢である。端部には微妙な面が作出されている。口縁部外面には、楕円押型文が施され、下端にはまた別の押型文が施文されている。破片下端の押型文は、細かなひだのような縦長の圧痕にも見えるが、残存部分がわずかなため単位を見極めることができない。いずれにせよ口縁部と胴部の2つの施文域からなる構成をとるのであろう。にぶい褐色を呈し、長石などの岩片と思われる白色粒を多量に含む。焼成良好である。

5は条痕文の施された胴部片である。外面には縦、斜めの条痕が施されている。にぶい黄橙色で、砂粒を含む。焼成良好で、繊維の混入は見られない。

6・7は縄文の施された胴部片である。磨耗しており判然としないが、6の破片の左右縁には、縦の沈線が施されている。無文帯と交互に繰り返される縄文帯の一部であろう。7は網代痕の可能性もあり、とすれば底部片になる。ともに砂粒を含むも、橙色の焼成のよい土器である。加曾利E式と考えたが、7は底部片とすれば時期的にさかのぼる。

8は縦位帯状の沈線区画内に列点が配される胴部片である。にぶい黄橙色を呈し、焼成良好である。称名寺II式である。

他に燃糸文系土器の小破片1点、縄文のみ施された小破片1点、時期不明の無文の縄文土器片10点が出土している。

Ⅶ 宥勝寺裏埴輪窯跡出土埴輪の成分分析

松本 建速 (筑波大学大学院)

1 はじめに

埼玉県・群馬県には埴輪窯が多く存在し、その胎土分析も比較的多く実施されている(三辻ほか2001・成瀬ほか1982など)。しかしこれまでは、埴輪窯出土品を地球化学的に把握するといった研究はほとんどない⁽¹⁾。これまでに測定されてきたデータだけでは、個々の窯から出土した埴輪胎土を窯周辺の地質と比較することは十分にはおこなえず、埴輪製作者がどの地域のどの層の粘土を利用したのかといった考察は満足にはおこなえないのが現状である。

加えて、窯出土の埴輪の地球化学的特徴を把握することは、産地推定をおこなう上でも大変有用である。埴輪胎土の外観や埴輪の形態・整形技法といった属性を基本にして立てられた埴輪の産地に関する考古学的仮説を、埴輪胎土を地域の地質に位置づけることで、地球化学的に検証することができるようになるのである。

そこで、今回、埼玉県本庄市に所在する宥勝寺裏窯出土の埴輪を試料として、埴輪窯跡周辺の地球化学的背景との比較も視野に入れた胎土分析を実施した。このように、本分析の目的の第一は、宥勝寺裏窯出土埴輪の地球化学的考察が可能な化学成分を報告することにある。そして第二の目的は、宥勝寺裏窯出土の埴輪の胎土成分にどのような多様性があるのかを見ることにある。

また、遺跡周辺の粘土の分析は実施できなかったが、近世以来瓦原料とされてきたという本庄市・群馬県藤岡市採集の「藤岡粘土」の分析値との比較、千葉県松戸市・茨城県土浦市の土器・須恵器との比較をおこない、宥勝寺裏窯出土埴輪胎土が地球化学的にどの地域の粘土に近いのかを、若干考えた。

2 試料

宥勝寺裏窯跡の調査によって得られた埴輪の主な破片の観察をおこない、胎土の外観と調整の特徴により分類した。そのうち21点を試料とした。本窯出土の埴輪は、胎土の外観から、大きく2つに分類できた。粗砂を多く含む灰色のチャート礫(径5~8mmほど)を疎らに含むタイプ(以下では粗砂チャート礫タイプと呼ぶ)と、粗砂をほとんど含まず、細砂~粘土が主体であるタイプ(以下では細砂タイプと呼ぶ)である。そして更に、ハケメの幅や、含まれる鉱物種類により細分したが、胎土についてはあくまでも外観による分類であり、厳密なものではない。その属性については表2に記した。

3 方法

分析は誘導結合プラズマ発光分光分析法(以下ではICP-AESと略す)によった。形態分類・製作技法などの考古学的考察が可能なように、ほぼ完形品やそれに近い大きな破片を試料としたので、試料の破損をできるだけ小さくする必要があった。そこで、用いる試料が微量で済み、かつ短時間に多元素を高精度で測定できるこの方法を選んだ。装置は筑波大学分析センター設置の日本ジャーレル・アッ

シュ社製 ICAP-757V である。

4 分 析

(1) 試料作成

土器の破損部から1～2cm四方ほどの破片を採取する。土器破片表面を電動やすりで研磨し、土器表面の付着物を取り除く。1cm四方ほどの土器破片を瑪瑙乳鉢で粉砕し、すりつぶす。すりつぶされた粉末を0.05g秤量し、蓋付きのテフロン容器に入れる。それに、硝酸0.5cc、過塩素酸0.5cc、フッ化水素酸1.0ccを、この順に加え、蓋を閉め、容器ごとホットプレート上に置き、100°Cほどで6時間以上熱する。次に蓋を開け、200°Cほどに加熱し、蒸発乾固させる。乾固された試料に6規定蒸留塩酸1.0ccを加え、200°Cほどで再び蒸発させる。しばらく放冷後、1規定硝酸を加え、100°Cほどで緩やかに加熱する。試料が完全に溶けていることを確かめた後、1規定硝酸を加え、1000倍に希釈し、50gの溶液試料を得る。

また、分析対象土器のほとんどの胎土中に炭素が染み込んでいたので、乳鉢での粉砕・搗潰しの後、マッフル炉を用いて500°Cで2時間加熱し、炭素を除いたものを試料とした。炭素を除いた理由は次である。まず、炭素は酸に溶けづらいので、炭素を残したままでは良い試料が得られない。そして、炭素は、本来の素地にも入っているだろうが、土器焼成時や煮沸具としての使用中にもしみ込む。そのようにして土器製作の後にしみ込んだ炭素の量は個体によって異なる。意図的に炭素を吸着させる内黒土器師のようにかなり多くの炭素が入る場合もある。したがって、炭素が入っていると土器製作時の本来の成分組成を測定できない。炭素が入ったまま測定すると、素地中にもともと多く含まれる成分ほど含有量の誤差が大きくなるのである。筆者が測定した例では、炭素を除くと、除く前よりも、測定された元素総量が1%ほど増える場合が多かった。

粘土・シルト・砂を対象とした場合は、採集試料を100°Cで充分乾燥させた後、瑪瑙乳鉢を用いて搗潰し、マッフル炉を用いて500°Cで2時間加熱し、炭素を除いたものを分析試料とした。秤量し、酸で溶かし、溶液試料を得る過程は、土器試料を得る過程と同じである。

(2) 実 験

得られた溶液試料をICP-AESで定量分析した。定量は、標準試料を分析対象試料と同じ方法で溶液化し、それを用いておこなった。用いられた標準試料は、地質調査所発行の、JA1、JB1a、JG1a、JG1b、JR1、JSd1である。測定した元素は、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P、Ba、Cr、Cu、Co、La、Li、Ni、Sc、Sr、V、Y、Zn、Zrの22元素である。これらの元素は、Masonの地殻平均（松井・一國訳1970）で存在度が高いとされる元素のうち、20ppm以上含まれる元素のほとんどを含むので、地質的背景を考えながら土器胎土成分の地域差を考察するのに利用できる。

5 結 果

分析結果は、主要元素については重量%、微量元素をppmで示した（表1）。測定したすべての元素について濃度別にグラフを6つ作り、図示した（図1）。その結果を次にまとめる。

(1) 【9～11%ほど含まれる元素】：Al

Alは8.8～11.2%前後含まれていた。多くのものは10～11%である。

(2) 【4から8%ほど含まれる元素】：Fe

Feは4.5～8.2%ほど含まれていた。多くは7%前後である。

(3) 【0.5～1.5%ほど含まれる元素】：Ti・Mg・Ca・Na・K

Tiは0.5～0.8%前後含まれていた。Mgは0.7～1.6%ほど含まれていた。Caは0.5～1.5%ほど含まれていた。Naは0.9～1.8%ほど含まれていた。Kは0.8～1.2%ほど含まれていた。TiとKは試料による変動の幅が小さいが、Mg・Ca・Naは変動の幅が大きい。

(4) 【0.03～0.17%ほど含まれる元素】：Mn

Mnは0.028～0.17%ほど含まれていた。多くは0.05%ほどであるが、稀に0.16%を越す。

(5) 【250～450ppmほど含まれる元素】：P・Ba

Pは238～499ppm含まれていた。Baは278～435ppm含まれていた。

(6) 【70～250ppmほど含まれる元素】：Cr・V・Sr

Crは76～258ppmほど含まれていた。Vは141～251ppmほど含まれていた。Srは94～150ppmほど含まれていた。チャート礫が散在するものはCrが特に低い。

(7) 【60～130ppmほど含まれる元素】：Ni・Zr・Zn

Niは59～127ppm含まれていた。Zrは85～120ppm含まれていた。Znは65～106ppm含まれていた。チャート礫が散在するものはこれらの3元素はあまり含まれない。

(8) 【10～60ppmほど含まれる元素】：Cu・Li・Sc・Co・Y・La

Cuは31～58ppm含まれて、この中では比較的多く含まれる元素であるが、他の5元素は、10～30ppmほど含まれるだけである。チャート礫が散在するものは他の試料に比べれば、これらの元素もあまり含まれない。

(9) Siの算出

地球地殻においてはSiは酸素に次いで多く含まれる元素である。そして、メイソンによる地殻の平均組成ではO、Si、Al、Fe、Ti、Mn、Mg、Ca、Na、K、Pの11元素だけで99.23%となる(松井・一国1970)。したがって、今回分析した主要元素8種を酸化物として換算し、それぞれの試料において100からそれらのトータルを減ずれば、おおよそのSiO₂量を算出することができる。

そうして導いた値は、Siに換算すると27.59～32.99%である。これらはおおよその値であり、厳密な比較には利用できないが、傾向を知るために算出した。粗砂チャート礫タイプの試料にSiが多く(30.13～32.99%)、細砂タイプの試料には相対的にSiが少ない(27.60～30.10%)。

6 考 察

(1) 堆積の後に土器に沈着する可能性のある元素

鉱物が風化すると化学成分が溶脱する。土器も同様である。したがって、製作された当時の土器胎土と土中における堆積を経た土器とでは、化学組成に違いがある場合がある。だが、これはあくまでも風化があった場合のことである。したがって、風化している場合が多い器表面や風化により土器自体がもろくなったようなものを試料としなければ、風化による胎土成分の変化は無視できる範囲にな

ると考えられる。そこで、今回は風化していない部分を選択し、しかも器表面を除去した芯の部分を試料としたので、風化による化学成分の溶脱については無視して考察を進める。

だが、土器が土中に堆積している間に土器胎土中に沈着しやすい元素がある。Ca、P、Sr、Baなどである。ただし、それらの元素の沈着がおこるのは、それらを多く含む環境に土器が堆積していた場合である(松本2001a)。それらの元素は動物や植物に多く含まれているので、有機質が多く含まれる場所に土器が存在したときには、それらの元素が沈着する可能性はあろう。だが、今回の試料では、沈着しやすいと予想されるCa・P・Sr・Baに極端な値はなく、土器が土中に堆積している間に元素が沈着するという現象はほぼなかったと考えられた。したがって、今回の試料では、測定されたすべての元素を考察の対象とできる。

(2) 指標①と②に基づく土器胎土の差

地球を形成している鉱物は大きくは無色鉱物(フェルシック鉱物とも言う)と有色鉱物(マフィック鉱物とも言う)に分けることができる。そして、無色鉱物の代表に地殻の60%を構成すると言われる(地学団体研究会編1995:110頁)長石がある。したがって、長石を構成する元素組成が地域ごとに特徴を持つならば、それは土器胎土の産地推定をおこなうにはかなり有効となるはずである。三辻がおこなっている土器の産地推定でもその原理は長石を構成する元素を用いたものであり(三辻1983・1999など)、有効な場合が多い。そこで、松本(2001b)では、長石を構成する主要な元素であるCa・Na・Kを用いた2つの指標を作った。K/Na+Ca、Ca/Na+Kである。そして、その2つの指標をまとめて指標①と呼んだ。

この2つの指標は長石の化学成分の特徴に基づいている。一般的に、長石はカリ長石(KAlSi₃O₈)、アルバイト(NaAlSi₃O₈)、アノーサイト(CaAl₂Si₂O₈)の3つの成分を端成分とする固溶体である。そして、牛来・周藤(1997:18頁)によれば、長石における3つの端成分の混交比には制限があり、ある特定範囲内の混交比の長石しか存在せず、普通、長石はアノーサイトとアルバイトを端成分とする斜長石とカリ長石とアルバイトを端成分とするアルカリ長石に大別される。カリ長石とアノーサイトを端成分とする固溶系列は天然には見いだされない。以上のことに基づいて、斜長石を構成するNaとCaに対するK(これはアルカリ長石にだけ含まれる成分である)の比率を見たのがK/Na+Caである。アルカリ長石を構成するNa+Kに対するCa(これは斜長石にだけ含まれる成分である)の比率を見たのがCa/Na+Kである。この、主に長石の違いを反映していると見ることができる指標を、長石の指標と呼ぶ。なお、松本(2002b)では、千葉県松戸市・同泉成田市では、同一の層の場合、東の地域ほどK/Na+Caの値は大きくなり、西ほど小さくなることが示されている。

指標①は無色鉱物の地域的特徴を見るものであったが、有色鉱物を構成する主要な元素であるTi・Fe・Mgと、粘土鉱物を構成する主要な元素であるAlを組み合わせてTi/Al+Fe+Mgという指標を作った。これを指標②と呼ぶ。この指標に用いた元素の組み合わせの根拠は松本(2001b)に述べられている。そして、指標①と②を用いて相関図を作り、それぞれの土器に含まれる無色鉱物と有色鉱物の特徴をつかむことにした。

図2-1・2には宍勝寺裏窟跡出土の埴輪の指標①②の値を示してある。それらの図によると、試料No1~4とそれ以外の試料に大きく2区分できる。No1~4は、粗砂チャート礫タイプの円筒埴輪で

ある。ただ、指標①ではNa 1だけが細砂タイプの集団に近い値である。Na 1も粗砂が多いものだが、灰色チャート礫がNa 2～4よりは少ない比率で入るものである。図1に示した各種の元素濃度ではNa 1は他の粗砂チャート礫タイプ円筒埴輪とは元素濃度がいくらか異なる場合が多い。次に細砂タイプを見ると、Na 5・7・8・11・12・18・19・21は円筒埴輪でも形象埴輪でも、その化学成分はかなり似ている。また、指標①②とも近い値を示すNa 15と16は同一個体の異なる部分（15cmほど離れている）である。

以上のように、指標①②によって、粗砂チャート礫タイプの円筒埴輪と細砂タイプの円筒埴輪・形象埴輪とは、いくらか化学成分が異なっていたことが示された。分析試料を作成する際には、5～8mmほどのチャート礫は入らないように注意したので、これらの胎土化学成分の2タイプは、粘土～粗砂の成分の違いであると考えてよいであろう。また、Na 1～4の埴輪素地にチャート礫や粗砂が多く混ぜられるのは、その素地に用いた粘土だけでは理想的な焼成状態にならないからであると考えられる。一方、細砂タイプのような、粗砂がほとんど含まれないタイプの素地の場合、粗砂や礫を混ぜなくても理想的な焼成状態が得られた粘土であった可能性がある。これは両タイプの粘土鉱物の形状あるいは、種類自体が異なる可能性があろう。

(3) 粗砂タイプと細砂タイプの化学成分の違い

図1を見ても、Mg・Ca・K・Ti・Cr・V・Ni・Zn・Cu・Sc・Co・Yらの元素は粗砂チャート礫タイプと細砂タイプとはかなり異なることがわかる。たいてい、粗砂チャート礫タイプの方がそれらの元素濃度が低いのである。Fe・Zr・Laも粗砂チャート礫タイプの濃度が比較的低い。このように、粗砂チャート礫タイプの胎土は、細砂タイプとは多くの元素濃度が異なっている。

(2)の最後に、粗砂チャート礫タイプと細砂タイプとは粘土鉱物自体に違いがあると述べた。ここで見たように、両タイプの胎土では多くの元素濃度が違っていた。これらの粘土や砂がどこで採掘されたものであるかは不明だが、採掘地がある程度異なっているのではなかろうか。また、粗砂タイプの中で、Na 1の各種の元素濃度が、他の粗砂タイプ試料とは異なっている。Na 1だけが、いくらか粘土採掘地が異なっていた可能性もあろう。

(4) 周辺粘土・関東地方の他地域土器試料との比較

図3-1・2には群馬県藤岡市や本庄市周辺の「藤岡粘土」（五十嵐・藤貫1981・五十嵐ほか1983）、松戸市稔台遺跡の古墳時代前期・弥生時代後期の試料（松本2003）、土浦市栗山窯出土の須恵器試料（松本2002b）の分析値も作図してある。稔台遺跡出土の土器も、土浦市栗山窯出土の須恵器もそれぞれ、その遺跡周辺の粘土で作られたと考えられているものである。

図3-1では、土浦市栗山窯の須恵器や土師器の値が最も右に位置しており、松戸市稔台遺跡の土器が中央にある。宥勝寺裏窯出土の埴輪では、細砂タイプが左上に位置し、粗砂チャート礫タイプは少しだけ右寄りになる。いずれにしても、宥勝寺裏窯出土の埴輪は松戸市や土浦市の製品に比べると、より左上に位置することがわかる。そして、宥勝寺裏窯出土埴輪試料に最も近い値なのは、「藤岡粘土」試料である。

松本（2001b）によると、須恵器は土師器よりもKの高い粘土が使われるので、指標①では同じ地

域でも須恵器が土師器よりも右寄りになることが多い。土浦市栗山窯跡出土製品の中に1点だけ土師器があり、その化学成分はやはり栗山窯出土製品の中では最も左よりに位置している。それでも、その値は、松戸市の土器よりも右に位置している。以上のことから、本庄市・松戸市・土浦市の土器・土製品の胎土成分を比較した場合、より西の地域のものほどCa+Naの比率が高くKの比率が低い、そして、より東の地域のものほどKの比率が高くCa+Naの比率が低いことがわかる。

次に、有勝寺裏窯出土埴輪胎土の特徴を示す元素に注目する。図3-3にはMgとMnの値を見た。有勝寺裏窯出土品は、松戸市や土浦市の試料に比べてそれらの元素がかなり多い。藤岡市や本庄市周辺の藤岡粘土には更に多くのMgやMnが含まれている。五十嵐・藤貫(1981)によれば、藤岡粘土には緑泥石や角閃石を多く含むとされるが、これらはMgを多く含む鉱物である。また、化学式から考えれば、緑泥石にはMnも含まれる。そして、藤岡粘土は藤岡市だけでなく、本庄市周辺にも分布する。Mgの値は有勝寺裏窯の埴輪が本庄市周辺の藤岡粘土あたりを原料としている可能性を示している。

また、一般に下末吉ローム層のような白っぽい粘土で、それが現在の地表から離れた場所にある場合は、Mnの濃度は低い。白っぽい粘土でも、現在の地表に近い場合は、植物などの影響でMn濃度が少し増えているようであるが、植物の根の影響を受けにくい地帯から離れた位置にあるそれらの粘土の場合、筆者の分析ではMnの濃度は普通0.05%以下であり、これは地域を問わず一定である(松本2001b・2002b)。下末吉層粘土やいわゆる常総粘土を利用していると考えられる松戸市・土浦市の試料の場合、Mn濃度は0.05%に及ばない(図3-3)。それに対し、藤岡粘土はMnがほぼ0.1%以上である。有勝寺裏窯細砂タイプ試料は0.05~0.17%ほどである。以上のことから、Mn濃度も胎土の基本になった粘土は白色タイプの粘土ではなく、暗色の粘土であることを示している。五十嵐ほか(1983)によれば、藤岡粘土は暗灰色~暗褐色、暗色と表現されている。

図3-4にはNiとCrの値を見た。松戸市や土浦市の試料に比べると、有勝寺裏窯跡出土埴輪はNi・Crがかなり高いことがわかる。特に、粗砂をあまり含まないタイプのものにはNi・Crが非常に多い。五十嵐・藤貫(1981)・五十嵐ほか(1983)ではNi・Crが測定されていないので藤岡粘土についてはそれらの値を述べることはできない。だが、化学式に基づいて考えれば、緑泥石にはNiもCrも含まれるので、それらの値が高いということも、それが緑泥石を含む粘土であることを示している可能性は高からう。

7 おわりに

以上、今回分析した埴輪試料21点は、窯出土資料の主なもの全般を観察し、外観によって4分類した試料を分析した結果なので、出土資料の特徴は示せたであろう。また、地球化学的に利用できる基本的データの蓄積には寄与できた。しかも、粗砂チャート礫タイプと細砂タイプのように外観で大きく二つに分けられた試料群は化学成分でも二つに分けられた。このことから、近隣の窯であっても、胎土の化学組成によって、窯ごとの違いを読み取ることができる可能性があることがわかった。

ただ、今回の分析試料は有勝寺裏窯出土埴輪だけであり、遺跡周辺で産出する粘土等の分析はおこなっていない。そのため、埴輪胎土の産地についての考察はあまりできなかった。が、本庄市周辺の藤岡粘土の既存の分析値との比較により、有勝寺裏窯埴輪胎土の主体は藤岡粘土に近いことが予想で

きた。宥勝寺裏窯埴輪の胎土の特徴は Mg を多く含むことであった。それは、緑泥石や角閃石に由来する可能性が高かったのである。Mg は主要元素ではあるが、松戸市や土浦市の土器ではあまり目立たない元素であった。

本分析では ICP-AES を用いたため、微量元素も比較的多くの種類を測定した。だが、多種類の微量元素を測定しなければ各地の地球化学的特徴を把握できないというわけではない。分析される元素の種類は、地殻を構成する主要元素を測定しておけば、基本をおさえるには十分であろう。今回の分析でも、関東地方内で土器・土製品の胎土を比較するとき、主要元素の一つである Mg が埼玉県北部あたりの粘土の特徴を示せる元素の一つであることが明らかになった。

今後、関東地方北部各地の粘土や窯出土埴輪などの化学分析データが蓄積されていけば、それぞれの窯の製品がどの辺りの粘土を利用して製作されたのか、ある程度推測できるようになってゆくであろう。

註

- (1) H₂O を除いた地殻の大部分は、主要元素あるいは主成分元素と呼ばれる Si、Al、Ti、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P らの酸化物で構成される。したがって、各地の地球化学的性質を把握するには、これらの主要元素の組成を知るのが基本である。三辻ほか (2001) では Ca、Na、K、Fe、Sr、Rb が測定されている。Ti、Mg、Mn といった有色鉱物を構成する重要な元素が測定されていない。成瀬ほか (1982) では Si、Al、Ti、Fe、Mg、Ca、K が測定されている。ある程度の元素は測定されているが、長石について考える上で重要な Na が測定されていない。また、おおよその層準を考えるのに有効な Mn も測定されていない。

引用・参考文献

- 五十嵐俊雄・藤貫 正 1981 「群馬県藤岡地区の瓦原料粘土鉱床」『未開発陶磁器原料資源調査報告書 (昭和55年度)』37-59頁 工業技術院地質調査所
- 五十嵐俊雄・藤貫 正・阿久沢秀昭 1983 「埼玉県北部地区の瓦原料粘土資源」『未開発陶磁器原料資源調査報告書 (昭和57年度)』97-117頁 工業技術院地質調査所
- 牛来正夫・周藤賢治 1997 「地殻・マントル構成物質」共立出版
- 地学団体研究会編 1995 「新版地学教育講座③鉱物の科学」東海大学出版会
- 成瀬正和・山路 進・中村木の実・榊原雄太郎・大沢真澄 1982 「桜山窯址群出土須恵器、埴輪の化学的検討」『桜山窯跡群』190-199頁 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第7集
- 松井義人・一国雅巳訳 1970 「一般地球化学」岩波書店
- 松本建速 2001 a 「木戸前遺跡出土土器の胎土分析」『木戸前遺跡』21-26頁 松戸市遺跡調査会
- 松本建速 2001 b 「五所川原産須恵器の胎土分析」『物質文化』1-21頁 物質文化研究会
- 松本建速 2002 a 「礼文島浜中2遺跡・利尻島種屯内遺跡出土土器の胎土分析」『筑波大学先史学・考古学研究』13号 1-15頁
- 松本建速 2002 b 「千葉県北部・茨城県南部の土器胎土・第四紀層粘土の成分分析」『土曜考古』65-84頁

松本建速 2003「第4節 秋山神宿遺跡出土土器の成分分析」『秋山神宿』58-63頁 松戸市遺跡調査会

三辻利一 1983 『古代土器産地推定法』ニュー・サイエンス社

三辻利一 1999 「②元素分析による須恵器の産地推定」「④考古学と年代測定学・地球科学」294-313頁 同成社

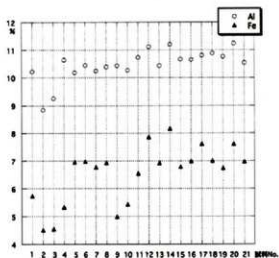
三辻利一・山崎 武・新井 端・太田博之・山川俊一郎 2001「統計学的手法による古代、中世土器の産地問題に関する研究(第12報)一埼玉、群馬両県内の埴輪窯群間の相互識別一」『情報考古学』6(2) 38-54頁 日本情報考古学会

表1 分析値

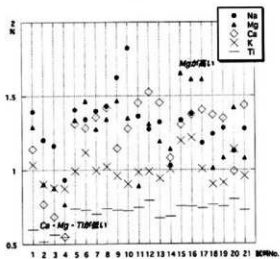
サンプル名	単位: Ti~P (%)・Ba~Zr (ppm)																					
	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Ba	Co	Cr	Cu	La	Li	Ni	Sc	Sr	V	Y	Zn	Zr
宍戸寺裏室№01	6.002	10.2182	5.7458	0.0565	1.2930	1.1421	1.3959	1.0363	0.0295	340	19	170	38	21	32	86	25	124	172	25	81	85
宍戸寺裏室№02	0.5185	8.8438	4.5157	0.0358	0.9053	0.7690	1.2034	0.9055	0.0261	278	15	95	31	16	27	59	19	115	148	15	65	85
宍戸寺裏室№03	0.5637	9.2514	4.5498	0.0462	0.8778	0.6836	1.1637	0.8793	0.0238	309	16	110	31	14	27	70	19	103	170	14	66	87
宍戸寺裏室№04	0.5485	10.6425	5.3383	0.0279	0.7679	0.5191	0.8046	0.8741	0.0254	339	15	78	34	13	22	69	19	101	141	13	73	93
宍戸寺裏室№05	0.7389	10.1830	6.9595	0.0483	1.3408	1.3137	1.4092	0.9932	0.0290	353	21	192	45	19	31	91	26	138	226	20	87	107
宍戸寺裏室№06	0.7285	10.4543	6.9840	0.0494	1.4609	1.2853	1.3440	1.1181	0.0250	310	21	194	45	17	30	91	25	131	243	15	83	108
宍戸寺裏室№07	0.7028	10.2473	6.7800	0.0488	1.2777	1.3578	1.4007	0.9964	0.0331	356	20	192	43	16	34	93	24	143	209	18	83	94
宍戸寺裏室№08	0.7390	10.3881	6.9356	0.0522	1.3443	1.4217	1.4339	1.0216	0.0291	339	22	203	46	19	26	96	26	147	251	19	75	111
宍戸寺裏室№09	0.7270	10.4374	4.9987	0.0808	1.4674	1.1466	1.6246	0.9509	0.0276	305	20	160	40	16	30	87	25	114	176	20	79	105
宍戸寺裏室№10	0.7249	10.2711	5.4421	0.0662	1.3513	1.2812	1.8251	0.9046	0.0278	290	18	155	32	14	27	80	24	129	144	16	75	99
宍戸寺裏室№11	0.7466	10.7302	6.5518	0.0653	0.8921	1.4552	1.3649	0.9845	0.0281	310	21	196	54	20	21	88	28	146	233	27	78	116
宍戸寺裏室№12	0.7921	11.1182	7.8630	0.0728	1.3131	1.3258	1.2776	0.9902	0.0304	373	24	217	57	17	32	102	26	150	225	18	87	105
宍戸寺裏室№13	0.6748	10.4377	6.9211	0.0535	1.1936	1.4556	1.3250	0.9432	0.0399	337	19	181	54	23	26	87	27	148	218	31	82	98
宍戸寺裏室№14	0.6864	11.2031	8.1766	0.0569	1.1421	1.0824	1.0315	1.0047	0.0367	416	22	258	52	22	219	112	28	109	248	28	91	98
宍戸寺裏室№15	0.7552	10.6673	6.7935	0.1617	1.6541	1.3085	1.3381	1.1971	0.0375	404	24	184	52	18	27	123	26	140	168	18	103	92
宍戸寺裏室№16	0.7541	10.6531	6.9974	0.1726	1.6118	1.3753	1.3794	1.2174	0.0378	385	26	182	58	21	27	127	26	149	159	19	106	88
宍戸寺裏室№17	0.7415	10.8095	7.6133	0.1063	1.6112	1.4068	1.1831	1.0074	0.0499	400	26	185	52	21	28	118	26	145	241	18	97	105
宍戸寺裏室№18	0.7637	10.8877	7.0152	0.0492	1.0127	1.3724	1.2438	0.9030	0.0270	350	22	221	46	22	24	117	28	147	243	21	82	102
宍戸寺裏室№19	0.7521	10.7651	6.7443	0.0531	1.0824	1.3493	1.2836	0.9133	0.0256	340	20	209	47	17	26	98	26	150	230	21	86	109
宍戸寺裏室№20	0.8010	11.2430	7.6127	0.0637	1.4225	0.9883	1.1278	1.1395	0.0294	435	24	229	46	19	30	119	28	94	234	22	96	120
宍戸寺裏室№21	0.7279	10.3386	6.9768	0.0543	1.0801	1.4374	1.2791	0.9578	0.0347	312	21	206	51	22	25	94	27	145	219	27	89	119

表2 試料の所属性と各種の値

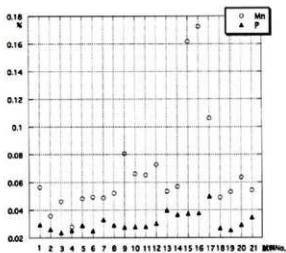
サンプル名	特 徴	推定 Si (%)	Ti/Al+Fe+Mg	K/Ca+Na	Ca/Na+K	掲載図No	出土遺構
宍戸寺裏室№01	粗砂多・チャート層中・細かいハケメ	30.13	0.0348	0.4083	0.4696	42	トレンチ9
宍戸寺裏室№02	粗砂多・チャート層多・細かいハケメ	32.99	0.0363	0.4591	0.3646	42	トレンチ9
宍戸寺裏室№03	粗砂多・チャート層多・細かいハケメ	32.68	0.0384	0.4760	0.3346	31	2・3室灰
宍戸寺裏室№04	粗砂多・チャート層多・細かいハケメ	31.27	0.0327	0.5891	0.3036	26	2室
宍戸寺裏室№05	粗砂少ない・粗いハケメ	29.12	0.0400	0.3648	0.5468	30	2・3室灰
宍戸寺裏室№06	粗砂少ない・粗いハケメ	28.77	0.0385	0.4252	0.5221	42	トレンチ9
宍戸寺裏室№07	粗砂少ない・粗いハケメ	29.23	0.0384	0.3612	0.5664	22	2室灰
宍戸寺裏室№08	粗砂少ない・粗いハケメ	28.85	0.0396	0.3578	0.5790	23	2室灰
宍戸寺裏室№09	粗砂少ない・粗いハケメ	30.09	0.0430	0.3464	0.4437	19	1・2室灰
宍戸寺裏室№10	粗砂少ない・角四石・粗いハケメ	29.86	0.0425	0.2912	0.4694	22	2室灰
宍戸寺裏室№11	赤色粒少量散在・軽石?散在・1mmハケメ	29.18	0.0411	0.3491	0.6194	30	2・3室灰
宍戸寺裏室№12	赤色粒少量散在・軽石?散在・1mmハケメ	27.60	0.0390	0.3532	0.6728	22	2室灰
宍戸寺裏室№13	赤色粒少量散在・軽石?散在・1mmハケメ	29.06	0.0364	0.3392	0.6417	30	2・3室灰
宍戸寺裏室№14	赤色粒少量散在・軽石?散在・1mmハケメ	27.97	0.0334	0.4753	0.5316	9	1室
宍戸寺裏室№15	赤色粒少量散在・軽石?散在・1mmハケメ	28.40	0.0395	0.4523	0.5161	37	5室
宍戸寺裏室№16	赤色粒少量散在・軽石?散在・1mmハケメ	28.22	0.0391	0.4420	0.5296	37	5室
宍戸寺裏室№17	形象埴輪(馬)・粗いハケメ(3mm)・赤色粒散在	27.93	0.0370	0.3890	0.6422	36	3・4室灰
宍戸寺裏室№18	形象埴輪・細かいハケメ(1.5mm)・粗砂無	28.81	0.0404	0.3452	0.6393	25	2室灰
宍戸寺裏室№19	形象埴輪・粗いハケメ(3~4mm)・粗砂少ない	29.04	0.0405	0.3469	0.6142	24	2室灰
宍戸寺裏室№20	形象埴輪・ハケメ(1.5mm表・3mm裏)・粗砂少	27.93	0.0395	0.5382	0.4363	32	2・3室灰
宍戸寺裏室№21	形象埴輪・ハケメ(1.5mm)・粗砂少ない・角四石	29.01	0.0391	0.3526	0.6426	25	2室灰



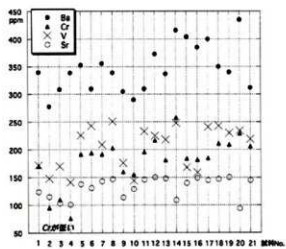
1. Al · Fe



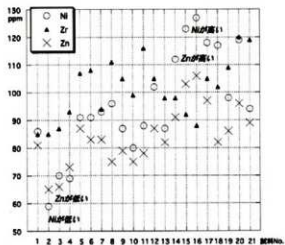
2. Na · Mg · Ca · K · Ti



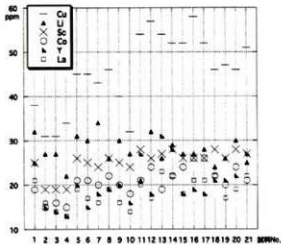
3. Mn · P



4. Ba · Cr · V · Sr



5. Ni · Zr · Zn



6. Cu · Li · Sc · Co · Y · La

図1 試料別元素濃度

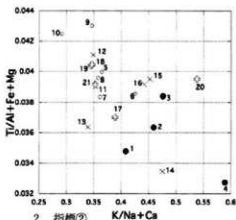
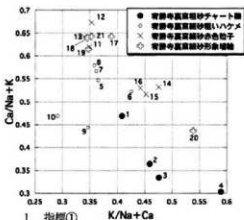
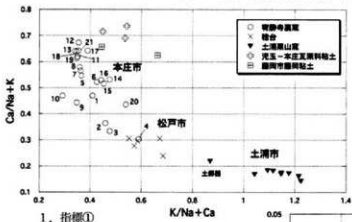
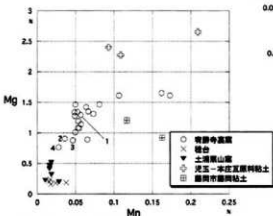


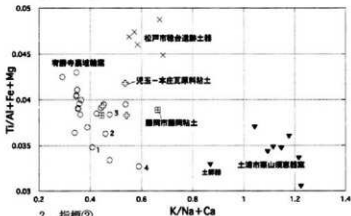
図2 宍野寺裏瀛出土陶輪の化学成分の特徴



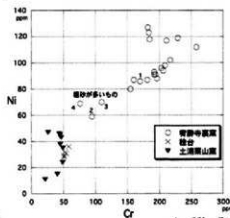
※児玉一本庄瓦原料粘土と藤岡市藤岡粘土の分析値は五十嵐・藤貫(1981)・五十嵐ほか(1983)に報告されているそれぞれの元素の酸化物の値から算出した。



3. Mg-Mnの相関



2. 指標②



4. Ni-Crの相関

図3 各地の土器・藤岡粘土の化学成分との比較

VIII 調査成果の検討と今後の課題

1 調査成果の検討

今回のⅡ・Ⅲ次調査では、当初に掲げた目的の悉くを達成しえたわけではないが、窯の総数、形状、規模、所在範囲など、1次調査で得られていた従来の情報に加え、多くの知見を新たに得ることができた。以下に、前章まで述べてきた調査成果に関して、現状での評価を加えておきたい。

(1) 窯の総数・規模・所在範囲

このたびの調査では、総数5基の埴輪窯の存在を確認できた。1次調査の時点で、すでに3基の埴輪窯を確認していたが、その際に「3号埴輪窯跡」とされた遺構は2基の埴輪窯の重複であることが判明し、さらにその上方斜面に別の1基を検出したことにより総計5基を確認するに至った。

埴輪窯の平面形は、規格が明瞭な5号窯の場合でみると、隅丸方形を呈する前底部に狭長い焼成部が連続する形状を呈し、前底部と焼成部が比較的明瞭である。規模は前底部幅約2.4～3.7m、焼成部長約3.1～3.7m、同幅約0.8～1.6mを測る。

埴輪窯の所在する範囲については、1次調査の成果とあわせ、窯群の西・南・北側の限界をほぼ確定できた。1号窯の北側に設定したトレンチ1では遺物焼土炭化物が全く検出できず、1号窯が窯群の北端に位置することが明らかとなった。また、窯群に近い尾根上に設定したトレンチ21・22でも遺構は皆無であった。

いっぽう、トレンチ15a・15b・16a・16bの調査では相当量の埴輪片が出土し、窯群下方の東側斜面には丘陵の裾部に至るまで、灰原ないしは灰原から流出した二次堆積層が発達していることが判明した。とくに、トレンチ15aでは表土層下に埴輪片を多量に包含する黒色土が厚く堆積しており地山面の検出が困難な状況であった。江南町姥ヶ沢遺跡などのように、古い窯の焼成部を新しい窯の前底部に利用し、丘陵斜面の下方から上方へ順次窯を構築していく事例もあることから、これら灰原の下層には1～5号窯に先行する埴輪窯が存在している可能性も否定できず、実際の窯数は5基を上回る場合もあると考える。

窯に直接関係して出土した遺物は埴輪のみで、土師器、石製品などの遺物は検出しえなかった。確認できる器種に円筒、家、大刀、靱、靱、髷、人物、馬がある。円筒埴輪は、2条突帯3段構成の小型品で、破片を含め3条突帯以上の製品は存在しない。透孔はすべて円形である。形象埴輪では、人物は全身立像も製作している。

(2) 操業時期

操業時期は、1次調査の報告において、6世紀前半以降の年代が想定された(橋本ほか1980)。今次の調査で出土した資料から導かれる年代も同様である。円筒埴輪は、二次調整を施す例が皆無で、点数は少ないながら板押圧による底部調整を認める。いっぽう、形象埴輪には、器財の占有率が高い。1号埴輪窯の埴輪集中では、靱、髷が良好な状態で出土し、大刀、髷の存在も確認できる。

児玉地域での底部調整の出現は、6世紀前葉から中葉で須恵器MT15～TK10段階のことと推測さ

れている(坂本1985)。また、上野・武蔵地域で器財埴輪が一般化するの6世紀前葉・須恵器 MT15段階以降である。これらのことから、宥勝寺裏埴輪窯の操業時期については、6世紀前半以降とする従来の見解を変更する必要はないと考える。そのなかでさらに時期を限定すなら、2条突帯3段階成の円筒埴輪を主体的に生産している事実を、主として群集墳の造営に対応した操業と考えれば、同時に生産している器財埴輪が、群集墳において普遍的に導入ようになる新式群集墳の造営開始期、6世紀後葉・須恵器 TK43段階を中心とする時期が考えられよう。

(3) 工房の所在

5号埴輪窯南西方の尾根上に検出した1・2号竪穴状遺構には、埴輪生産に関連する遺構の可能性を考えた。ともに埴輪窯に近接し、周辺に同様の竪穴住居がなく集落を形成していない。1号竪穴状遺構では、確認面の覆土中に人物全身立像の脚部、台部の破片を検出した。遺構外縁線を観察する限りカマド存在を確認できず、埴輪以外に土器片が出土していない。

工房としての認定は、粘土溜りや未焼成品の検出をもってなされる必要がある、上のような状況から、今は1・2号竪穴状遺構に工房としての可能性が存在することのみを確認しておきたい。

(4) 埴輪胎土の自然科学的分析

すでに前章で述べられているように、宥勝寺裏埴輪窯出土埴輪の胎土は、肉眼観察から2種に大別できる。ひとつは、粗砂を多く含み、径5～8mmほどのチャート礫を疎らに含むタイプ、他のひとつは、粗砂をほとんど含まず粘土を主体とする精良なタイプである。円筒埴輪の観察で1類としたものが前者に、2・3類としたものが後者に該当し、また、形象埴輪の観察で、胎土に粗砂を多量に含むとしたものが前者に、若干の微細な砂粒を含む、あるいは砂礫をほとんど含まないとしたものが後者に該当する。「プラズマ発光分析」(ICP/AES)による成分分析の結果は、肉眼観察による胎土の差異と、粘土成分の元素レベルでの差異に相関性が存在することを示した。すなわち、肉眼観察で異なる胎土と認定しえた資料は、用いられた粘土も元素レベルにおいて異なるということである。

このように粘土成分が相違する原因について、前章では、粘土採掘地がある程度異なっていたとする推測が述べられた。埴輪生産遺跡では、埴輪窯の近傍に粘土採掘場が存在する場合が多く、宥勝寺裏埴輪窯では粘土採掘場の有無は確認できないが、成分分析の結果は、少なくともいっぽうの粘土が他所から搬入されたことを推定させる。自然科学的手法による胎土分析を基に埴輪の生産地を同定する作業は、一般に生産遺跡出土資料の分析データを確保した上で、古墳出土資料の分析データに対比させることにより行われる。もとより、埴輪の産地同定の作業は、胎土の化学分析のみに依存するわけではなく、造形状の特徴、製作技法など、所属性の複合的検討を経てなされるのが通常であるが、宥勝寺裏埴輪窯の分析結果は、同一の生産遺跡であっても、埴輪製作に用いられる粘土採掘地が1箇所ではない場合の存在することは今後に注意を要する。

いっぽう、今回試みた「プラズマ発光分析」(ICP/AES)によって、従来の手法では分離が不可能であった資料についても細別が可能となる見通しが得られた。とくに兎玉地域のように狭い範囲に多くの埴輪生産遺跡が存在する場合であっても、多元素を分析対象とすることで、遺跡ごとに胎土の化学組成上の差異を抽出できる可能性を確認できた点は貴重な成果であった。

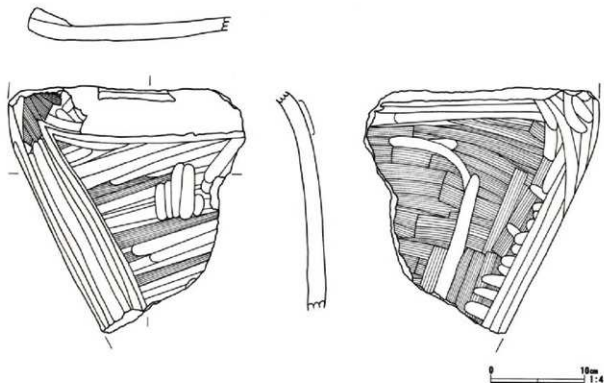


図57 赤坂埴輪窯出土家形埴輪実測図

2 今後の課題

今回の調査では、以上に見た成果が得られたいっぽうで、以後に残された課題も少なくない。

窯群下方の東側斜面にあたるトレンチ15a・15b・16a・16bの周辺では灰原ないしは灰原から流出した二次堆積層が発達し、地山面の検出が困難な状況であったことから、埴輪窯の総数を把握するという点において課題が残った。

5号埴輪窯南西方の尾根上に検出した1・2号堅穴状遺構には工房としての可能性を考えたが、状況に矛盾点が存在しないというのみで、確たる証左が存在するものではない。

宥勝寺裏埴輪窯製品の需給関係の解明はすべて今後の課題として残された。宥勝寺裏埴輪窯の北東約3kmの至近に所在する赤坂埴輪窯は、出土した切妻造の家形埴輪から、6世紀後葉段階に年代の一端が置かれ、両窯の操業時期は並行ないし連続するものであった可能性が高い。6世紀代の児玉地域には、この両窯以外にも美里町字佐久保埴輪窯、児玉町八幡山窯などの存在が知られ、狭い域内に少規模の埴輪生産遺跡が複数存在する。これらを埴輪生産遺跡がすべて同時期の操業とは限る必要はないが、消費地である古墳の一括資料を見ても、胎土レベルで個体間の差異が認められることはむしろ一般的であり、埴輪の需給関係はおおよそ単純ではない。

ただし、今回の「プラズマ発光分析」(ICP/AES)では、従来の手法では分離が不可能であった資料についても細別が可能となる見通しが得られた点は重要である。従来の形態的技法的分類に、自然科学分析のデータを加味しつつ、所属性の相関を抽出し類型設定を行う作業が、埴輪の需給関係を解明するうえで当面必要となろう。

【文 献】

- 新井 端 1998 「鈍ヶ沢埴輪窯の構造と変遷と時代」『千代遺跡群—弥生・古墳時代編—』江南町千代遺跡群発掘調査報告書2 江南町教育委員会・江南町千代遺跡群発掘調査会 1998 大里郡江南町 pp. 274-277.
- 橋本博文・佐々木幹雄ほか 1980 「有勝寺北裏遺跡」有勝寺北裏遺跡調査会 東京.
- 本 庄 市 1986 「本庄市史」通史編1 本庄.
- 今泉泰之ほか 1981 「割山遺跡」深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 深谷市割山遺跡調査会 深谷.
- 今泉泰之・田中正夫・関義則 1982 「割山遺跡(第3次)」深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 深谷市教育委員会 深谷.
- 松本 完 2002 「大久保山遺跡浅見山1地区(第2次)・北堀前山古墳群(第2・3次)発掘調査報告書—新幹線本庄新駅(仮称)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査1—」本庄市遺跡調査会報告第6集 本庄市遺跡調査会 本庄.
- 水村孝行・今井 宏・岡村和子・井上高明・横川好富 1982 「桜山窯跡群」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第7集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 大里郡大里村.
- 南毛古墳文化研究会 2001 「本庄市域における古式古墳調査の成果と課題」第5回群馬古墳時代研究会・南毛古墳文化研究会合同検討会資料 本庄.
- 小沢園平 1964 「割山埴輪窯遺跡」深谷市教育委員会 深谷.
- 小沢園平 1964 「江南・権現山埴輪窯址」『台地研究』No.14 台地研究会 東松山 pp.1-7.
- 埼 玉 県 1982 「新編埼玉県史」資料編2 原始・古代 弥生・古墳 浦和 pp.938.
- 坂本和俊 1985 「埼玉県における円筒埴輪編年の諸問題」『埴輪の変遷—その普遍性と地域性—』北武蔵古代文化研究会 pp.63-69.
- 澤出見越 1986 「割山遺跡(第5次)」深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 深谷市教育委員会 深谷.
- 塩野 博・増田逸朗・駒宮史朗 1978 「馬室埴輪窯跡群」埼玉県埋蔵文化財調査報告 第7集 埼玉県教育委員会 浦和.
- 菅谷浩之 1976 a 「下野堂遺跡」『本庄市史』資料編 考古資料 本庄市 本庄 pp.59-62.
- 菅谷浩之 1976 b 「有勝寺北裏埴輪窯跡」『本庄市史』資料編 考古資料 本庄市 本庄 pp.100-103.
- 菅谷浩之 1976 c 「赤坂埴輪窯跡」『本庄市史』資料編 考古資料 本庄市 本庄 p.103.
- 鈴木徳雄 1983 「第II章 遺跡の地理的・歴史的環境」『阿知越遺跡I』児玉町文化財調査報告第3集 児玉町教育委員会 児玉郡児玉町 pp.3-6.
- 知久裕昭 2000 「割山遺跡(第6次)／市内遺跡確認—深谷市内遺跡XII」埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第64集 深谷市教育委員会 深谷.
- 知久裕昭 2001 「深谷市割山埴輪窯跡の調査」『情報』22 埼玉考古学会 大里郡大里村 pp.10-11.
- 山川守男・盛 敬彰・金子彰男・中村正明・橋本雅夫・松本和弘 1981 「新発見の埴輪窯跡群」『いぶき』12号 埼玉県立本庄高等学校考古学部 本庄 pp.29-40.
- 山崎 武ほか 1981 「生出塚遺跡」鴻巣市遺跡調査会報告書 第2集 鴻巣市遺跡調査会 鴻巣.
- 柳 進 1961 「児玉町八幡山埴輪焼場跡発掘調査報告書」埼玉県立児玉高等学校 児玉郡児玉町.
- 早稲田大学有勝寺北裏遺跡調査会 1979 「埼玉県本庄市前山有勝寺北裏遺跡発掘調査概要」東京.

写 真



埴輪塚の立地



Ⅱ次調査区埴輪塚全景

写真 2



1号埴輪窯確認状況



2号埴輪窯確認状況



1～2号埴輪窯確認状況



2～5号埴輪窯確認状況



3～5号埴輪窯確認状況



1号墳輪窯灰原墳輪集中 (1)



1号墳輪窯灰原墳輪集中 (2)



1号墳輪窯灰原墳輪集中 (3)



1号壁穴状遺構確認状況



1号方形周溝墓道構確認状況



1号方形周溝墓道構確認状況



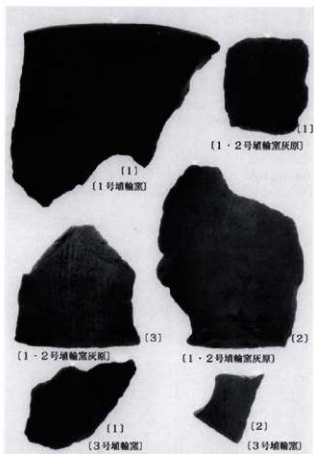
1号方形周溝墓遺物出土状況 (1)



1号方形周溝墓遺物出土状況 (2)



1号方形周溝墓遺物出土状況 (3)

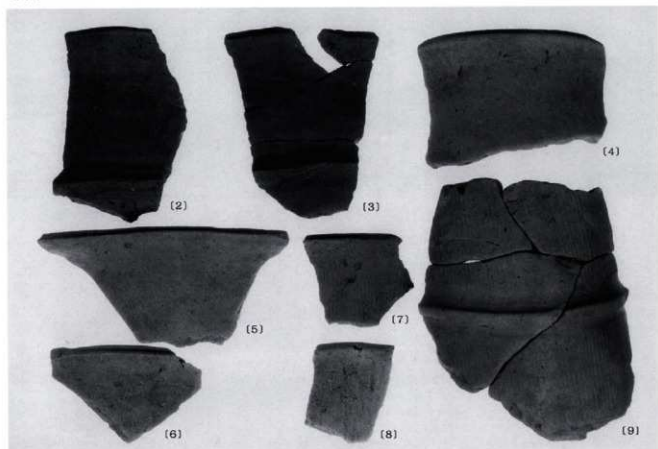


1号埴輪窯、1 · 2号埴輪窯灰原、3号埴輪窯出土円筒埴輪

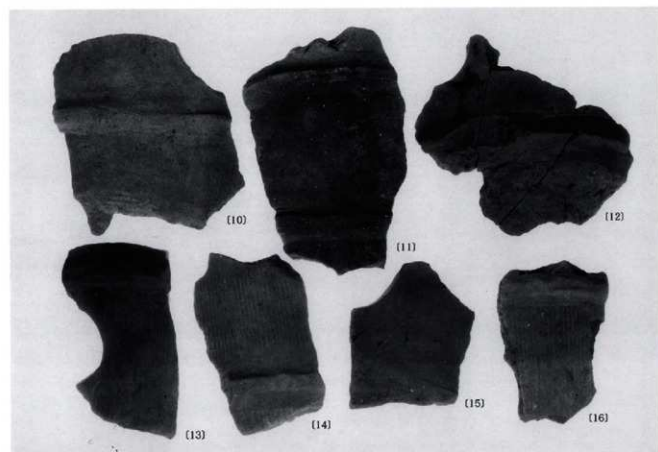


2号埴輪窯灰原出土円筒埴輪 (No. 1)

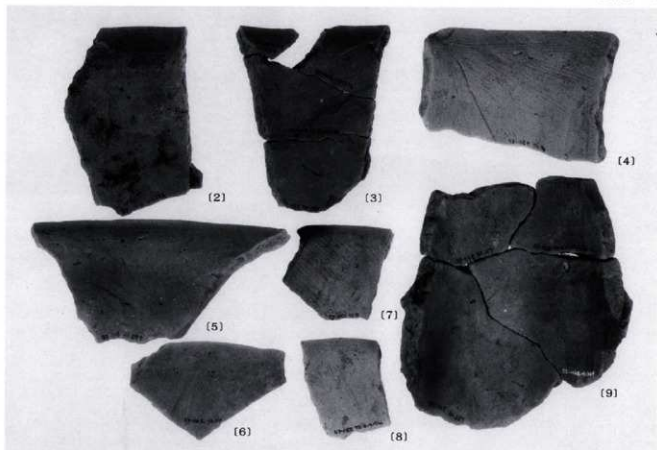




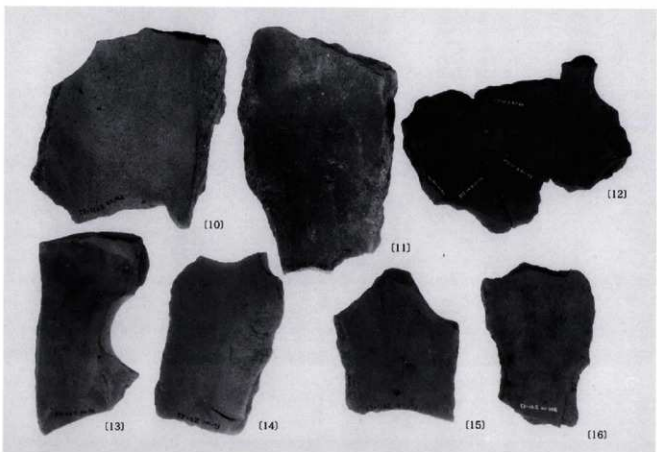
2号埴輪窯灰原出土円筒埴輪 (No.2~9表)



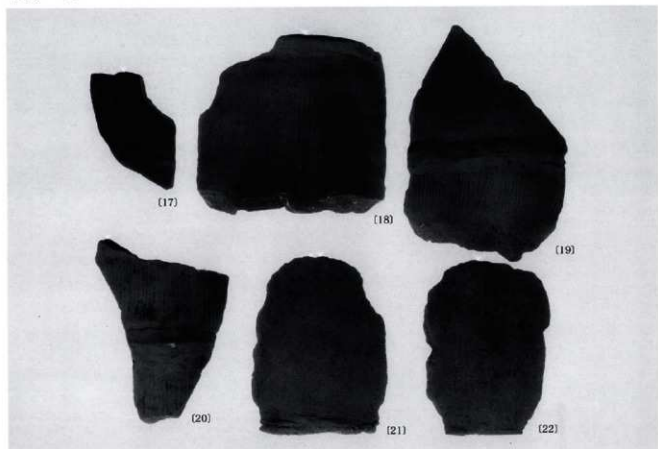
2号埴輪窯灰原出土円筒埴輪 (No.10~16表)



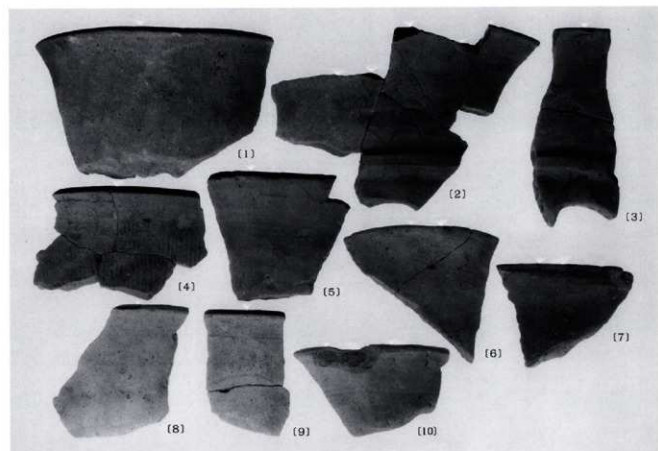
2号埴輪窯灰原出土円筒埴輪 (No.2~9裏)



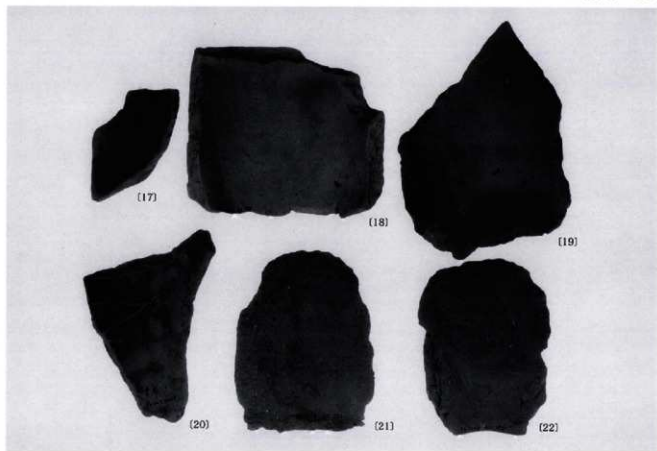
2号埴輪窯灰原出土円筒埴輪 (No.10~16裏)



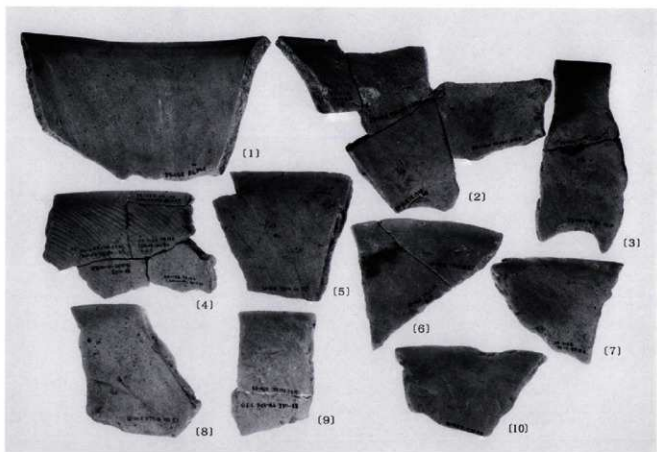
2号埴輪窯灰原出土円筒埴輪〔No.17~22表〕



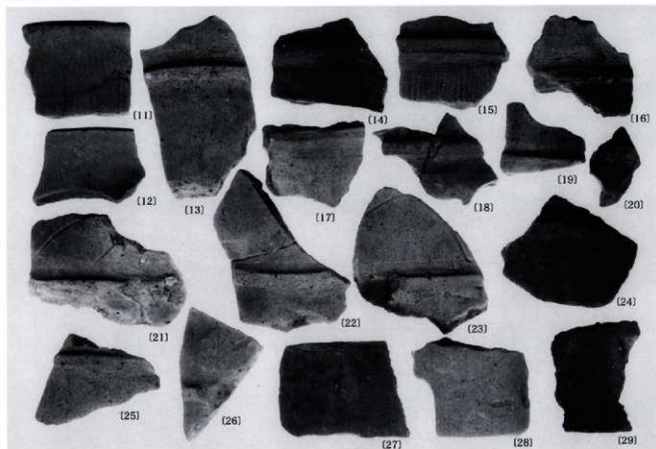
2・3号埴輪窯灰原出土円筒埴輪〔No.1~10表〕



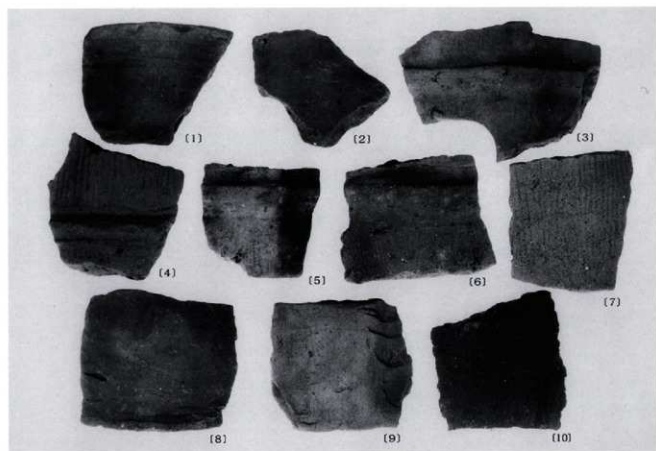
2号埴輪窯灰原出土円筒埴輪 (No.17~22表)



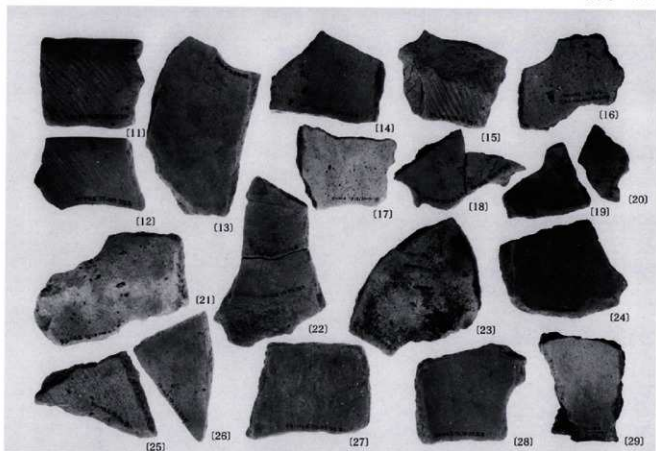
2・3号埴輪窯灰原出土円筒埴輪 (No.1~10裏)



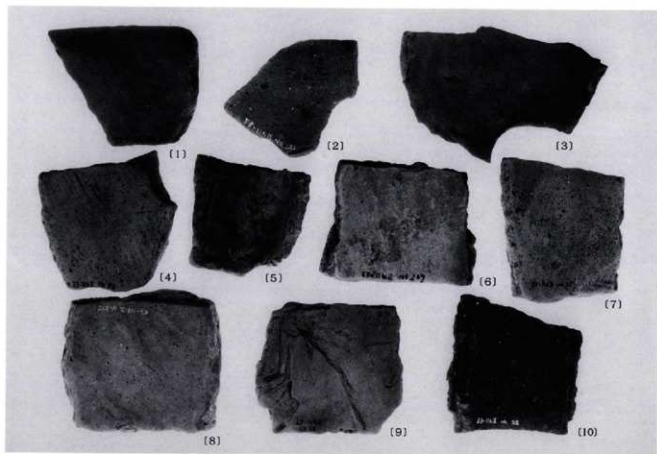
2・3号埴輪窯灰原出土円筒埴輪 (No.11~29表)



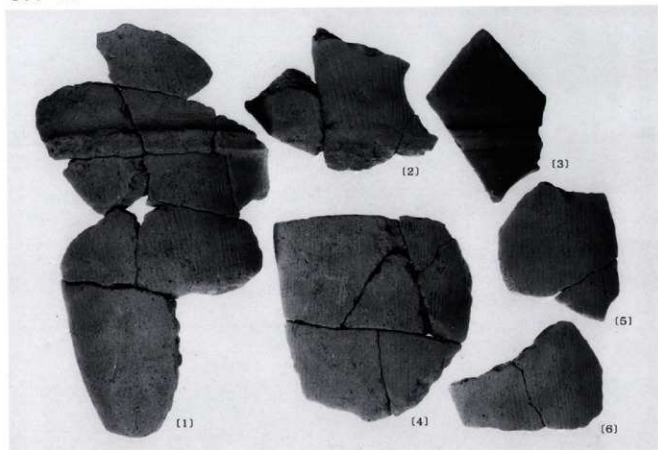
3・4号埴輪窯灰原出土円筒埴輪 (No.1~10表)



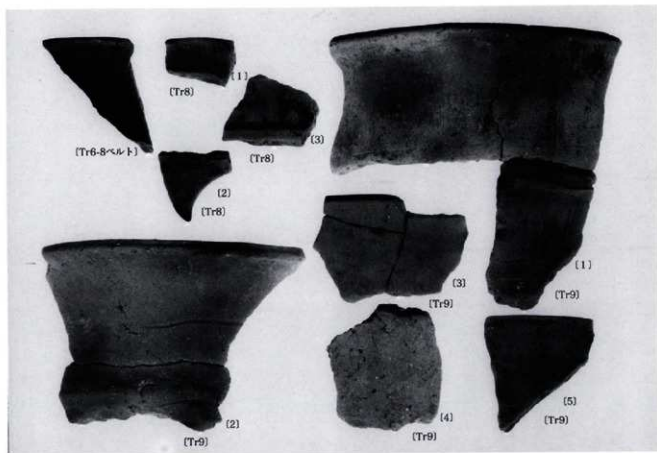
2・3号埴輪窯灰原出土円筒埴輪 (No.11~29裏)



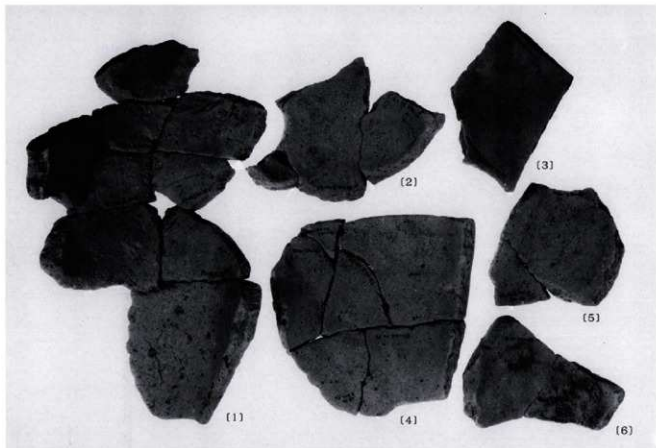
3・4号埴輪窯灰原出土円筒埴輪 (No.1~10裏)



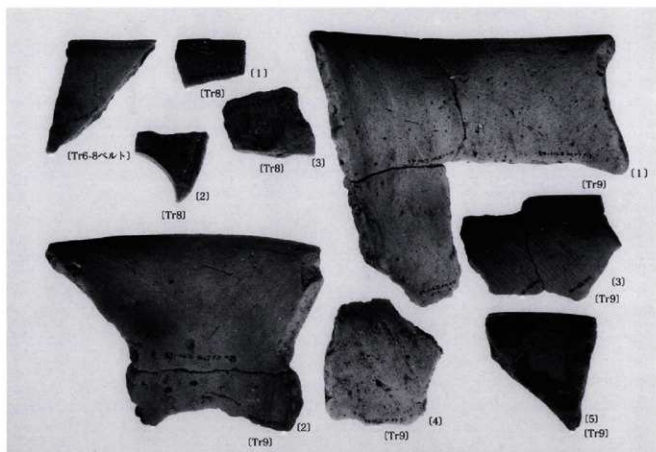
5号埴輪窯出土円筒埴輪 (No.1~6表)



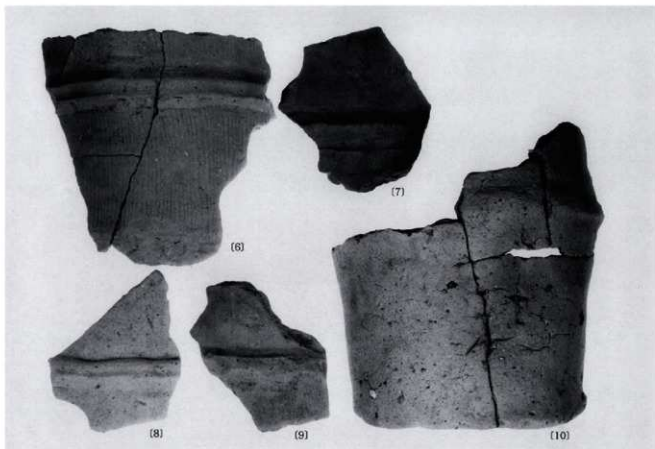
トレンチ6-8ベルト、トレンチ8 [1~3]、トレンチ9 [1~5] 出土円筒埴輪 [表]



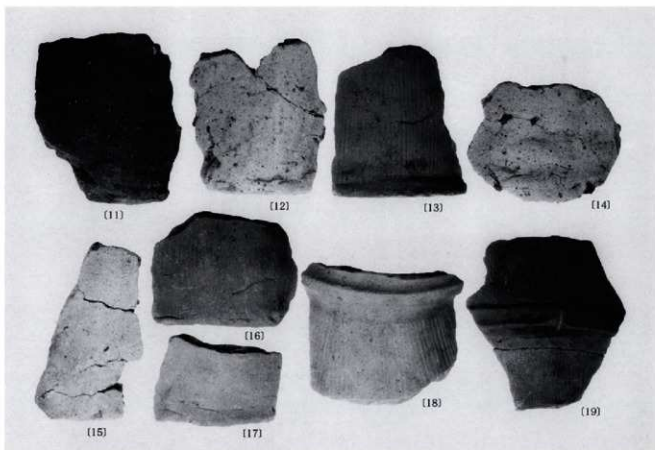
5号埴輪窯出土円筒埴輪 (No. 1~6裏)



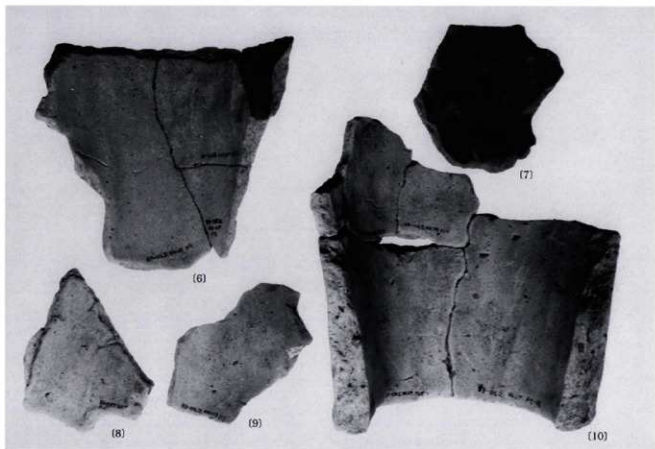
トレンチ6-8ベルト、トレンチ8 [1~3]、トレンチ9 [1~5] 出土円筒埴輪 [裏]



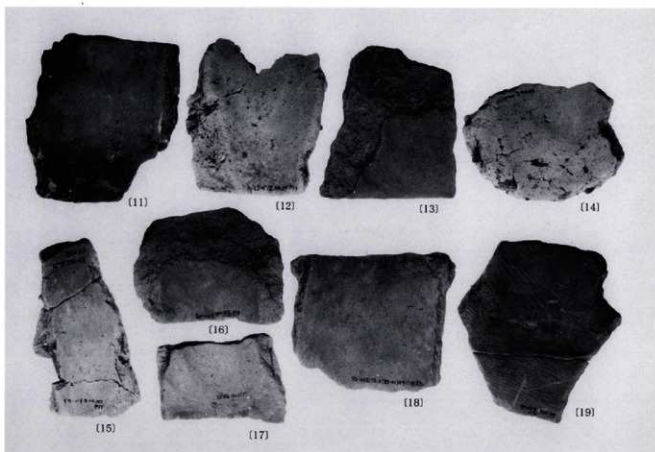
トレンチ9出土円筒壺輪 [No.6~10表]



トレンチ9出土円筒・朝顔形壺輪 [No.11~19表]



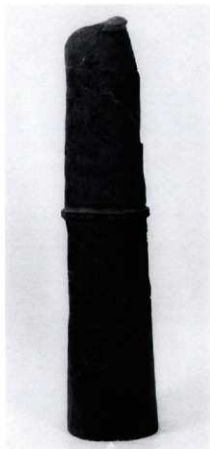
トレンチ9出土円筒埴輪【No.6~10裏】



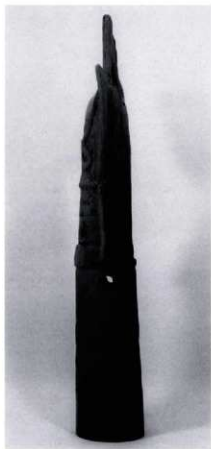
トレンチ9出土円筒・朝顔形埴輪【No.11~19裏】



1号埴輪窯灰原出土形象埴輪 (No. 1)



1号埴輪窯灰原出土形象埴輪 (No. 1)



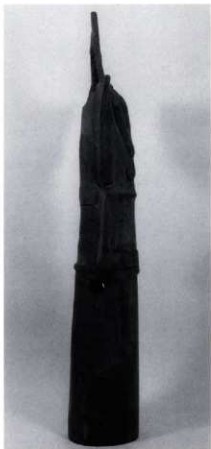
1号埴輪窯灰原出土形象埴輪 (No. 2)



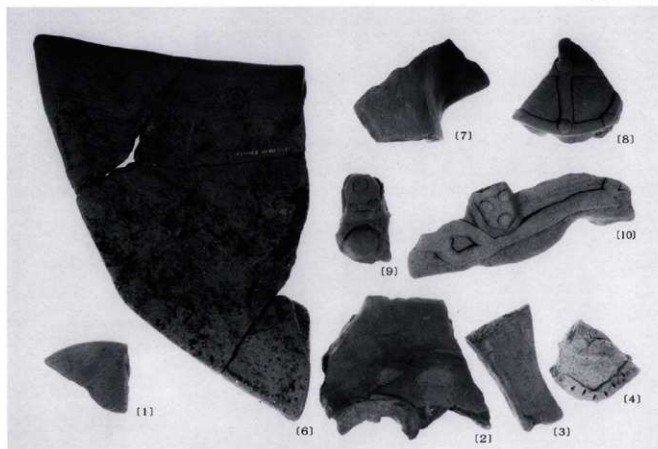
1号埴輪窯灰原出土形象埴輪 (No. 3)



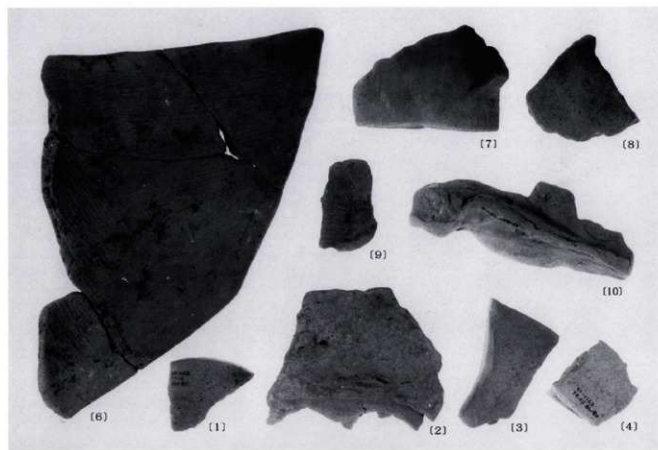
1号埴輪窯灰原出土形象埴輪 (No.4)



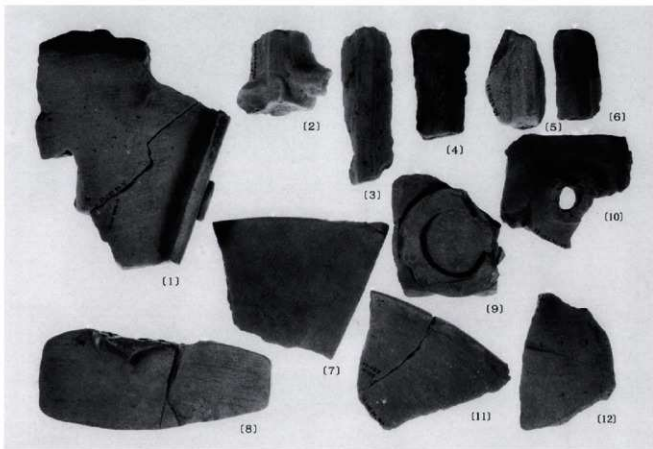
1号埴輪窯灰原出土形象埴輪 (No.5)



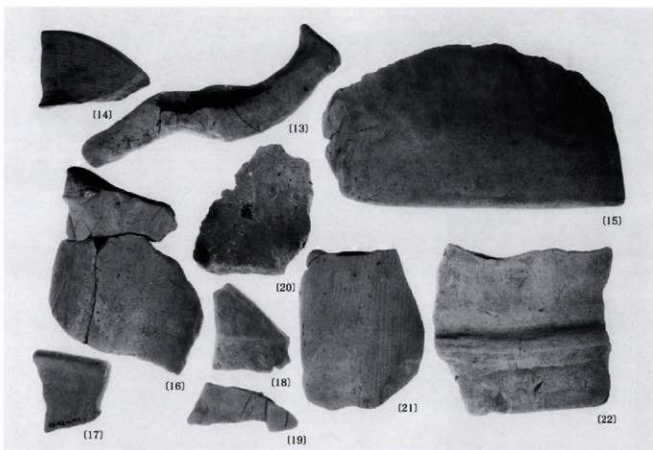
1号埴輪窯灰原 [6~10]、1・2号埴輪窯灰原 [1~4] 出土形象埴輪



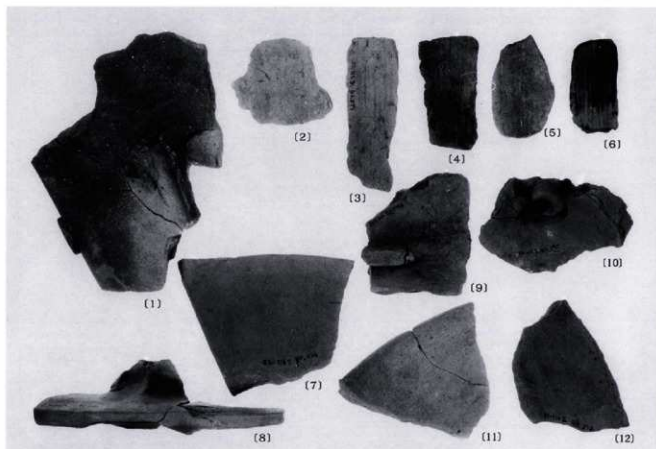
1号埴輪窯灰原 [6~10]、1・2号埴輪窯灰原 [1~4] 出土形象埴輪



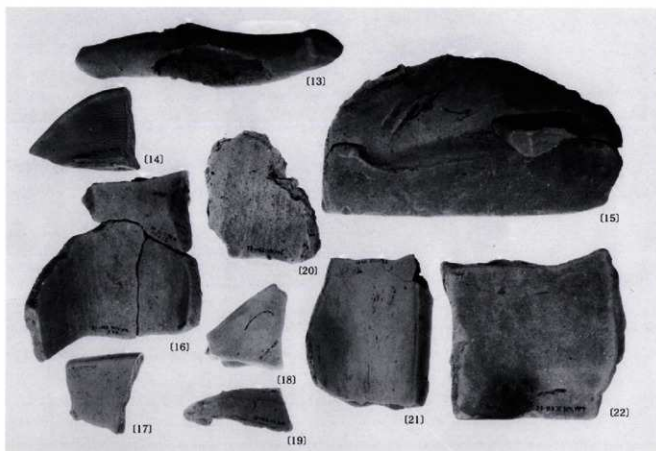
2号埴輪窯灰原出土形象埴輪 (No. 1~12)



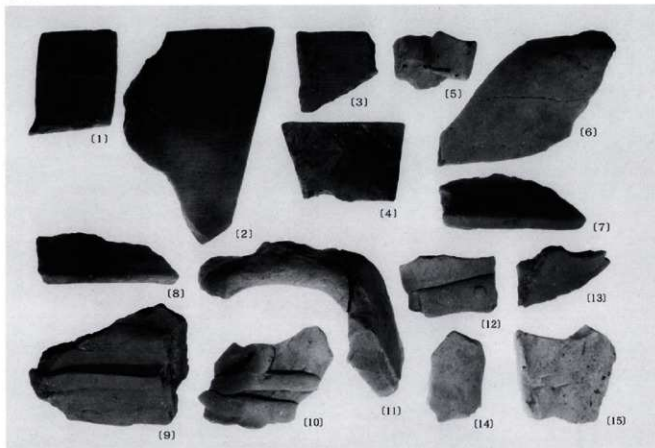
2号埴輪窯灰原出土形象埴輪 (No. 13~22)



2号埴輪窯灰原出土形象埴輪 (No. 1~12)



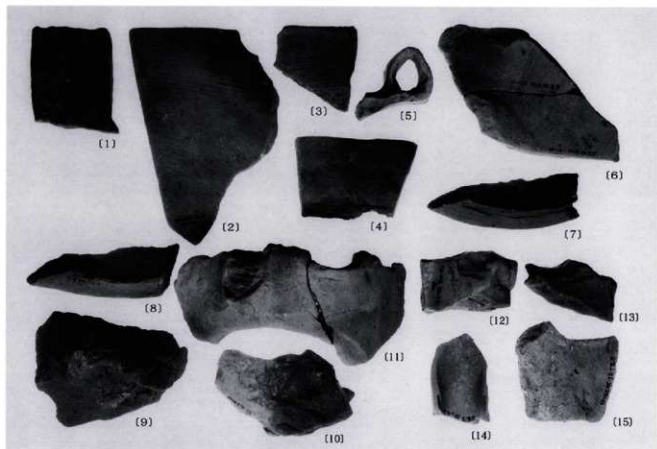
2号埴輪窯灰原出土形象埴輪 (No. 13~22)



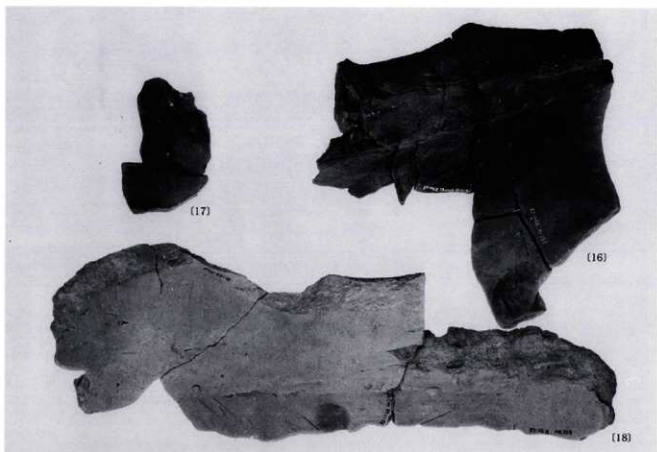
2・3号埴輪窯灰原出土形象埴輪 [No.1~15]



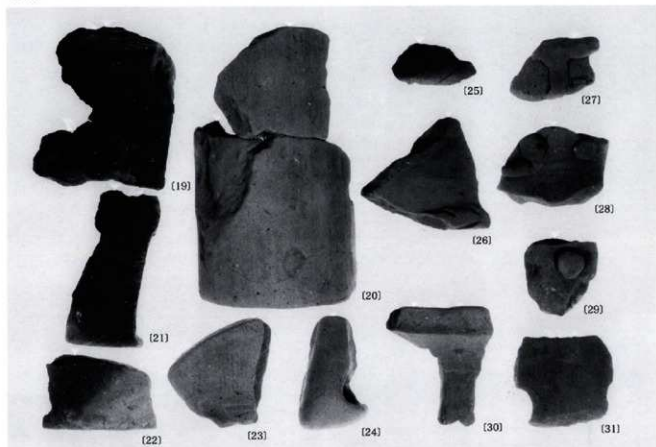
2・3号埴輪窯灰原出土形象埴輪 [No.16~18]



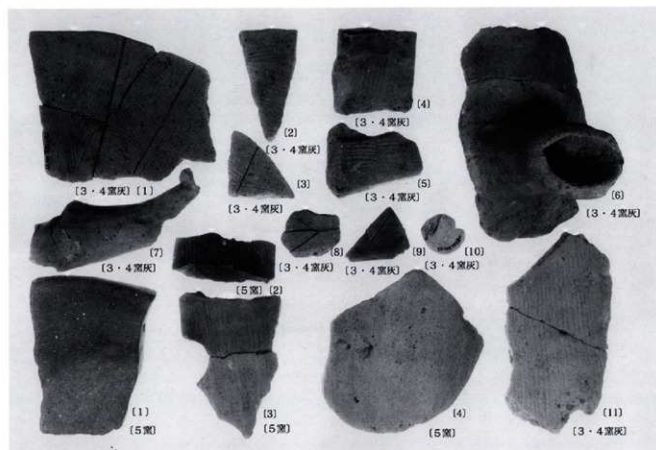
2・3号埴輪窯灰原出土形象埴輪 (No. 1~15)



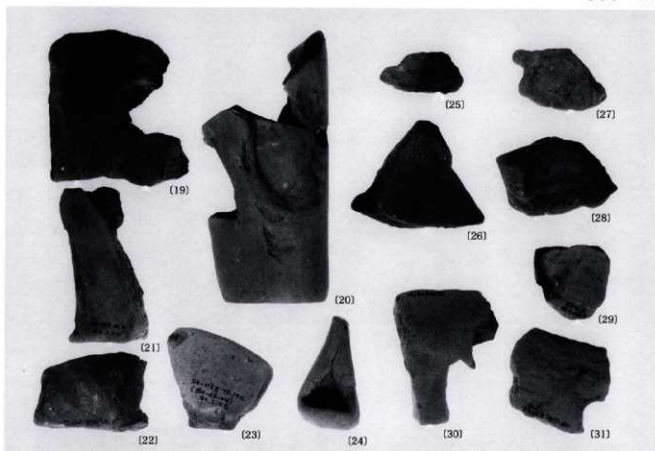
2・3号埴輪窯灰原出土形象埴輪 (No. 16~18)



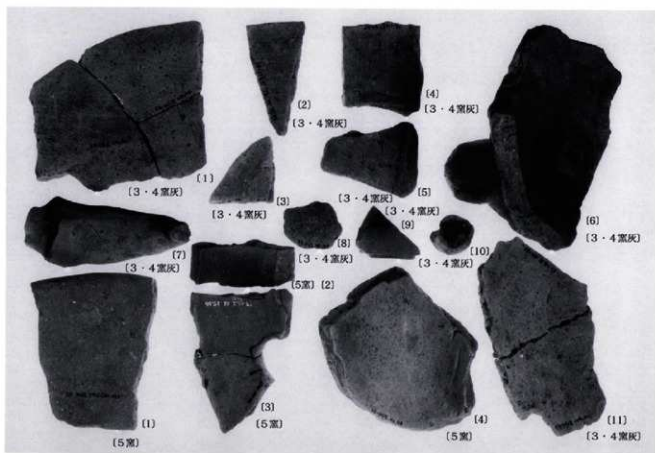
2・3号埴輪灰原出土形象埴輪 [No.19~31]



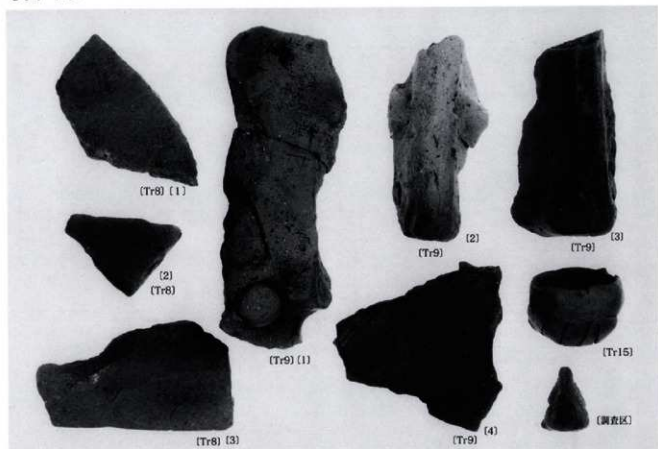
3・4号埴輪灰原 [1~11]、5号埴輪灰 [1~4] 出土形象埴輪



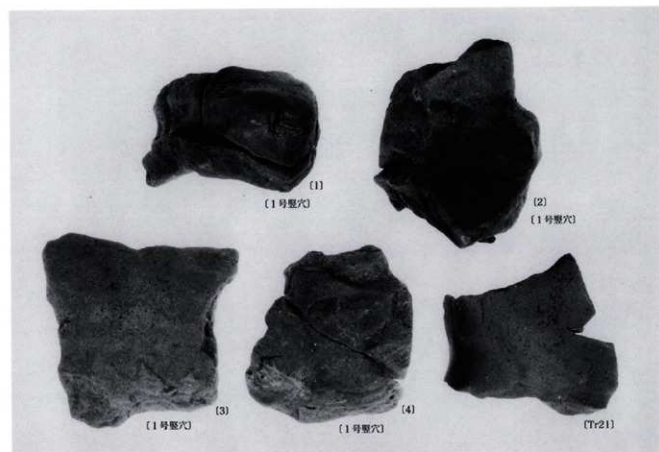
2・3号埴輪窯灰原出土形象埴輪 (No.19~31)



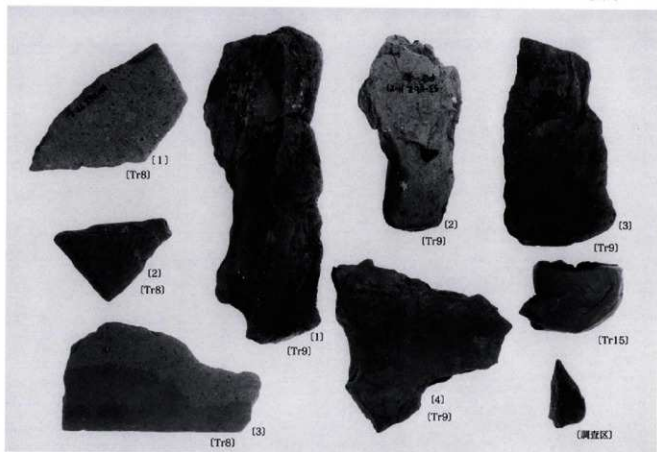
3・4号埴輪窯灰原 [1~11]、5号埴輪窯 [1~4] 出土形象埴輪



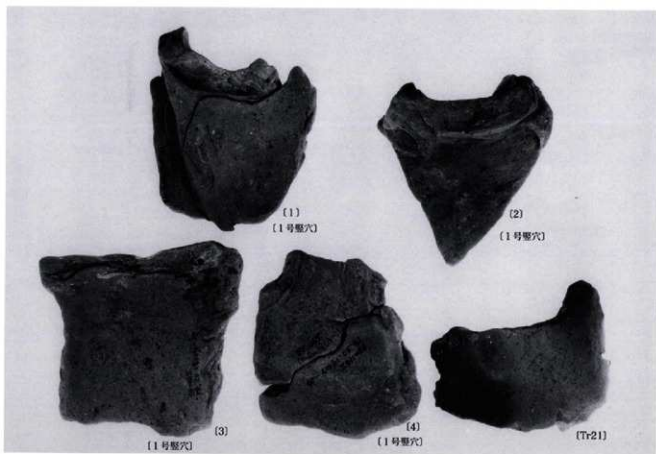
トレンチ8 [1~3]、トレンチ9 [1~4]、トレンチ15、Ⅱ次調査区出土形象埴輪



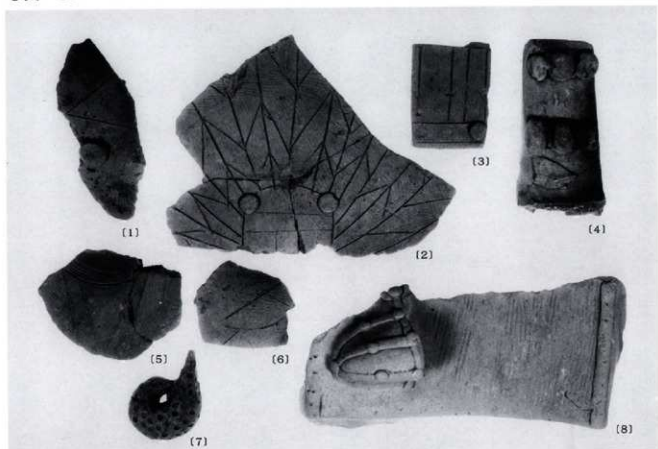
1号壑穴状遺構 [1~4]、トレンチ21出土形象埴輪



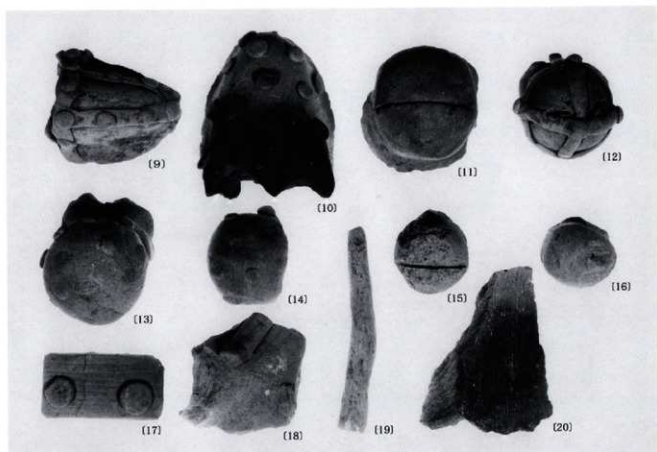
トレンチ8 [1~3]、トレンチ9 [1~4]、トレンチ15、Ⅱ次調査区出土形象埴輪



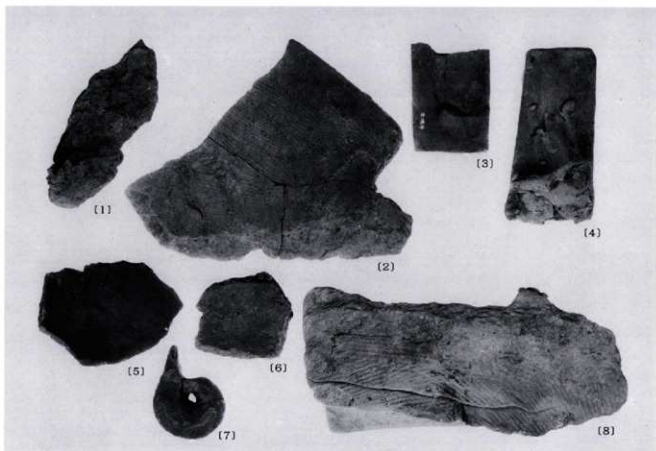
1号壑穴状遺構 [1~4]、トレンチ21出土形象埴輪



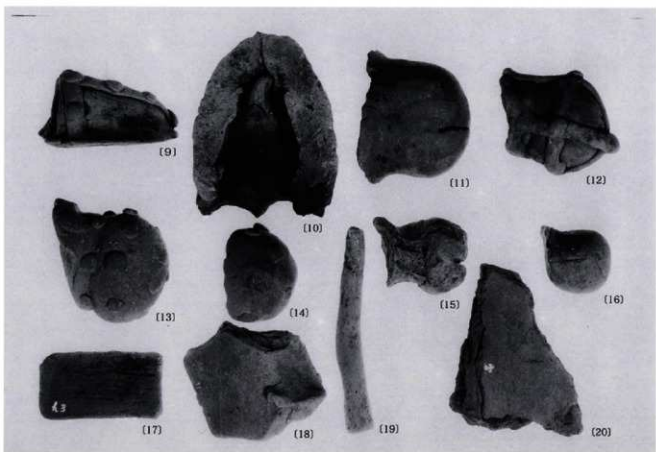
表面採集形象埴輪 (No. 1~8)



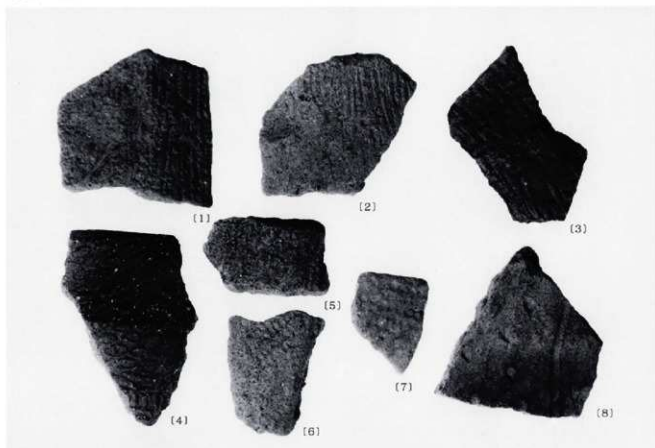
表面採集形象埴輪 (No. 9~20)



表面採集形象埴輪【No.1～8】



表面採集形象埴輪【No.9～20】



Ⅱ次調査区出土縄文土器 (No. 1～8)



赤坂埴輪窯出土家形埴輪



トレンチ21 出土土師器 (No. 1・2)



1号周溝墓出土土師器 (No. 1・2)



1号周溝墓出土土師器 (No. 3・4)



報告書抄録

ふりがな	しないいせきはつくつちょうさほうこくしょ ゆうしょうじうらにはわかまあと ゆうしょうじきたうら							
書名	市内遺跡発掘調査報告書 有勝寺裏埴輪窯跡・有勝寺北裏							
副書名	本庄新都心土地区画整理事業に伴う遺跡範囲確認調査報告書							
巻次								
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	太田博之							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会 電話 0495-25-1186							
発行年月日	西暦2003(平成15)年3月31日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
有勝寺裏埴輪窯跡	埼玉県本庄市大字北堀字前山	53	116	36°12'54"	139°11'16"	2001.09.06～ 2003.03.31	12.140㎡	区画整理
有勝寺北裏遺跡	同	53	109	36°12'52"	139°11'15"			
所取遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
有勝寺裏埴輪窯跡	埴輪窯	古墳時代後期		埴輪窯5、竪穴状遺構2		埴輪、土師器		
有勝寺北裏遺跡	周溝墓集落	古墳時代前後 縄文時代草創期～ 縄文時代後期 古墳時代後期～ 平安時代		周溝墓5 竪穴住居34、土壇53		土師器 縄文土器 土師器、須恵器		

市内遺跡発掘調査報告書

宍勝寺裏壇輪窯跡・宍勝寺北裏

本庄新都心土地区画整理事業に伴う遺跡範囲確認調査報告書

平成15年3月28日 印刷

平成15年3月31日 発行

発行/本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1186

印刷/朝日印刷工業株式会社

